



Title	放課後の子どもたちの日常生活
Author(s)	佐藤, 公治; SATO, Kimiharu
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 82, 1-71
Issue Date	2000-12
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.82.1">https://doi.org/10.14943/b.edu.82.1</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28813">https://hdl.handle.net/2115/28813</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	82_P1-71.pdf



# 放課後の子どもたちの日常生活

佐藤 公治

## A Study of the Off—Campus Activities among the Grade School Children

Kimiharu SATO

### 目 次

I. はじめに .....	2
II. 子どもの生活と遊びはどのように研究されてきたか .....	4
1. 地域変動と遊び・遊び文化の変容 .....	4
2. 子どもの日常生活と遊び .....	9
III. 「学校週5日制」の下での子どもたちの日常生活と遊びの実態 .....	15
1. 調査の目的と方法：子どもたちの1週間の生活と遊びに対する意識 .....	15
2. 子どもたちの遊びの実態と遊びに対する意識 .....	16
3. 子どもたちの1週間の生活 .....	39
4. 子どもたちの学校休日の過ごし方 .....	47
IV. 冬季間の子どもたちの生活と遊び .....	55
1. 冬期間・平日の子どもたちの過ごし方 .....	55
2. 冬期間・休日の子どもの過ごし方 .....	59
3. 冬期間・休日の特別な活動 .....	62
V. 地域による子どもたちの学校休日の過ごし方の違い .....	63
VI. まとめと今後の課題 .....	66

たいていの心理学者が、遊びは客観的に規定できる行為の形式として存在する、という前提から出発する。その前提条件を言いかえてみるなら、ある種のおこないは、じっさいに、疑う余地なく遊ぶ行為である、ということである。つづいて彼らは、それらの行為を説明し、そこから機能を検出する。ところが第一に肝心の課題とは、遊びの意味作用をうまく表現しようとする前に、またそれについての説明を与える前に、実は、遊びという実在そのものを確認することなのだ。……心理学者は、遊ぶとは《何であるか》ということは語るけれども、子どもが《はたして》遊んでいるかどうかは語らないし、子どもが遊んでいると認定しうるための特徴は何かという点についても、語りはしない。

(ジャック・アンリオ「遊び—遊ぶ主体の現象学へ」白水社、  
佐藤信夫訳、1973年 p. 83-84)

## I. はじめに

1992年(平成4年)9月にいわゆる「学校週5日制」が毎月1回、第2土曜日に部分的に開始されてから8年が経過している。現在は、1995年(平成7年)4月から始まった月2回(第2、第4週の土曜日)の土曜休日が継続しており、2002年にはすべての土曜日が学校休日になる「完全学校週5日制」が実施される。

本論は、1985年に実施された子どもの遊びと日常生活の調査研究と同じ地域で、学校週5日制が始まった1992年の土曜休日を含む1週間の生活時間調査を再度実施し、これらの二つの調査結果の比較を通して、子どもたちの家庭、地域における遊びと日常生活の実態と変容を明らかにしていこうとするものである。そして、将来的には「完全学校週5日制」が実施される2002年以降にもう一度、同じ調査を実施し、地域を固定させた「定点観測」による変動を探ることを最終的な課題としている。本論では、児童・生徒を巡る議論を展開していくうえで、まずもって、私たちの身近にいる児童・生徒の活動と生活の様子を抽象的な形ではなく、また地域の実態とも関連づけながら把握することが第1の基礎作業であると考え。特に、2年後に控えた「完全学校週5日制」の開始の前に、私たちが「心して置くべき」児童生徒の生活実態を現時点で整理しておくということである。

長年遊びと遊び空間について調査研究を続けてきた都市建築家の仙田満は、子どもの遊びと遊び文化は二つの時期で大きな変容をみせてきたと言う。第1期は1960年をピークに、70年台の始めまでの高度経済成長による開発が遊び空間を大幅に減少させたことによる遊び文化の変質が起きた時期であり、第2期は次の1980年から始まる遊び空間が一層縮小・変質し、さらに少子化、室内遊びの増加による遊び文化の変化、塾へ通う児童の増加といった複数の要因が加わって集団遊びが一層崩壊を始めた時期の二つである。

本論は、まさにこの第2期の延長として、1985年(昭和60年)から1992年(平成4年)の7年間の間の子どもたちの生活と遊びの変化がどのように変動をしてきているのかを明らかにしていくことである。子どもたちの遊びや生活はこの7年間の間にさらに大きな変化を起こして、第3期の時期に入っているのかもしれない。そして、将来的には2002年という1985年から数えて16、7年間にわたる期間の子どもたちの生活の変動を遊びを中心にしながら追跡していくことである。

先に述べたように、2002年からの完全学校週5日制の実施に向けて、「学校から地域に子ども

を返す」とか、「地域の教育力の回復」などといった言葉が絵空事のように語られることがある。今、子どもたちが生活している地域の中では、こういうスローガンとは裏腹に、まともな遊びなどできるような状態になっていないのが実情である。子どもたちの日常生活の中心にある集団遊びが崩壊してしまっているなかで、土曜日と日曜日の二日間の休日を子どもたちはどのように過ごしているのだろうか。散発的に行われるイベント行事や大人に完全に仕切られた地域スポーツクラブがあるだけでは、子どもたちは何もないところに放り出されたに等しいことになってしまう。すでにだいたい前から始まっていることなのであるが、この先必ず教育産業やスポーツ産業が子どもをターゲットして触手を伸ばしてくることは明らかだろう。

ここでは以下のような複数の調査資料の収集と分析が行われた。

(1) 札幌市内西区のA小学校に在籍する4年生以上の男女児童全員に実施された平日の放課後から就寝までの活動と、土曜日・日曜日の休日については起床から就寝までの間のすべての活動を時間に沿って記入することを求めた。ここでは、月1回ではあるが、土曜が休日になるというこれまでの1週間の生活時間の流れとは異なった新しいタイム・スケジュールの中で、土曜の休みをどのように過ごしているのかその実態を把握するということである。この調査は学校週5日制が開始された1992年9月から2カ月後の1992年の11月第2週の土曜休日を含む週に実際された。

(2) A小学校と近接しているB小学校の4年生以上の児童全員を対象にして、同じ1週間の生活時間調査を(1)の調査年よりも8年前の1985年に実施したものがあつた。この調査結果と比較することで、同じ地区にいる子どもたちの平日の放課後、あるいは学校休日(日曜日。1985年当時は、土曜日は学校休日ではないので学校休日は日曜日のみ)の生活の実態が7年間の間でのどのような変化が起きているのかを知ることができる。この後、先行研究の結果について通覧するが、既に1970年台の半ばから始まっている子どもたちの生活と遊びの急速な変化が指摘されていることから推測すると、塾、習い事の増加に伴う子どもたちの放課後の自由時間の「細切れ化」がさらに一層進んでいることが予想される。

(3) 秋期とは異なって戸外の遊びや活動が制限される冬季間の放課後の子どもたちの生活の実態を探る目的で、上記A小学校の4年生以上の児童全員に同一の調査を1993年2月の第2週の土曜休日を含む週に実際した。この調査では、北海道の中でも札幌市という多積雪地域に住む児童の厳冬期の生活実態を秋期と比較することで、気候による環境変化が子どもたちの遊びと活動にどのような制約を与えているのか探るということである。

(4) 上記の3つの調査は同一地域で生活している子どもたちの放課後と休日の生活の様子を秋と冬の二つの季節、そして8年前との比較を行うものである。これに対して、以下の調査では複数の校区の子どもたちに生活時間調査を実施し、地域間の比較を行う。

A小学校の児童に行った1992年11月の生活時間調査と同じものを同じ時期に札幌市内の別の3つの区(南区、北区、厚別区)の小学校3校で実施した。このうち、南区のC小学校は4年生から6年生の児童についての調査が可能であつたが、北区のD小については5年生のみ全クラスの児童について、厚別区のE小については6年生の1学級のみが調査が可能であつた。このように西区のA小と3つの区の小学校の児童を比較することで、地域的特性による児童・生徒の生活、および遊びの実態の違いを検討することができる。ここでは、土曜日と日曜日の2日間の学校休日の日の子どもたちの生活と遊びの様子についての地域的特徴を重点的に検討する。

## II. 子どもの生活と遊びはどのように研究されてきたか

ここでは、これまで行われてきた学校外の児童の遊びや生活の実態、遊び文化の研究について概観する。これらの研究のうち、教育社会学者による一連の研究、および建築、都市計画といった公園や地域環境整備に関わる研究者によって行われた子どもの遊びの実態調査は1970年前後から行われており、今日の子どもたちの学校外の生活実態の基本的な姿や集団遊びが崩壊状態になっていることは既に70年代から始まっていることがこれらの研究からも浮きぼりになっている。また、最近の調査研究では、NHK世論調査部による小中高生の生活と意識に関する調査研究と民間の教育研究機関であるベネッセによって行われている生活調査は、調査対象者数や広範囲な調査地域などその規模からいっても基本的な調査研究の一つになっている。前者のNHK世論調査部によるものは、大規模な調査であることもあって5、6年毎の調査であるが、後者のベネッセによるものは、調査地域は限定されているが、比較的短い時間間隔で行われており、またここ数年以内に行われたものも多く、資料としての有用性は高い。

なお、この種の子どもの生活や遊び文化に関する調査研究は圧倒的に教育社会学者によるものが多い。子どもの遊びについては心理学者が興味・関心を寄せる分野であり、実際に幼児の遊びについては膨大な量の心理学的研究がある。ところが、何故か学童期以降の児童の遊びや生活になるとそれらに関心を向ける心理学者はほとんどいないのが現実である。もっとも、この種の「話しは」どの専門分野の研究であるのかということは全く無視して構わない単なる学問的な「縄張り」以上のものでしかないのだが、ともかく、心理学者が持つ子どもに対する視線はその子どもたちが生活している環境や地域、あるいは毎日の日常生活の実態をどこかに「うっちゃった」形で向けられていることは確かなようだ。自戒の念を込めて指摘しておかざるを得ない。きわめて例外的なものに、南博文と吉田直樹(1991)による研究がある。南らは、社会生態学の視点から児童が複数で遊んだり、交流する際に学校内のどういった施設や学校空間を好んで利用しているのかを調査している。そこでは、一つの学年の児童でも、クラスによって彼らが利用し、また帰属意識を感じている空間、いわゆる「テリトリー」と南らが称している所は異なっていたのである。彼らの研究は学校という空間に限定したもので、予備的調査の域を出るものではないが、学校の空間配置や環境整備のあり方という実践的な問題とも関わりをもっている。

### 1. 地域変動と遊び・遊び文化の変容

#### (1) 藤本浩之輔による大阪市を中心とした複数の調査研究

時代の変遷にともなう地域の環境変化と児童の遊び・遊び文化の変容を早い時期からとりあげ、複数のフィールドで調査研究を手がけてきたのが、藤本浩之輔である。藤本(1966, 1967)は、この当時、多くの大都市近郊で広がりをみせていたニュータウンと呼ばれる大規模団地が、そこに住む子どもたちの生活をつつみこむ直接的な生活経験の環境として、子どもたちにどのように作用しているのかを日常生活の実態分析から明らかにしている。調査対象になったのは、大阪・枚方市の香里ニュータウン(地域内の3小学校)で、そこに住む家族と子ども(5年生)に、以下にみるような家庭の生活様式や子どもの日常の生活行動、遊び文化などについて多角的な調査を行っている。この住宅都市は、賃貸アパートを中心に社宅、分譲住宅など約6,500戸で構成され、宅地開発はこの調査が開始された1964年の2年前に完成している。このニュータウンとの比較対象地域として、枚方市東北部の農村地域(地域内の3小学校)、大阪市内の住宅・商工業地

域（地域内の2小学校）の二つの地域が用いられている。

ニュータウンは、類似した家庭（サラリーマン、核家族、子どもの数も二人という家族構成）と、計画的・合理的に造られ整備が行き届いた公共空間や商業地域によって全体が構成されているという地理的特性から、必然的にそこに住む子どもたちの日常の行動や生活はきわめて均一化され、同質化されたものになってくる。親の趣味や読書傾向、テレビなどのマス・メディアの視聴傾向などの類似性と連動する形で、子どもたちがよくみるテレビもいわゆる低俗ものよりは比較的教養の高い教育的なものが多いことや、まんが以外の小説などを読む割合が高くなっている。また、おこづかいで買うものも、他の地域の子どもたちが常識でやっているようなお菓子を買うといったことも少なく、学用品や本といったもの、貯金に回すという形が多く、いわゆる親の価値観を背景にした健全ぶりがあらわれている。ニュータウンの子どもたちは、整然と計画的に造られた住宅地と一部、公共施設とマーケットが散在するだけの無機質な閉鎖的な空間の中で、日常の経験の変化や広がりも少ない同質的なものにならざるを得なくなっている。そして、藤本が調査結果のまとめとして述べているように、子どもたちはしつけに心を配る母親の磁場の中にちんまりとおさまりながら規則正しい生活を送り、適度な睡眠をとり、勉強もよくしている。そして、彼らの遊びとして多いのがドッジボール、野球、バレーボールなどであるが、スポーツが多くなっているのは、一つには狭い校区の中に同級生の家が近接していることもあって同級生同士で仲間集団が作られやすく、体力的にも類似している同じ年齢の子どもたちがする遊びとしてはスポーツが選ばれやすいということ、そして、路地裏や空き地なども少なく、整備された施設や空間が多いという環境の中ではおのずとこの種の遊びが中心になってこざるを得ないのである。

1967年の論文では、子どもの交友関係や遊び集団の特質について香里ニュータウンの中のアパート、分譲住宅の地区毎に分けて詳細な分析を行っている。同じニュータウンといっても賃貸アパートに住む子どもと分譲住宅とでは交友関係の取り方はやや異なっており、アパート地区は遊び集団（一人当たりの仲間の数：男子7.4人、女子5.5人）のサイズが大きいのに対して、分譲地区は小さくなっている（同：男子4.9人、女子2.5人）。そして、遊びの内容についても前者はスポーツ、後者は室内遊びといった形で傾向が分かれている。

この研究でニュータウンの子どもたちの日常生活と遊び文化の特徴として示されているものは、今日の大都市のどこでも共通にみられるようなことで、特に分譲住宅に住む子どもたちの生活の姿は今日の多くの子どもたちの生活を先取りしているものである。

藤本（1974a, 1974b）は、香里ニュータウンの研究で比較対象となった住宅・商工業地域の大阪市阿倍野区で、昭和30年（1955年）頃と約20年後の昭和49年（1974年）の間の地域変動に伴う子どもたちの日常生活と遊びの変化について、昭和30年当時この地域に住んで学童期を過ごした親の協力を得て調査を行っている。この昭和30年から49年間の20年間は高度経済成長によって地域社会が大きく変貌をした時期である。阿倍野区のA小学校校区は、この20年間に子どもの遊び空間はおよそ半分に減少し、特にこのなかでも12カ所、9,600平方メートルあった空き地（原っぱ）が全て無くなったことが大きな原因になっている。また、校区内を碁盤の目のように走っていて、子どもたちの遊び場になっていた生活道路は舗装され、交通量が増えることでそこから排除され、同じように車両の通行の増加によって校区外にある大公園や池、神社といった遊び場へ足を延ばすことも禁止されることになった。このような都市開発による空間の変化は、当然のことながら遊びに大きな変化を与えている。空き地や道路といった自由空間で出来る遊びから、公園、運動場を利用した野球、ボール遊びや自分の家や友人の家の中での室内遊びへと変

わっている。さらに地域の変貌に加えて、塾、けいこ事に通う子どもが増加して、A小学校の4年生の93%は放課後これらの学校外の学習活動をしていることで、遊び時間が細切れの状態になり、集団遊びをすることが根本から困難になってしまっている。この校区では昭和30年頃には学習塾、けいこ事などは5カ所しかなかったのが、20年後にはおよそ35カ所に増加しているのである。今日みられるような子どもの遊びと遊び文化の衰退に関係している空間と子どもたちの自由な時間の減少は、都市部ではほぼ4半世紀前からはっきりとみられていたことをこの研究では示している。藤本が、昭和49年当時の子どもたちの遊びの典型的な姿として、帰宅後友だちと遊ぶためには、学校にいる時によく相談しておき、学習塾やけいこ事の間隙をぬって、プラスチックの模型の箱などをかかえて友人の家に集まってくるということになってしまったと指摘している。これと全く同じことが今の子どもたちの遊びの姿であり、箱の中に入っているものが、ファミコン・ソフトであったり、カードゲームのためのカードの類に変わっただけである。4半世紀の間、問題の本質は何も変わっていないこと、変えることができないまま時代が流れていることに問題の根の深さがある。

藤本は、この調査結果から、子どもたちの遊び空間を保証する方法として、幼児を対象にした公園が多く造られていく傾向のなかで、児童向けの冒険公園方式を積極的に考えていくべきであること、児童館の内容と役割機能についての改善、学校開放を上げている。これらは今日でも依然として検討すべき課題であることは承知の通りである。

藤本を中心とする「関西子どもの学校外教育研究会」(1978)は、大阪市東淀川区のN小学校区を選んで、先の阿倍野区における調査と同じように昭和35年(1960年)と昭和53年(1978年)の間の比較調査を行っている。子どもの自由な遊び空間(オープン・スペース)が急速に減少していることは先の阿倍野地区と全く同じである。調査区域の全体面積が19.2haの中で、昭和35年当時は田畑を含めたオープンスペースが10カ所、2.1haあったのが、昭和53年では、空き地が3カ所、0.2ha、畠が2カ所、0.1ha、児童公園・児童遊園が3カ所、0.6haと大きく減少している。

この小学校の4年生の1日の生活時間を調べた結果では、テレビの視聴時間が男子で平均4時間、女子で同じく2時間12分、塾・けいこ事が男子で平均69分、女子で同じく65分で、この二つが活動時間として最も長いものになっている。藤本は、テレビ視聴とけいこ事にはさまれた時間は、室内遊びや時間待ちのための暇つぶしのものとしてすごされる傾向が強くなり、内容の乏しいものになっていると言う。

なお、藤本によって手がけられた子どもの遊びについての調査研究としては、これ以外にも、彼の調査地域になっている枚方市内の小学校児童を対象にして、彼らが新しい遊びを作り上げていく過程を分析したものや、遊びのルール(「天下町人ゲーム」と称されているもの)が地域間でどのような変化をしているのかを調べた研究、一つの遊び(「ぶり」と称されたとんぼとりの遊び)とその遊び道具が消滅していった過程を追うといった子どもの遊び文化そのものに入り込んだ研究(1969,1985)がある。

## (2) 都市建築家・仙田満の横浜市と全国の遊び空間変貌の研究

仙田満は、主たる調査地域である横浜市を含めて全国の子どもの遊び空間と遊びの実態の変化を1974年(昭和49年)から今日の1990年台まで長期間にわたって追跡をしている。先の藤本の調査は1975年(昭和50年)頃の地域における自然空間が急速に減少していった時期までのもので

あったが、仙田の研究からはこの先の変化を知ることができるわけである。そして、特定の地域を越えた全国調査が含まれていることと、造園・都市計画の視点から遊び空間の変化を厳密な数量的計測でおさえるという方法も使われている点できわめて説得的である。仙田の研究の中でも中心になっているのは、横浜市における16カ所の調査とその後の数年間にわたる2回の全国調査である。

仙田(1984a)は、1974年(昭和49年)に、横浜市内16カ所の地域の遊び空間の実態を調査し、それ以前の1955年(昭和30年)との比較を行い、20年の間で遊び場はおよそ二十分の一に減少していることを示している。横浜市における調査は2回の全国調査の時にも行なわれているので、1974年(昭和49年)、1979年(昭和54年)、1981年(昭和56年)と3回の調査が実施されていることになる。これらの調査からは、子どもたちの遊びのための自然空間が極度に小さくなっていることと、複数の遊び場どうしのつながりが切れてしまっただけで点在化してしまっていることが明らかにしている。仙田は遊び空間を「自然スペース」「オープンスペース」(グラウンド、広場、空き地など)「アナーキースペース」(廃材置き場や工事現場といった乱雑さがある場所)「アジトスペース」(大人に隠れてつくる子どもたちの秘密基地)「道スペース」といったように区別しているが、昭和30年頃はこれらが複合的に構成され、それらが道スペースでつながっていたものが、昭和49年頃になるとそれぞれの空間量が減少しているだけでなく、不連続にばらばらになってしまっているというわけである。最大の問題は道路整備によって地域にあった生活道路から子どもたちが排除されたことであり、このことは先の藤本の阿倍野区の調査結果で結論づけられていることと全く同じである。そして同時に子どもたちの遊び時間や遊び集団のサイズの減少、遊びの内容や方法、つまり遊び文化そのものの変質が大きく起きているのである。さらに1990年(平成2年)に過去の調査地域の3地域を含む4つの地域で遊び空間の変質と子どもの遊び場への欲求(どんな遊び場が欲しいか)の追跡調査を行っている(岡田・仙田,1991;仙田,1992)。追跡調査の結果では、遊び空間は1955年から1975年までの20年間の間の二十分の一に減少に加えて、1975年から1990年(平成2年)の間でさらに半減しているというものである。明らかに量から質への大きな変貌と喪失が進んでしまっているということである。

仙田(1983,1984b)は横浜市の調査で明らかになった遊び空間の急激な縮小化が、全国的にみられることを1974年から1976年(昭和49年-51年)の全国39地区、1981年(昭和56年)の全国14地区を対象にした2回の大規模な調査結果から結論づけている。2回目は1回目の地区のなかから代表的な14地区を選んだ継続調査である。これらの調査から、横浜と同じように遊び空間の減少は、都市化の進んでいる地域、特に人口密度の高い都市ほど進んでいることを明らかにしている。この全国調査では、各調査地点についての詳細な分析も加えられていて各地域毎と全国的な動向変化を同時に知ることができるが、全国的な変化を概略的に述べてみると、オープンスペースの空間量は大きな変動はないが、自然スペースとアナーキースペースの減少が大きくなっている。そして、これらのスペースで遊んでいる子どもの数(遊び集団の大きさ)を昭和30年と50年で比べてみると、30年代では道スペースやアナーキースペース、オープンスペースに15人規模の子どもたちが集まっていたのが、50年代には15人規模の子どもたちが集まっているところはオープンスペースだけになっており、これ以外の遊び空間では5人以下の子どもたちが細々と集まり、しかもそこでくり広げられている遊びの種類も限定されたものになってしまっている。昭和30年から50年までの20年間で遊び空間の減少が大きいのは地方の中核都市であること、しかもどの地域でも公園や広場の整備が進んで、オープンスペースそのものの空間量は変わらないが、

子どもたちの遊び空間が広場やグラウンドという画一化されたものだけになってしまい、遊びの内容が限定され、矮小化されてきているということである。全国調査では、札幌市内の4校区（創成，発寒，幌南，真駒内）が入っているが、この中で真駒内は那覇市神原と並んで人口密度が高い地域でありながら大きな遊び空間量を持っている地区になっている。これは真駒内でいえば、大きな公園の中に集合住宅団地が造られていることによっているのである。だが、遊び空間が大きいというだけでは、子どもの遊びのための空間条件を満たしてはいないのである。札幌市内の小学校区内には大きな公園を持ったところがいくつかあるが、それらの多くは公園としての整備が行き届いていて、日中はゲートボールを楽しむ高齢者の姿ばかりが目につくというのが現実である。

仙田（1992）は、彼自身の調査研究の結果や他の子どもの遊び環境の研究で明らかになったことをまとめて、二つの大きな変化の時期があったことを指摘している。第一の変化は、先に述べた藤本の研究でも示されているように、1960年（昭和35年）をピークにして1970年台の始め頃までのいわゆる高度経済成長が生んだ開発と都市化の波による子どもの遊びの自由空間の大幅な減少であり、それと並行する形で進んだ核家族化、地域の変貌と喪失、そしてテレビによるマスコミ文化の浸透である。これらは子どもたちの遊び文化を大きく変えていったという。第二の変化は、1980年（昭和55年）から始まるもので、遊び空間は限界まで小さくなっており、それが大都市を越えて地方都市にまで広がってきたことと、ファミコンの登場による遊び文化の大きな変質が1983年の前半から起こっているという事実である。

これらの変化の行き着く先として、今、子どもたちの自由な活動を保証する遊び空間とそれに支えられた遊びは完全に回復不可能な状態になっているということである。仙田は一連の調査結果から、遊び場の構成を点在型から連結型・複合型へともっていくこと、そのためにはこれらの遊び空間をむすぶ道スペースを子どもにもう一度返すことであるという提言を行っている。

仙田の1984年の著書「こどものあそび環境」には、遊び環境の計画づくり、遊び空間や子どもの遊びにとっての環境をどういう視点からみていったらよいかという点について有益な記載があるが、これらについてはここでは述べる余裕はない。ともかく、仙田が「私は建築家である。子どもの頃のあそびの原風景が年々破壊されるのを眺めながら、そしてそこに多くの醜い建物が建設されていくのを見るにつけ、私の職業に自問しなければならなくなっている」（仙田、1992、159ページ）と嘆くことの意味は大きい。都市建築の専門家として公園造りを手がけ、また自ら子どもの遊びと遊び空間の膨大な調査を行ってきた研究者の言葉として、私たちはそれをどう受けとめれば良いのだろうか。

藤本が阿倍野区および東淀川区で行った遊び場の時代変化を調べた研究や、仙田の横浜市を対象にした研究と同じように、地域の遊び場の変容を扱ったものに、岡山市における「三世代遊び場マップ」がある（子どもの遊びと街の研究会、1999）。この研究は、三世代にわたる約50年間の遊び場と遊びの変化を追っている意味では貴重な研究である。ここでは、昭和10年頃から昭和60年までの半世紀にわたる街の遊び場の変化を祖父母、父母、子どもの三世代からの聞き取りによって跡づけたものである。ここでも急速に遊び場が変質していくのは、昭和40年から昭和60年の親の世代から今の子どもの時代にかけてである。なお、この三世代遊び場マップの校区である旭東学区を含む岡山市3学区の遊び環境調査が田中・筒井（1997）によって報告されている。

## 2. 子どもの日常生活と遊び

1. 地域変動と遊び・遊び文化の変容では、子どもの遊びを遊び環境とその変容という視点から研究を行ってきた藤本と仙田の研究を中心にみてきた。ここでは、子どもの日常生活と子どもの遊びの実際に目を向けた研究をとりあげる。

### (1) 子どもの遊び集団と遊び

今日の子どもたちの遊び集団の特性を遊びの伝承という視点からその実態を三つの地域で比較したものに小川博久ら（1982, 1983）の研究がある。子どもたち自身の自立的な社会、つまり遊び集団が成り立っていることが遊び文化の継承と発展のためには不可欠な条件であるが、小川らは東京・小金井市、茨城県の農村地帯の茨城町、茨城県の過疎地域の桂村という地域的特性や環境が異なっているところの小学生の遊びを比較している。1982年のものは茨城県・茨城町の調査が中心に報告されている。この三つの地域で共通にみられたことは、遊び集団の縮小化と遊びメンバーの同質化であり、さらに小川（1991）が強調しているのは、遊び集団が偶然集まったメンバーによって構成されることが多くなっていることである。そこでは遊び内容や遊びの伝統といったものが継承されにくくなっているという結果も生まれている。さらに、昭和50年以降、それまでの遊びの中核として受け継がれてきた伝承遊びに変わってテレビやまんがなどの個人的な室内遊びが優勢になり、遊び文化の変質が進んできていることを小川たちの1983年（昭和58年）の調査結果では示されている。そして、今日では完全に遊び産業と消費文化に支配された遊び文化がほとんどになってしまっていることは承知の通りである。

三つの地域の子どもの遊び集団の特徴とその違いについてももう少し詳しくみていかなければならないが、小川たち（1983）は、遊び集団の大きさと構成、遊びの種類、遊び場の特性という観点から三つの地域による違いと共通性を検討している。上で述べたように子どもの遊び集団はどれも縮小してしまっていることは共通しているが、桂村の場合は校庭を利用した「オープン・スペース」の遊びが多く、そのために遊び集団の規模が4人以上と大きくなっている。このような校庭での遊びと2人以下の小さな集団や個人の遊びに二極化しているのがこの地域の特徴である。過疎地域では、子どものたまり場は学校の校庭や公民館などといった特定の「点」にならざるをえないからである。

小金井市の場合、平均して2-4人の規模の遊びが仙田の遊びの分類による「道スペース」遊び、「オープンスペース」遊びなどでもみられ、大きな遊び集団はみられないものの、ほぼ均一な大きさの集団になっている。これは人口密度が高く、住宅の密集度も高いこと、道路遊びも行うことができるという地理的な特性が作用しているようだ。このような地理的条件と、これに一部規定されながら成立している遊び集団の大きさは当然のことながら、遊びの内容にも影響を与えている。小金井市の場合には児童公園で遊ぶことが多く、固定遊具による遊びが多くなること、桂村ではキャッチボールや数名による野球遊びといった遊びの画一化が起きてしまう。また、茨城町では人口密度、住居の密集性が共に低く、子どもたちの遊び集団もおしなべて小さいが、地域に沼や川が多いこともあってつり遊びが多くなっている。だが、環境としては恵まれているにも関わらずつり遊び以外の自然遊びは少なく、ここでも自然のスペースを利用した伝承遊びは衰退している。それは過疎地の桂村でも同じである。小川が言うように、結局子どものつり遊びも大人のレジャーとしてのつりやつりブームの流れのなかで起きていることである。

この三地域の調査で共通にみられたこととして、小川が結論のなかで問題にしていることは、

どの地域でも「ぶらぶら遊び」と「自転車遊び」という他人との関わりが低く、無為な時間の過ごしかたが多くなっていることである。もちろん、これらが子どもの世界で起きていること、自発的な行為によることを考えると「遊び」の一つではあるのだが、この種の遊びはいわゆる「遊び」(小川はここに集団遊びという意味を込めている)を成立させている集団の条件が不十分ななかから生まれていること、そして遊びとしての定型性が崩れていることが原因としてあるのではないかと言う。この種のことは今の子どもたちの外遊びのスタイルとしてよくみかけることだし、室内遊びからいったん外遊びに移行した時に、あるいは親や大人が外で遊ぶことを促した時に、彼らは一様に困った顔をして、それではとばかりに家の回りを2, 3人で自転車を乗り回して、これで「外遊びは終わり」としてしまふ。まさに小川の言うような外遊びの「定型」すら持つことがなく、屋外に出た時には彼らはなにをして遊んで良いのか困惑してしまうのである。もはや、外遊びや集団遊びで「めまい」(カイヨワ, 1967)を感じるような遊びの面白さは遠い昔に置き忘れてしまっている。個人の閉じた世界の中で、テレビゲームの世界の中だけで彼らは「めまい」と「幻想」をふくらませているのである。

遊び集団については、深谷和子(1970)が今からすると30年も前に遊び仲間の傾向として、集団の大きさの縮小と性差の拡大、等質集団化が始まっていることを指摘していたし、同じく池田秀男と山橋澄子(1971)も徳島県における実態調査から、子どもの遊びに制限がかかる要因として、塾などの放課後の学習、遊び場の欠如、都市部においては遊び仲間の数の減少を指摘していたことを上げておかなければならない。1967年に出された子ども調査研究所編の「現代子ども白書」は、1966年までの子どもの生活の実態を各種の調査研究を通してリアルに伝えてくれる貴重な資料であるが、1964年の子どもの遊び時間の調査でも子どもの屋外の遊び時間は男子で1時間半、女子では1時間と短くなってきているという記述がある。そしてこの背景にはテレビを中心とする屋内遊びへの傾倒、家庭での勉強と塾にかなりの時間がとられていることがあると指摘している。明らかに子どもの遊びの変容が起こったこの時期は、日本が急速に高度経済成長へと向かっていった時期でもある。

最近の研究では住田正樹(1990)が、親と子どもに同じ遊び(例えば、ままごと遊びやビー玉遊びなど)についてどのくらいの人数で遊んでいるかをたずねてみると、親の世代では最低でも3-4人、大きい時には10人にもなる集団ができていたが、今の子どもの世代はせいぜいが3-4人という集団のサイズになってしまっている。あるいは、遊びの内容についてもよく遊んだものを親と子どもの両方に上げてもらおうと、例えば、親の世代ではなわとび・ゴムとび・石けり・かんけり(14.2%)、鬼ごっこ・かくれんぼ・かけっこ(13.3%)、ままごとなどのごっこ遊び(12.9%)といった代表的な遊びが上位をしめているのに対して(重複回答、数字は選択の割合)、子どもの代になると、これらが子どもたちから10%をこえて選ばれる遊びは一つもなく、先に小川が指摘した遊びの「定型」がくずれてしまっていることがここでもはっきりとあらわれている。子ども世代でもっとも多く遊んでいるものは、テレビ(9.3%)、自転車(9.0%)、プラモデル・ブロック(7.8%)、テレビゲーム(7.5%)となっている。これは10年前の調査であるから、現在では最後のテレビゲームはもっと上位に選ばれてくるはずである。ちなみに、親の世代が選んだ1位のなわとび・ゴムとび・石けり・かんけりは子どもは2.4%、2位の鬼ごっこ・かくれんぼ・かけっこは同じく3.5%、3位のままごとは5.1%という選択の割合になっている。ここでも伝承遊びが子どもの遊び文化の中で消えてしまっていることをはっきりと示している。親の世代が多く選んでいたものはほとんどが屋外遊びであったことも注意しておかなければならな

い。

子どもの遊びや遊び集団の実態を都市化という地域特性と関連づけて研究しているものはいくつかある。木下勇（2000）は、都市計画の立場から地域特性や地域の結びつき・地域活動と子どもの遊び・遊び集団の関連を分析している。この研究は木下によって1990年の始めに調査が行われたもので、関東の荒川水系沿いに9小学校区を対象にしている。この9調査校区は、下流域の東京都心下町（墨田区）、中流域の大都市郊外の複数校区（浦和市、ここには郊外の住宅地、団地などの4校区）、中流域の農村部（埼玉県川本町）、上流域地方都市（秩父市）、上流域山間農村部（埼玉県荒川村2校区）という多様な地域特性をもったものから成っている。

遊び時間について各校区毎に比べてみると、外遊びも室内遊びも都心下町と上流域山間農村部の1校区が他の地域よりも20分ほど長くなっており、同じような地域特性の村の中でも違いは大きいし、また都会として一括りにはできないような差が校区間にはある。この結果からは地理的特性や物理的な環境だけで地域を語ることはできなくて、その地域社会のつながりや日常的な地域活動の様子などを射程に入れることの必要性を示している。例えば、個々の具体的な遊びについてその遊び方を誰から教えてもらったのかをたずねた結果では、都市部では「友だちと考えた」という答えが多く、農村部では「祖父母」という答えが多いが、山間部や東京下町では、「上級生」や「地域から」という回答も多く、これらの地域では日常の地域行事やこれらの行事への子どもたちの参加も積極的である。都市、農村といった画一化された地域のとらえかたや比較ではなく、その地域社会の活動や実態にそくしながら議論していかなければならない。子どもをとりまく遊びの環境は地域的なものであると、木下は言う。

木下はさらに、これらの調査資料をもとに、子どもの遊びが都市の住居形態（一戸建て、マンション、団地など）によってどのように異なっているのかを詳細に比較検討している。

子どもの遊びと地域社会、特に都市空間との関わりで論じたものには、この後の子どもの生活時間のところでも取り上げる山本清洋の編著になる「大都市と子どもたち」（1992）がある。ここには、都市における子どもたちの遊びの調査研究を含めて具体的な遊び場づくりについての提言などもある。この中で、高橋勇悦（1992）は子どもの遊びを地域社会と関連づけながらいくつかの問題提起を行っている。地域における子どもの遊び場づくりの先進的な試みとして有名な世田谷区経堂の子ども天国、そして羽根木プレーパークへと発展していった実践や、その他の地域で行われている先進的な試みがいくつかある（これらについては、内藤裕子、1992；2000に詳しい）が、それらは依然として「点」としての活動であり、現実の大多数の地域は住民の主体的な関わりによる環境作りなどとは無縁である。地域の日常的な子ども会活動は熱心な少数の指導者によって支えられている側面が大きく、地域の指導者（その多くは母親である）が子ども会活動から手を引いた途端に活動が崩壊するといったきわめて不安定なものでしかないことの方がはるかに多い。そのようななかで、高橋が指摘しているように、児童のための総合的なコミュニティセンターとして児童館と学校がどのような役割を果たしていくべきか、その問題は依然として大きいといえるだろう。

## （2）生活時間と子どもの遊び

日常生活をみるためにはどのような時間がそこで流れているのかその実相をみていくことが必要である。日常の生活の具体的な単位は生活時間だからである。ここでは、子どもたちの日常における生活時間を分析したいいくつかの研究をとりあげる。

梶島邦江(1991)は、小川信子を中心とした共同研究(「子どもの住生活に関する研究」,1980)のなかで特に子どもの生活時間についての調査とその結果について述べている。この小川を編著とする「子どもと住まい—生活文化としての都市環境—」(1991)は、1980年の共同研究の成果をまとめたもので、生活時間以外に子どもの住、食、睡眠といったさまざまな視点からの研究と分析が行われている。「子どもの住生活に関する研究」(1980)は1978年の東京都下の下町と山の手の4小学校区を対象とした「子どもの校外生活に関する研究」(第1次調査)に続いて、調査対象地域を足立区と江東区の2小学校区で第2次調査として行われたものをまとめたものである。上でも述べたように、この調査では、家庭の住居構造や生活状態、平日と休日の子どもの生活時間、子どもの住環境についての意識・要求、個人データなど多面的な角度からの資料収集が行われている。

以下に述べる調査結果はあくまでも1980年の東京都東部・下町の二つの小学校区における子どもたちの生活実態を反映したものであるが、生活時間に表れた子どもの日常生活の様子はほぼ今日の子どもたちのその姿と基本の部分では一致している。梶島は、子どもたちの放課後の過ごしかたは一定の時間帯の制約を受けて営まれていること、このような生活時間の骨格部分と、それらの間のすきまを埋めるような形で存在している比較的子どもたちが自由に使える時間の二つから一日の生活時間は成っていることを指摘している。例えば、放課後友人と遊ぶ時間は夕食前に限定されているし、戸外の遊びであれば、日没前ということになる。また塾・習い事のための時間も基本的には夕食前までの時間帯の中で行われていることである。夕食とその前後の時間も一定の時間帯の中にあるし、これらの時間は子どもが自由に振る舞える要素は相対的に少ない。1日の時間の中で戸外の活動は2時間、戸内の活動は5時間という配分が基本になっているが、これはあくまでも平均であって、やはりこの1980年にも帰宅後全く家の外に出ない子どもが約2割いる。そしてこの戸外の活動の中で遊びの時間として使われたのは約45分であった。既にこの1980年という年から子どもが家の中にどんどん入りだしていることをよく示している。やはり子どもが時間を多く費やしているのはテレビ視聴であり、平均3時間である。親と一緒にいる時もテレビを視聴することに費やされており、家族と過ごすわずかの時間もこのテレビに埋めこまれているという状態であるという。今の子どもの生活パターンもこれにファミコンなどのテレビゲームを自分の部屋でやるのが追加されている点での違いはあるが基本的には同じである。

梶島の生活時間の分析でユニークで、かつ重要な指摘をしていると思われる点は、先の生活の骨格の間のすき間に存在している時間への着目である。梶島は次のように言う。「前者(生活の骨格になっているもの)は、さしずめ生活の大きな流れと切れめをつくるもの、後者(骨格のすき間にある時間)はそれを繋ぐものである。骨格としての行為の重要性はもちろんのことながら、それと同程度の子どもの生活に大きな意味をもっているのは、実は、繋ぎとしての行為ではなかろうか。・・・時間量もさほど多くはなく、生活の流れを規定しているようにも見えないこれらの繋ぎの行為が、結局は、隠し味となって生活全体をまとめる役割を担っているのである」(29-32ページ)。この指摘は、私たちはほとんすと子どもの生活時間を単純に時間の長いものに注目して説明をしてしまい、これらの個々の小さな隙間の時間が持っている意味を子どもの生活時間全体のなかでとらえていくことをしてこなかったことに気付かせてくれる。それはまさに質としての子どもの生活時間を問題にすることでもある。

梶島が指摘していることで、同じ東京下町といっても二つの小学校区の子どもたちの生活時間はだいぶんと異なった姿をみせていることも重要なことである。これは先に述べた木下の指摘と

も通じることであるが、地域というものを通り一遍でとらえてしまうことの危険性を私たちに教えてくれている。

その他、梶島の論文には、わが国で生活研究に時間的な視点を入れたのは筧山京の1944年の「国民生活の構造」であること、その後いくつかの生活時間調査が1960年台に行われたことや、1984年の伊藤セツの家族関係という視点からまとめられた「生活時間」の研究などについて短いながらも研究史の記述があり、生活時間研究を広く生活研究との関わりの中でみていくべきであることなど知ることができる。

つぎに、山本清洋たちの子どもの生活時間の研究をみていこう。山本清洋（1992）は、平日と休日の子どもの一日の過ごしかたを生活時間調査の手法を用いて分析しているが、彼は独自の68の生活行動小項目とそれをより大きなカテゴリーにまとめた26の生活行動中項目を用いてそれぞれの項目の活動の時間を分析することで子どもの生活構造を明らかにしている。ここで用いている生活行動のカテゴリーは詳細をきわめたもので、通常的生活時間調査の分析レベルをはるかにこえている。山本が行った調査は1980年代末に横浜（147名）、東京（218名）、八丈島（226名）の3地域で、小学4年生282名、5年生309名の合計591名に行ったものである。平日の子どもの24時間は睡眠、食事、身の回りのこと、学校における勉強が生活の基本であり、家に帰ってからは、友だちとの遊び、習い事、ファミコンに費やされる時間が多い。休日では、自宅学習、テレビ視聴、ファミコン、塾、スポーツ教室といったものに多くの時間が費やされてくる。特に、スポーツ教室の場合はそれに費やされる時間が長くなっており、ここに通っている児童の半数は4時間をこえている。

スポーツクラブに所属している児童はこのように、休日は午前中から夕刻までの間、スポーツで拘束されており、他方、スポーツをやっていない児童は東京の場合は3時間以上塾に時間を費やしているという結果になっている。山本の言葉を借りれば「甲子園か東大か」という二極化が生まれている。また、スポーツ教室に通っていない子どもの多くがスポーツに拘束されない時間を家族と過ごしたり、部屋で好きな音楽を聴いたり、自分の好きなことにつかうことになるが、何もしないでばっとして過ごすことも多いということである。ここからはスポーツ教室やスポーツクラブに所属していない児童のためにもっと活発に、自由に遊べる環境やプログラムをどのように用意していくべきかということが問われてくることになる。そして、山本が問題にするように、子どものスポーツは子ども独自のインフォーマルなスポーツというよりは、大人が支配する競争原理の競技スポーツに組み入れられ、変質することが多くなってくるが、ここでもスポーツをする子どもとしない子どもの間の二極化が起きてくることになる。

山本（1992）は、大規模かつ詳細な生活時間調査に加えて、東京渋谷区の子どもの具体的な1日の生活を事例として分析している。そこでは2名の4年生と5年生の児童の生活を彼らの居住地域の分析も含めてその具体的な1日の生活の様子を描き出している。5年生の男子のN・T君は地元の野球クラブに所属しており、学習塾には通っていない。日曜日の半分の時間はやはりスポーツに費やされているが、体を動かすことの好きなこの少年は遊びや買い物などの移動には自転車を使い、かなり遠くまで出かけることもあり、行動半径もかなり広い。サッカー遊びといった他のスポーツで遊ぶことも好きである。山本は、こういう自転車で動き回ることができるかどうかということや、日常の生活圏のなかにサッカーができる場所があるか否かは子どもが自分たちの世界をつくっていくうえでかなり重要な意味をもっていると言う。この少年はスポーツをした後、友だちと銭湯に出かけて自分たちの世界を豊かに広げるという経験もしている。

4年生の女子S・Mさんは、新体操のクラブに所属しているが、インタビューをした日がクラブが休みであったために、映画、ファミコン、友だちとの外遊びで夕方までの時間を使っている。スポーツ教室の練習がたまたまなかったのが、午前中を映画鑑賞にあてることができたということは、逆にクラブが子どもたちの自由な時間をかなり拘束していることを意味していると山本は言う。この子どもの行動範囲の中には学校の校庭、学校の近くの公園があるが、実際にはこの二つの場所は遊びが禁止されていて、外遊びの主たる場所は自分のアパートの中庭になっている。ここは空間としては狭く、スポーツができる所という大人の感覚からすると遊び場として良い所ではないかもしれないが、大きな樹木で周囲から隔離された雰囲気があり、子どもにとっては遊び場所としては格好の場になっているようだ。この女子の場合は、周囲に交通量の激しい道路があり、自転車を移動の手段に使っていないことなどから行動範囲は自宅から100メートル程度と狭くなっている。このような子どもにとって住まいの近くに遊び場があることがきわめて大切になっている。

山本と福満博隆(1999)は、子どもの時間意識として、現実には日曜日でも塾やスポーツクラブに参加して忙しく生活しているのにも関わらず必ずしも忙しいと感じていない子どもが半数近くいて、忙しい現実を当たり前普通のこととしてとらえてしまっていることや、遊びで外出した時にも時間を気にして、時計を持って出かける者が多いといったように、今日の子どもの時間に大きく制約された生活を送っていることを指摘している。

また、山本と福満(2000)は、鹿児島県内の人口7,000人規模の町に住む小学生4-5年生男女40名の土曜日休日(1997年11月8日)における一日の生活時間を分析している。ここで用いている行動の分類は先の68の生活行動小項目である。この生活行動の分析結果と個々の子どもの具体的な一日の生活を重ね合わせながら遊びの時空間が持っている意味について考察をしている。例えば、一人の子どもがこの土曜休日の一日の午後に友人と家で隠れんぼとゲームを3時間にわたって行っているが、この活動の間、子どもは自分の心をファンタジーの世界で満ち、遊びを活性化させている。しかし、この種の遊びに費やしている子どもたち全体の平均時間というのは1時間程度で、この短い時間の中では伝承遊びの面白さや経験も不十分にしかできていないのが現実である。もう一つの別のタイプは、スポーツ少年団に参加している子どもで、休日の中のかなりの時間がこの種の活動のために使われ、子ども自身の「内的宇宙」がどんどん縮小してしまっている。身体づくり、友だちづくり、精神の強化など、将来への備えのために今の時間を使うという発想がこの種のものにあり、その典型が塾や習い事ということになる。そこには今を豊かに生きるという発想はない。これとは対立するような遊びの仕方をしているのが7時間の間釣りに没頭した子どもで、こういった自然の中に身を起しながら今の時間の中でゆっくりとした時を過ごしている。しかし現実にはこのような子どもはきわめてまれで、自然を相手にして遊んでいる時間は全体としては平均約1時間程度でしかない。鹿児島の小さな町に住んでいる子どもたちの土曜休日の生活も実に貧弱なものになってしまっており、大人の時間がどんどん子どもの内的世界を支配している。

山本はスポーツ社会学の立場から子どものスポーツ活動の問題を追求している研究者である。山本(2000)は子どもの生活の中に占めるスポーツ活動の意味を次のように分析している。今は、子どもの生活時間は細分化され、子どもたちはその短い時間で遊びが終わる遊びや遊びとしての構造をもたない行動を強いられている。だが、一方ではスポーツのように長い時間を要する遊びが台頭し、週に2日以上スポーツに多くの時間を費やし、休日では一日の大部分の時間をスポー

ツに割いている。そして次のように言う。「スポーツは、今日子どもの遊び世界の約25パーセントを占める子ども文化である。しかし、その内容はインフォーマルなスポーツよりも圧倒的にフォーマルなスポーツがさかんであり、その実態はすでに子どもの手を離れ、大人のマニュアルにしたがって子どもが行動するという構造をもっている」(266ページ)。

山本(1996)はこのようなフォーマルスポーツの具体的な例として、全日本少年サッカー大会を上げ、そこにみられるのは競技スポーツとしての性質そのものであり、それが子どものスポーツであったとしても商業スポーツの中に組み入れられ、大きな大会組織の一部としてなった時には不可避免的にそのような性格を持たざるを得なくなることを実証的分析から明らかにしている。そこでは、大人により統制され、高度なプレイや戦術が要請され、ゲームの過程、事前の練習過程で子どもの意思が入り込む余地は、ほとんど残されていないと言う。

木全力夫(1986)は、子どもの地域における仲間集団の組織形態の変遷を戦前・戦後を通して概観しているが、結論として、日本では一貫して、大人の意図・目的を重視した大人主導の子ども組織が主流になっていると述べている。戦後も理念的には子どもの自主的な集団性を生かしながら大人の指導や援助を受けつつ子ども組織を作り上げていくことを目標にしても、実際には大人の意図によって支配されたものが多いのが現実であったと言う。そして、子どもたち自身によって作り上げられた自然な仲間集団が衰退していくにつれて、子どもたちが大人による組織や団体に組み入れられていくが多くなっており、それは子どもにとって決して望ましいことではないとまとめている。まさに、今日の現状を指摘したものと言わなければならない。

本論の最後では、実際に学校休日の日に子どもたちがどのような過ごし方をしているのか調査結果をみていくが、札幌の子どもたちも地域の少年スポーツクラブに所属し、土曜日の練習、日曜日の試合という形で競技スポーツ漬けになっている者が少なからず見かける。子どもの日常生活を考えると、少年スポーツの存在は無視できないものになっている。

以上、子どもの日常生活と子どもの遊びについての先行研究を概観した。なお、ここでは言及できなかった子どもの遊びと日常生活に関して行われた最近のいくつかの調査研究については、この後の筆者の調査研究の結果と関連させながら述べていくことにする。

### Ⅲ. 「学校週5日制」の下での子どもたちの日常生活と遊びの実態

#### 1. 調査の目的と方法：子どもたちの1週間の生活と遊びに対する意識

ここでは、札幌市内西区のA小学校の4, 5, 6年生の男女児童全員に実施された1週間の生活の様子を「1週間の生活時間調査」から探ることと、あわせて子どもたちの日常の遊びに対する意見や意識を把握するための「遊びについての意識調査」の分析を通して、彼らの日常生活の中心にある遊びの実態と問題を明らかにする。特に、「学校週5日制」が実施された週では、子どもたちは土曜日と日曜日の2日間をどのように過ごしているのか、その生活の実態を平日の放課後のそれらと比較しながら捉えることがここでの主要な目的である。

#### (1) 調査校区と対象児童

調査対象となった札幌市西区A小学校は、市営地下鉄やJR駅、区役所や区民センター、飲食店街が広がっている一帯に隣接する場所にあり、団地を中心にして一部一戸建ての住宅が混在している。校区のそばには大きな公園があり、またいくつかの小さな児童公園もあり、子どもたちの遊びにとってはめぐまれ環境といつてよい。この校区と道路をはさんで1985年に子どもの生活

時間と遊びの調査を行った B 小学校の校区がある。

調査対象児は、この A 小学校の 4 年生から 6 年生までの 3 学年各 2 学級の児童で、各学年 70 名前後、あわせて 207 名である。1985 年に調査を行った B 小学校は学年が 3 クラス規模のため、調査対象児の数は 1 クラス分多くて、各学年 110 名から 120 名で、全体で 358 名である。

## (2) 遊びに対する意見・意識と 1 週間の生活時間調査

遊びに対する意見・意識についての調査は、遊びを中心として 7 つの質問項目からなる質問紙で、各学級の教室で担任による教示・説明によって実施された。質問項目は、①子どもの家庭の様子、②普段よく遊んでいるものの内容、③遊びの中で不都合に感じていること、④自分がやってみたいと思う遊び、⑤遊びの熱中度、及び何をして遊んでよいかわからなくなるという経験の有無、⑥遊び集団について、⑦スポーツチームについて、から成っている。生活時間調査は、平日の場合は放課後から就寝までの間、休日（土曜日、日曜日）は、起床から就寝までの間で何をしてきたかをおよそ 30 分単位で時間軸に沿って活動の内容を記入することを求めた。ここでは、遊び時間とその内容、習い事・塾の回数と時間、TV の視聴時間、起床・就寝時刻などを調査記録から算出した。なお、平日は月曜日から金曜日をまとめて平均値の形で、学校休日の土曜日と日曜日は二つに分けて集計した。1985 年の B 小学校における調査でも遊びに対する意見・意識についての調査と生活時間調査は同じものを行っているが、生活時間調査の集計については、この調査時点では学校週 5 日制は行われていなかったため、月曜日から土曜日までを一つにまとめて集計している。平日は放課後から就寝までの活動、土曜日、日曜日の休日については、起床から就寝までの間のすべての活動を時間に沿って記入することを求めた。ここでは、月 1 回ではあるが、土曜が休日になるというこれまでの 1 週間の生活時間の流れとは異なった新しいタイム・スケジュールの中で、そもそも土曜の休みをどのように過ごしているのかその実態を把握するということである。

## 2. 子どもたちの遊びの実態と遊びに対する意識

子どもたちは普段、放課後、学校外でどのような遊びをしているのだろうか。また、遊びに対してどのような意見や意識を持っているのだろうか。8 年前の 1985 年の調査結果と直接比較が可能なものについては、二つの時点間の変化についてもあわせて検討する。

はじめに、子どもたちの家庭の様子について述べておく。放課後家庭に親がいない（週 5 回以上親、ないしは大人が留守にしている）児童は全学年平均 35.7%（4 年生：31.3%，5 年生：38.2%，6 年生：37.5%）で、およそ 3 人に 1 人は放課後家に帰っても親ないしは祖父母がいない状態になっている。この数字は調査時点で最も近い 1989 年の全国的な数値：「子どものいる世帯における妻の就業状態」（「保育白書」1991 年版）の 37.1% とほぼ同じである。

就労の母親が増加していく傾向のなかで、子どもたちの放課後の学校外における生活をどう支えていくかということは重要な問題になっている。学童保育の現状は質、量共にまだ不十分な状態である。ちなみに北海道を例にとると、調査当時の時点で、学童保育所数は 388 で、小学校数 1,639 の 23.7% に過ぎない（1992 年集計、「保育白書」1993 年版）。現在（2000 年）は、エンゼルプラン、新エンゼルプランといった施策によって全国平均では学童保育の小学校数に対する比率は 45.4% まで増加しているが（2000 年「保育白書」）、依然として半数をこえていないのが現実である。北海道、あるいは札幌市の最新の状況については統計資料を未収集のためには確認できて

いない。

今回の調査対象児童の家庭は全学年平均で、98.8%が核家族であった。

兄弟数は、表-1にみる通りで、二人兄弟が6割以上である。これ以外は3人またはそれ以上の兄弟がいる場合で、全体の平均は25.6%である。

表-1 各学年の一人っ子と二人兄弟の割合

	4年生	5年生	6年生
一人っ子	10.4%	5.9%	4.2%
二人兄弟	59.7%	64.7%	68.1%

### (1) 遊びの内容と種類、その変化

子どもたちは普段、どのような遊びをしているのだろうか。上位5位までのものを男女別に整理した(表-2, 表-3)。

表中の「ゲーム類」とは、カードゲームや盤ゲームなどの総称であり、「ボール遊び」は、野球、サッカーを除いたボールを使った遊びである。表中の数字(パーセント)は、学年毎の遊びの回数を割合としてあらわしたものである。男子では、やはりどの学年も「ファミコン」が一位で、どの学年も20%を越えている。1992年は、まさにファミコンが子どもたちの遊びとして広く普及をしていった時期にあたっている。学年別にみても、学年が上がるほど、読書(まんが)やTV・ビデオなどの室内遊びが多くなる傾向がある。女子の場合も、ファミコンが男子と同じように好んで遊ばれるものになっているが、その割合は男子ほどではなく、平均で10%前後である。女子の場合はどの学年でも室内遊びがほとんどで、4年生と5年生の3位の「鬼ごっこ」だけが外遊びである。この校区内でよく遊ばれている「鬼ごっこ」は「こおり鬼」と「高々こおり鬼」と呼ばれる二種類である。6年生になると男子、女子共に外遊びがさらに少なくなっており、5位以内には入らなくなっている。6年生では、上位3位に「おしゃべり」が上がっている。仲間内でおしゃべりをするのが遊びになっており、そこに楽しみを見出しているということである。

全体として、女子は男子よりも室内遊びが多く、また少人数の遊びが多くなっており、学年が上がるほどその傾向が顕著になっている。

表-2 ふだんよくするあそび (男子)

	4年 N=35	5年 N=35	6年 N=36
1位	ファミコン (24.0%)	ファミコン (21.8%)	ファミコン (23.6%)
2位	サッカー (14.9%)	サッカー (10.5%)	読書 (含マンガ) (11.5%)
3位	ゲーム類 (9.6%)	読書 (含マンガ) (10.5%)	サッカー (8.9%)
4位	ドッチボール (8.9%)	ボールあそび (8.3%)	自転車 (8.3%)
5位	野球 (5.5%)	TV・VIDEO (6.0%)	TV・VIDEO (6.4%)
	ボールあそび (5.5%)	ゲーム類 (6.0%)	
		かくれんぼ類 (6.0%)	

表-3 ふだんよくするあそび (女子)

	4年 N=32	5年 N=33	6年 N=36
1位	読書 (含マンガ) (11.3%)	読書 (含マンガ) (14.5%)	ファミコン (15.3%)
2位	ファミコン (10.3%)	ファミコン (11.6%)	読書 (含マンガ) (12.7%)
3位	鬼ごっこ類 (10.3%)	鬼ごっこ類 (6.5%)	おしゃべり (12.7%)
4位	ゲーム類 (8.8%)	TV・VIDEO (5.8%)	TV・VIDEO (9.3%)
5位	絵をかく (7.4%)	ゲーム類 (5.8%)	ゲーム類 (7.3%)

1993年の総務庁による全国調査(総務庁「情報社会と青少年」)では、「気晴らしのためによく利用するメディア」として上がっているのは、小学生の男子では、まんが(69.0%)、テレビ(66.6%)、テレビゲーム(63.2%)の順、女子ではテレビ(69.6%)、まんが(63.2%)、テレビゲーム(29.6%)の三つである(いずれも重複解答)。子どもたちは放課後の細切れになった自由な時間、いわば隙間の時間にこういったものを利用している。

5位以下で上げられている遊びをみると、男女共通のものとして、「公園遊具で遊ぶ」「音楽を聴く」「工作(プラモデル、ブロック、折り紙)」「木のほり」「かけっこ」「なわとび」「動物と遊ぶ」「すもう・プロレス」などがある。この他に男子だけが上げているのは、「キックベース」「卓球」「探検・冒険」「竹馬」「ラジコン」「フリスビー」などである。女子だけが上げているのは、「バドミントン」「ぬいぐるみ・人形」「一輪車」「手芸」「ゴムとび」「料理」「楽器(ピアノなど)をひく」などである。子どもが上げた遊びの種類はどの学年も総数では、60近いが、女子の方が男子よりも1.5倍ほど種類が多く、遊びのバラエティーは女子の方が豊富である。

ここで、遊びの内容を8年前のものと比較してみよう。8年前のB小学校の調査では、集計の方法が異なっている(何人の子どものかその遊びをしているのかを各学年の児童総数に対する割

合として算出) ために、数値を直接比較することができないが、遊びの順位によって8年間の変動を知ることはできる。表-4と表-5はB小の男子と女子のものである。

表-4 子どものよくするあそび (1985年) (男子)

	4年 N=46	5年 N=56	6年 N=66
1位	サッカー (59.0%)	ファミコン (71.0%)	サッカー (82.0%)
2位	ファミコン (46.0%)	サッカー (59.0%)	ファミコン (67.0%)
3位	鬼ごっこ類 (20.0%)	野球 (29.0%)	野球 (24.0%)
4位	野球 (20.0%)	パッチ (18.0%)	鬼ごっこ類 (12.0%)
5位	ゲーム (15.0%)	鬼ごっこ類 (11.0%)	パッチ (8.0%)

表-5 子どものよくするあそび (1985年) (女子)

	4年 N=67	5年 N=62	6年 N=61
1位	ファミコン (39.0%)	ファミコン (50.0%)	ファミコン (30.0%)
2位	人形・ぬいぐるみ (37.0%)	鬼ごっこ類 (39.0%)	鬼ごっこ類 (25.0%)
3位	鬼ごっこ類 (30.0%)	読書 (29.0%)	バドミントンなど (18.0%)
4位	読書 (18.0%)	ボールあそび (16.0%)	ボールあそび (18.0%)
5位	トランプ(ゲーム) (13.0%)	絵をかく (13.0%)	おしゃべり (16.0%)
		バドミントンなど (13.0%)	
		ドッチボール (13.0%)	

男子では、どの学年でもサッカーとファミコンが1位と2位であることは8年前と同じであるが、8年前は4年と6年ではサッカーに一番人気が集まっている。また、8年前には人気のあった野球も4年生で5位に上がっている以外は影の薄い遊びになっている。当時の流行のスポーツに左右された結果である。同じく、8年前にはあった「パッチ (めんこのこと)」は全くみられなくなっている。逆に、8年前にはみられなかった「読書 (まんが)」や「TV・ビデオ」といった室内遊びが男女両方で現れてきており、7年間の間に室内型のしかも少人数による遊びへと移行しているのがはっきりとわかる。

最近の調査としては、ベネッセ教育研究所 (1999) によるものがある(「子どもたちの遊び：モノグラフ小学生ナウ」19巻1号)。調査は1998年に首都圏、中部、四国地方の小学生5、6年生各250名前後、総計約500名に対しておこなわれた。「学校が終わってから家の中ですること」という形で室内遊びに限定した質問では、男子の場合は、「テレビを見る」(よくする: 68.8%、と

きどきする：21.5%）、「まんがや雑誌を読む」（よくする：50.8%、ときどきする：29.8%）、「テレビゲームをする」（よくする：51.5%、ときどきする：20.4%）の三つが圧倒的に多く、以下、「ごろごろしたり、のんびりする」（よくする：39.6%、ときどきする：26.5%）と続いている。「学校が終わってから家の外ですること」についても、「ボールで遊ぶ」（よくする：42.6%、ときどきする：21.7%）が多少とも屋外の遊びとかわらうじていえるもので、以下に続いている「友だちとしゃべる」（よくする：30.9%、ときどきする：26.3%）「自転車に乗ってうろうろする」（よくする：24.4%、ときどきする：21.3%）「家の外でゲームボーイなどをする」（よくする：16.7%、ときどきする：24.0%）「ぶらぶら歩く」（よくする：14.8%、ときどきする：20.3%）といったものはとてもこれまでの「外で遊ぶ」という常識からはかけ離れた遊びばかりである。

また、名古屋市教育委員会青少年室（1998）が1997年に名古屋市内の小学生1-6年生約6,900人（有効回答数約4,500）におこなった調査（「放課後の生活実態調査」）では、放課後の過ごし方で一番多いのが「テレビを見る」（61.0%、重複解答、全学年の平均。以下同じ）で「テレビゲームをする」（45.6%）、「公園で遊ぶ」（44.7%）、「勉強や習い事の練習」（38.4%）、「家でのんびり」（35.9%）という順番になっている。

ファミコンは1983年に発売して以来急速に普及して、翌年の1984年には286万台、そして8年前のB小学校の子どもたちの調査を行った1985年には580万台が売られていた。この年には人気ソフト（250万本発売）になった「スーパーマリオブラザーズ」が発売されている。この後、1988年には社会的な関心を引き起こした「ドラゴンクエストⅢ」の発売や、ファミコンが1,200万台を突破したり、1990年にはスーパーファミコンが発売するといったことが続いている（野上暁、1998巻末資料より）。スーパーファミコンは1990年だけで400万台を売り、ファミコンソフトも1990年の「ドラゴンクエストⅥ」、1991年の「ファイナルファンタジーⅢ」といった今日のファミコン世界の原型になっているものはこの時期から始まっている（中西新太郎、1997および、野上暁、1998より）。A小の調査を行った1992年はまさにこういう時代の流れの中にあるということである。1985年から1992年の7年間の子どもたちの遊びの変化は、ファミコンの急速な普及の歴史でもあったし、子どもたちの遊びが完全に変質し、またその変質を完璧なものにする7年間でもあった。

先の総務庁の「第2回情報社会と青少年に関する調査」（1993）でも、小学生高学年（10-12歳）の男子の場合はファミコン・テレビゲームを毎日する者は25.5%、週に3、4回以上する者は25.7%で、これらを合わせると全体の51.2%の者がかなりの頻度で遊んでいることになる。この後の「第3回情報社会と青少年に関する調査」（1996c）では、調査対象者が中学生以上になっているために第2回と第3回の直接の比較はできないが、12-14歳までの中学生のファミコンの使用回数は男子が、週3、4回以上の者は48.3%である。これは調査対象者の年齢が上がっていることによるが、前回の第2回調査では中学生（13-15歳）の使用頻度が40.6%であったことから推測すると小学生の場合は1992年以降ファミコンをする回数はさらに増えているはずである。そのことを裏付けているのが、博報堂生活総合研究所（1997）による調査（「調査年報1997・子供の生活」）である。男子の場合、ファミコン・テレビゲームを毎日する者は小学4年生では、49.3%、5年生40.7%、6年生32.7%、週に1-3回くらいが4年生は、40.7%、5年生43.3%、6年生57.3%となっており、明らかに総務庁の第2回調査の25.5%よりどの学年でも多くなっている。博報堂の調査は首都圏の小4-中2まで男女各150名づつによるものである。

## (2) 遊び場所とその変化

表-6と表-7は子どもの遊び場所の結果である。これをみても、どの学年でも男女共に「室内」がトップで、その割合も高くなっている。8年前のもの（表-8、表-9）と比べてみてわかるように、子どもたちが室内で遊ぶことが多くなる傾向は既にこの時期から顕著になっている。特に、女子の場合は8年前から一貫して変わっていないのは遊び場所として家の中が特に多いということである。

表-6 どこであそぶか（男子）

男子	4年 N=35	5年 N=35	6年 N=36
1位	家の中 (44.1%)	家の中 (48.6%)	家の中 (52.8%)
2位	家の前 (16.6%)	グラウンド (13.2%)	公園 (15.3%)
3位	公園 (16.6%)	公園 (12.5%)	近所 (11.0%)
4位	近所 (7.6%)	家の前 (8.3%)	グラウンド (7.4%)
5位	グラウンド (6.9%)	近所 (8.3%)	家の前 (2.5%)

表-7 どこであそぶか（女子）

女子	4年	5年	6年
1位	家の中 (51.4%)	家の中 (60.8%)	家の中 (61.6%)
2位	家の前 (16.2%)	公園 (10.5%)	公園 (9.8%)
3位	公園 (13.4%)	家の前 (9.8%)	近所 (9.8%)
4位	近所 (7.6%)	学校 (5.6%)	家の前 (5.5%)
5位	グラウンド (4.2%)	近所 (4.9%)	不定 (3.7%)

表-8 子どもの遊び場所（1985年、男子）

男子	4年 N=46	5年 N=56	6年 N=66
1位	家の中 (46.3%)	家の中 (48.9%)	家の中 (37.2%)
2位	公園 (27.1%)	公園 (24.1%)	グラウンド (24.7%)
3位	家の前 (14.6%)	家の前 (11.4%)	公園 (20.2%)
4位	児童館 (9.2%)	その他 (8.4%)	その他 (8.1%)
5位	その他 (2.9%)	グラウンド (5.5%)	家の前 (7.6%)

表一 9 子どもの遊び場所 (1985年, 女子)

女子	4年 N=67	5年 N=62	6年 N=61
1位	家の中 (59.2%)	家の中 (54.5%)	家の中 (53.9%)
2位	家の前 (19.8%)	家の前 (29.0%)	家の前 (24.7%)
3位	公園 (13.6%)	公園 (9.7%)	公園 (15.4%)
4位	その他 (3.7%)	その他 (3.9%)	その他 (4.1%)
5位	児童館 (3.3%)	児童館 (2.2%)	児童館 (1.9%)

男女に共通にみられることとして、学年が上がるにつれて、「家の前」の道路などで遊ぶことが少なくなる傾向がある。先の遊びの内容でも、家の前ですのような「なわとび」「缶けり」「かくれんぼう」「ゴムとび」はマイナーな遊びになってしまっていた。また、「グラウンド」という場所で何を遊んでいるかを先の遊びの内容と関連づけてみると、男子の場合はサッカーが中心であるために、遊び場所として使われることが多くなっている。これに対して女子の場合は、グラウンドの隅にあるアスレチックや鉄棒、タイヤを使って馬とびの遊びといったもので、広く「公園遊具」を使った遊びに分類されるものが多い。6年生の女子の5位の「不定」は、「おしゃべり」をする場所のことを指しており、「いろいろなところ」「特に決まった場所はない」ということである。

遊び場所のおよそ8割は表一6、表一7の上位5位までのものであるが、これ以外の遊び場所としてあげられていたのは、「公園やグラウンド以外の広場」である。この「広場」では、鬼ごっこやポコペン（かくれんぼうの一種）、野球、サッカーなどをする時にも使っている。その他の場所として、4年生では、「教室」「体育館」の学校の施設をあげている。これに対して5年生になると、「駐車場」「ゲームセンター」「団地の敷地内」「学校の飼育小屋」「図書館」「川」といった場所をあげており、活動範囲の広がりやゲームセンターといった幾分、危うさを伴った所へも行き出していることがわかる。6年生も同じように、「近所の商店(街)」「駐車場」「ゲームセンター」「学校の飼育小屋」などをあげており、高学年の子どもの行動範囲の広がりがあらわれている。毎週日曜日には、自転車で郊外までサイクリングで出かけるという子どももいた。

博報堂生活総合研究所(1997)の調査で、「公園や郊外よりも、盛り場で遊ぶ方が好きだ」と答えた児童は男子では、小4:26%、小5:30.7%、小6:40.7%と6年生になると大きく増加している。女子もほぼ同じ様な傾向で、小4:22.7%、小5:32%、小6:50%と6年生の急増が目立っている。実際に友だち同士で大きな街に出かけることも6年生では男子:72%、女子:81.3%に上っている(調査対象はいずれも首都圏の児童各学年300名)。

「学校の飼育小屋」を何人かの子どもたちが遊び場所としてあげているが、これは学校の空間の中では一時的ではあるが大人の目から逃れて自分たちの空間として振る舞える数少ない場所として存在しているようだ。子どもたちのなかには日曜日に飼育小屋に遊びにいった子どもや、平日の放課後子どもたちの遊びを観察している時にも下校時に飼育小屋に集まっている子どもたちをしばしばみかけたものである。

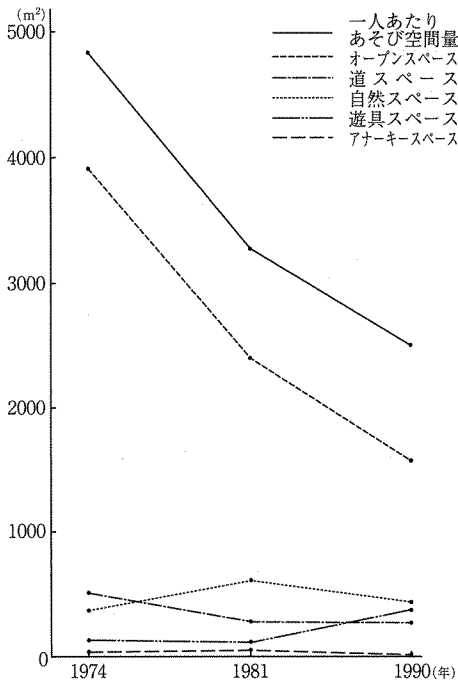
以上のように、少数意見としてあがっている遊び場所を除いて、圧倒的に多い遊び場所は「家

の中」であり、「室内遊び」である。

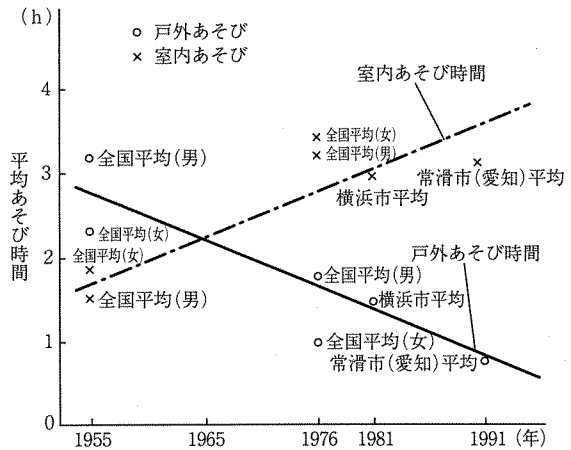
1994年のNHK「小学生の生活と文化調査」では、1984年、1989年、1994年の各5年間の遊びと遊び場所の比較をおこなっているが、男子では、1984年は公園・グラウンド・広場55%、家の中（自分の家、友だちの家、近所の家を含む）55%、校庭43%の順であったのが、1989年には家の中：64%、公園・グラウンド・広場：50%、校庭：35%となり、1994年には家の中：76%、公園・グラウンド・広場：50%、校庭：46%となり、家の中で遊ぶ割合が多くなっている（重複回答）。女子の場合はさらに家の中で遊ぶことが多くなってきており、1984年は、家の中：77%、公園・グラウンド・広場：47%、校庭：36%、1989年は、家の中：77%、公園・グラウンド・広場：41%、校庭：31%、1994年の場合はさらに、家の中：97%、公園・グラウンド・広場：40%、校庭：27%となっている。

また、1997年の東京都社会福祉基礎調査では、小学5年生が放課後過ごした場所として一番多いのが自宅：63.6%で、以下、学習塾や習い事：35%、友だちの家：24.2%、公園：15.4%、学童クラブや児童館：5%となっており（重複回答）、公園など外で遊ぶのが非常に少なくなっている。自分の家と友だちの家を合わせると、家の中で過ごすのが87.8%となっている。

先にあげた8年前の調査との比較では、家の中で遊ぶことが中心になっていることは既に1985年当時から定着してしまっていることを述べたが、遊び空間についての先行研究としてはじめに述べた仙田の研究でも、1981年から1990年までの間に外遊びのための遊び空間が急速に小さくなり、それに伴って仙田の1989年の調査では外で遊ぶ時間よりも室内で遊ぶ時間の方が4倍も多くなっていたのである（図-1-a・b、いずれも仙田、1992より）。このように基本的に、1985年と1992年とでは、遊び場所に関しては大きな違いはなく、既に1980年の初期から札幌市においても遊び空間は大きな変質を遂げてしまっていたことになるが、7年間の遊び空間の変化をもう少し詳しくみてみると、そこには微妙な変化があることがわかる。男子の場合はほとんど変化がないが、女子の場合では、表-7と表-9の二つを比べてみると、92年の結果では、「家の前」で遊ぶことが減ってきている。8年前の1985年の調査では、女子では「家の前」で遊びことが比較的多く行われていたが、92年になると特に高学年でぐっと減ってきている。「家の前」の遊びの典型である「なわとび」「缶けり」といった遊びに代わって室内でできる遊びが主なものになっている。こういった遊び場所の変化の背景には藤本や仙田が指摘していた遊び空間の変質、つまり仙田の言う道路整備による「道スペース」からの閉め出しといったこととは別のことがあるといわなければならない。この調査地域は85年以降からは大きな遊び空間の変化はみられず、むしろ子どもたちの遊びのし好の変化が大きく作用しているといえるだろう。そのことの方が問題はより深刻であるともいえるのである。ベネッセ教育研究所（1996）が「したことがある遊びについて」たずねた調査では、小学生の女子では、石けりは40%、男子でも48%しか経験がなく、ゴムとびは女子が54.2%と半数しか経験していない、缶けりは女子は59.3%が経験という結果になっている。



図一・a 横浜市における遊び空間量 (1974~90年)



図一・b あそび時間の変化

(3) 遊びの人数

図-2は遊ぶ時の人数の学年と男女毎の分布である。子どもがあげた具体的な遊び一つひとつについて、それを何人くらいで一緒に遊んでいるかを記入してもらったものをまとめた。1人は自分一人だけで遊んでいることを意味している。これらを平均で表したのが表-10である。男子の遊びの人数の分布をみると、4年生では3人までのところと7人以上の二つに分布の山が分かれており、比較的大きな人数でも遊ぶことがあることを示している。ところが、5、6年生になると圧倒的に3人までの小さな遊び集団になっている。家の中の遊びも、外遊びも共通に気の合う数名の小さな友だち仲間に遊び集団がまとまってしまっているということである。また、どの学年でも分布のピークは1人で遊ぶところにあるということは、1人でまんがやTV・ビデオをみたり、ファミコンをするといった遊び方が中心になっているからである。もはや集団の遊びは小学生の放課後の遊びの主流ではなくなっているということである。

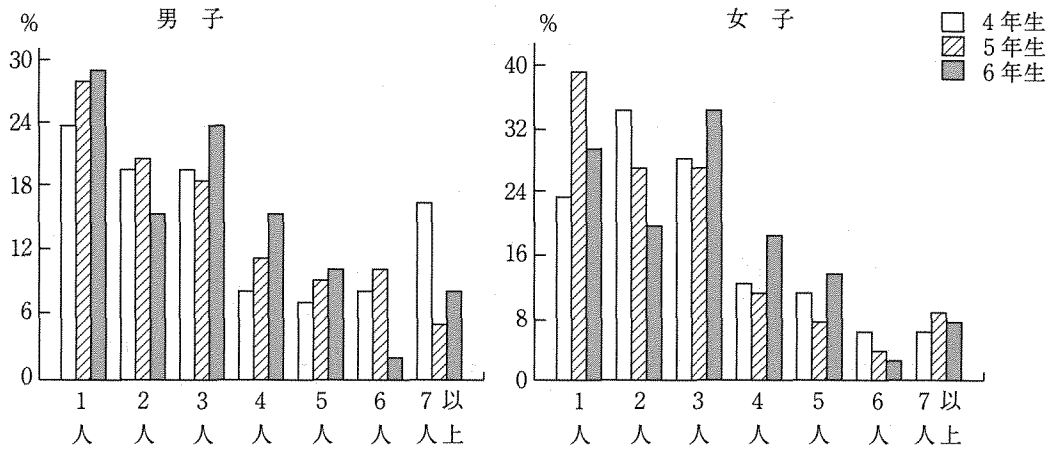


図-2 遊ぶ時の人数 (重複回答)

表-10 遊び仲間の人数の平均

	4年	5年	6年	全体
男子	3.57 (2.67)	3.77 (2.03)	3.47 (2.27)	3.47 (2.27)
女子	2.99 (1.84)	2.79 (2.19)	3.10 (1.97)	2.95 (2.01)
全体	3.29 (2.32)	3.27 (2.11)	3.11 (2.03)	3.21 (2.16)

注) 表中の数字は人数、カッコは標準偏差値である

次に女子の場合をみてみよう。ここでも3人までの遊び集団が圧倒的に多く、5人以上の遊び集団は少ない。女子の場合は、室内遊びが多いことが背景にある。遊び人数の平均(表-10)は、男子では平均3.5人で、6年生は3.1人とさらに少ない。女子は、平均で2.95人で、最低は5年生の2.79人である。

8年前の1985年の調査結果(図-3)と比べてみよう。男子は、1985年当時はまだ「1人で遊ぶ」ところに分布のピークはなく、4年生や6年生の場合には7人以上の大きな遊び集団のところに分布のピークがある。5年生の場合も、3人と5人のところにピークがある。この8年前の結果では、男子の遊び集団は少しずつ小さくなっていく兆しはあるものの、まだ大きな集団で遊ぶこともみられた。ところが、1992年との比較では、1992年になると遊び集団のサイズは急速に小さくなってしまっている。遊び集団のサイズに関しては1985年から1992年の7年間の間に大きく変わっているのである。

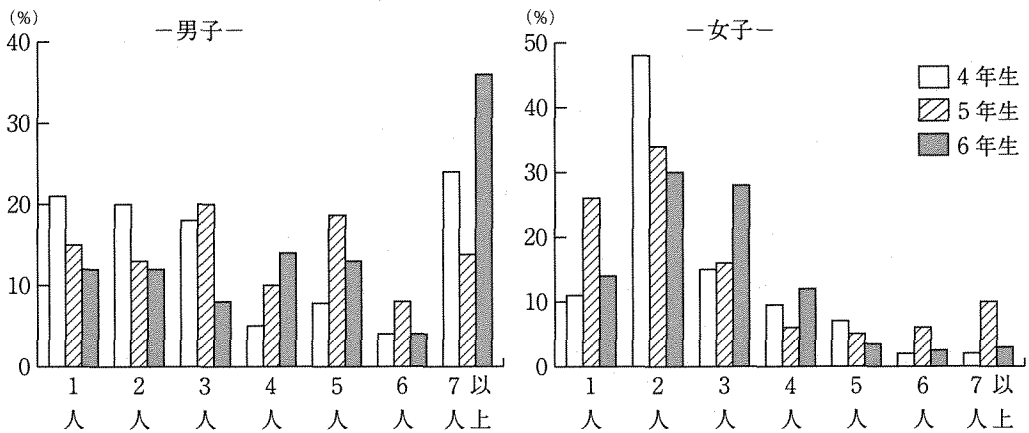


図-3 遊ぶ時の人数 (1985年)

女子の場合は、男子のような大きな変化はなく、8年前でも3人以下の小さな仲間集団による遊びが主流になっており、この点での時間的な変化はほとんどない。

次に、遊び集団の年齢構成の仕方についてみてみよう。図-4は、遊び仲間の年齢構成(同じ学年か年上・年下か)をたずねた結果である。学年、男女ともに「いつも同じ学年の友だちと遊ぶ」と回答した者が圧倒的に多く、4年生の女子の53.1%がやや低い数値になっていることを除いて70%以上の者が同年齢の子ども同士で遊んでいる。図からわかるように、この傾向は学年が進むほど顕著で、6年生ではその割合は80%をこえている。全ての対象児207名のうち、「いつも年上か年下の友だちと遊ぶ」と答えた児童は19名、9%に過ぎなかった。

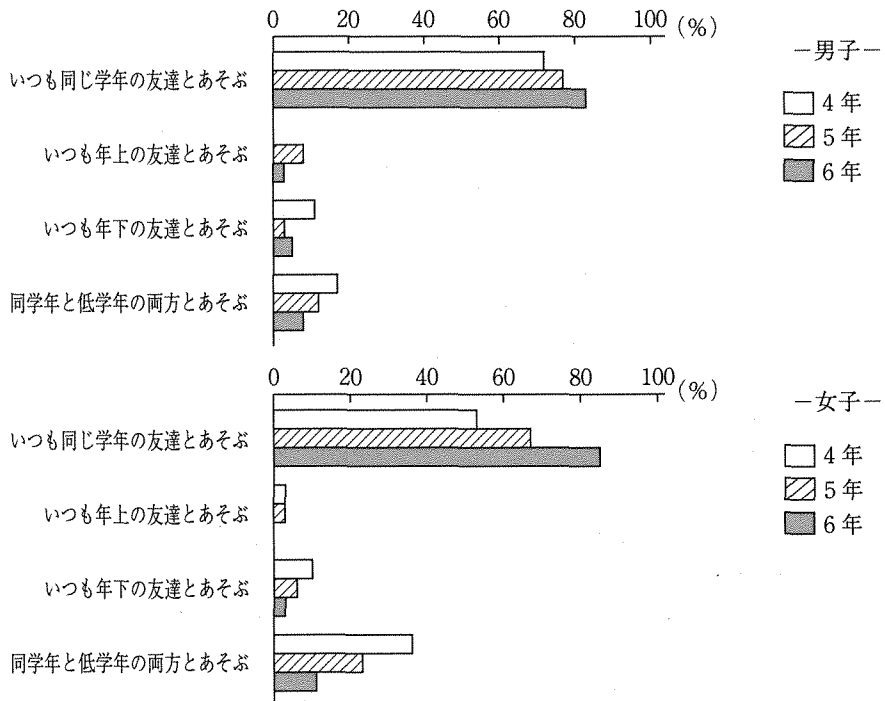


図-4 いつもどのような年齢層の友達とあそぶか

この二種類の調査結果から、遊び集団の小集団化・同質化が行き着くところまで来ていることが分かる。なお、遊び仲間の年齢構成についての設問は1985年の調査では設けられなかったので8年前との比較はできないが、はじめの先行研究のところで述べたように、深谷和子(1970)が1970年の始めという、今から30年前に遊び仲間の特徴として、集団の大きさの縮小と性差の拡大、等質集団化の傾向がみられることを指摘している。また、藤本(1966)も、彼の香里ニュータウンにおける調査研究の中で、団地に住んでいる子どもたちは、狭い校区の中に同級生の家が近接していることもあって同級生同士で仲間集団が作られやすくなることを指摘していたが、もはやこういう同年齢だけの遊び集団はあらゆる地域に広がっている。

最近の調査結果をみておこう。遊びの内容と種類のところでもとりあげた名古屋市教育委員会青少年室(1998)による小学生の放課後の生活実態調査では、違う学年の友だちと遊ぶのは4年生:5.4%,5年生:3.4%,6年生:3.3%,兄弟・姉妹と遊ぶのは,4年生:15.2%,5年生:14.3%,6年生:15.2%となっている。残りは、同じ学年の友だち(全体平均,55%)か1人で遊ぶ(5.2%)かどちらかである。

ベネッセ(1999)の調査(「子どもたちの遊び:モノグラフ小学生ナウ」)でも、「どんな友だちと遊ぶか」という問いに対して、小学5,6年生は「学校の同じクラスの友だちと遊ぶ」ことが圧倒的に多く(よく遊ぶ:75.5%,ときどき遊ぶ:17.7%),「学校の同じ学年の友だち」(よく遊ぶ:39.3%,ときどき遊ぶ:31.9%,重複回答)を加えると、ほとんど同年齢の子ども同士で遊んでいることになる。ちなみに、「近所の小さい頃からの友だち」と遊ぶのは、よく遊ぶ:14.6%,よく遊ぶ:14.4%しかない。

それでは、兄弟と一緒に遊ぶ機会はどのくらいあるのだろうか。図-5は、学年毎の結果であるが、兄弟(高学年では主に弟・妹になる)と遊ぶことは学年が上がるにつれて少なくなっている。毎日兄弟と遊んでいるという子どもは4年生でも1/4以下で、6年生になると10数パーセントにすぎない。

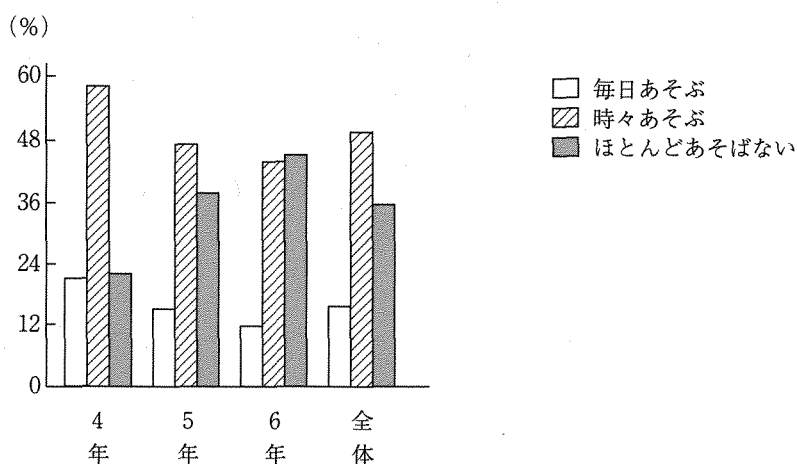


図-5 自分の兄弟とあそぶか

このような遊び仲間の年齢構成をみると、年少の子どもたちは自分の兄や姉、近所の年上の子どもと一緒に遊ぶという経験が失われつつあるということである。兄弟どうしの遊びからまず共

同遊びが始まり、兄に連れられながら一緒に異年齢集団の遊びの輪に入っていくことで、年齢を越えた大きな遊び集団が地域のなかに作られていったことを考えると、子どもの遊び文化はもはや完全にその内容を変質させた、そもそも地域に存在していた自立的な遊び文化などは消滅したということである。あるのは、マスコミを通して子ども産業から一方的に押し付けられ、絶えず購買意欲を刺激され続ける消費文化ということになる。

#### (4) 遊びについての子どもの意識

子どもたちは、自分たちの遊びの現状についてどのように考えているのだろうか。遊び時間や遊び空間、遊び仲間などについてみていく。

はじめに、遊びについて何らかの不満を持っている児童の割合をみてみよう。表-11が1992年のA小の結果、表-12が1985年のB小のものである。表-11にみるように、全体の7,8割の子どもたちが遊びに何らかの不満を持っている。6年生になるとやや数値が下がっている（特に男子）が、これは8年前の1985年のB小の場合も同じような傾向で、共通性がある。ここでは、その不満の理由まで聞くことをしなかったので、あくまでも推測の域を出るものではないが、一つの解釈としては、6年生の2学期ともなると自分たちの遊びに対しては「現状肯定感」が広がっているのかもしれない。もちろん、6年生の女子の不満の高さについてはこれでは説明ができない。いずれにしても、6年生男子の例外を除いて、大多数の子どもたちは、遊びの現状については、不満を持っているということである。そして、1985年のものと比べてさらにそれが増えているということである。表-12の場合は多くても65%（6年女子）であった。

表-11 遊びに対して不満を持っている者

	4年	5年	6年	全体
男子	74%	83%	67%	75%
女子	81%	88%	80%	83%
全体	78%	85%	74%	79%

表-12 遊びに対して不満を持っている者（1985年）

	4年	5年	6年	全体
男子	48%	45%	30%	41%
女子	61%	65%	49%	58%
全体	55%	55%	40%	50%

遊びの不満のなかでも、遊び仲間と遊び場所に対して不満を感じているものが多く、遊び仲間については、全体平均で36.7%（男子平均：33.4%，女子平均：40.1%）になっている。遊び仲間については、男子より女子の方が不満を感じているのが多くなっているのが特徴である。また、遊び場所については、全体平均で36.1%（男子平均：38.8%，女子平均：33.3%）を占めている。

次いで多いのが、遊び時間が足りないことである（全体平均：27.2%，男子平均：27.8%，女子平均：26.6%）。以下、遊び仲間と遊び場所、遊び時間について不満を感じていることを詳しくみていくことにしよう。

図-6は、遊びの仲間に関して不満な点をまとめたものである。やはり、男女とも共通に多かったのは、「塾や習い事で友だちと遊べないことが多い」というもので、この後でみる遊び時間の結果と同じように塾と習い事が子どもたちの遊びに大きな制約を与えている。塾や習い事で友だちと遊べないという回答は平均すると50%以上になっており、いかにこれらが子どもたちの集団遊びを貧弱なものにしてしまっているかが如実に示されている。また、「自分の家の近くには遊び友だちがいない」という不満もかなりの数にのぼっているが、少子化によって近所に子どもたちが減ってきていることが、さらに一層子どもたちの遊び集団を小さなものにし、そして家の中に子どもたちを閉じ込めさせることになってしまっている。また、同じクラスの子どもの遊び仲間のところまで長い距離を移動して遊びに通うといったことも当たり前のことになってしまっている。仙田（1992）はある程度の子どもの遊び集団が出来上がるためには、12歳までの子どもの数が学区1ヘクタール当たり15人は必要であると指摘している。

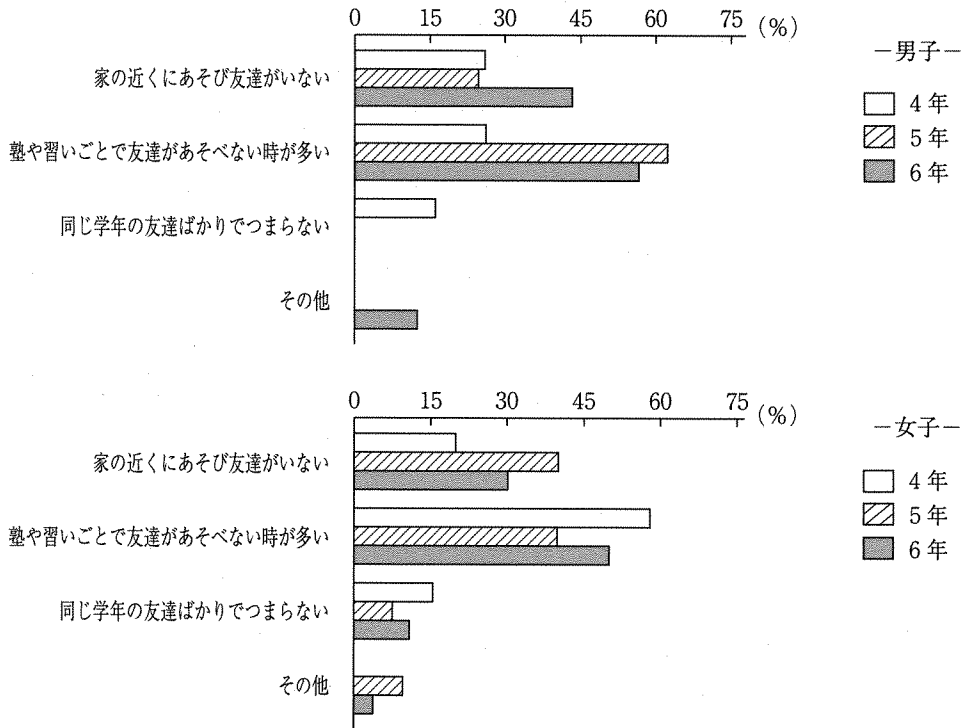


図-6 遊び仲間についての不満（重複回答）

最近のベネッセ教育研究所（1999）の調査（「子どもたちの遊び：モノグラフ小学生ナウ」）でも、子どもが遊びのなかで経験したこととして「一緒に遊ぶ友だちがみつからないこと」が、よくある：16.8%，時々ある：23.6%と4割をこえている（調査対象は、小学5年と6年生、合計492名）。

つぎに、遊び場所の不満についてみていこう。図-7は、「遊び場所についての不満」として上がっていたものである。これをみると、男女共に「公園では決まった遊びしかできない」「車が多くて自由に道路で遊べない」ことの二つに不満が集中している。公園の魅力のなさや道路から子どもたちが排除されてしまっている現状に対する不満は、既に仙田が以前から子どもの遊び空間の問題として指摘してきていることであった。ここでも、具体的に男子が上げている意見として、「もっと広い場所が欲しい」「車の通らない道が欲しい」「木登りや川遊びができる自然の多いところが欲しい」というものがあった。「遊び場所の不満」のなかでも、「公園」に不満が集中しているということは、裏を返せば、もはや都会の中では子どもたちにとって公園以外の遊べる場所、魅力的な場所がなくなっていることの表れともとれるのである。面白く遊ぶことができる場所が他にあるのならば、そちらに行くはずである。屋外の遊び空間とは別のものに、4年生だけが男女共に自分の部屋がないことを不満として上げている。高学年になる前の子どもが自分の自由になる部屋を欲しいという気持ちと、現実の親の対応との間のギャップから生じている不満である。

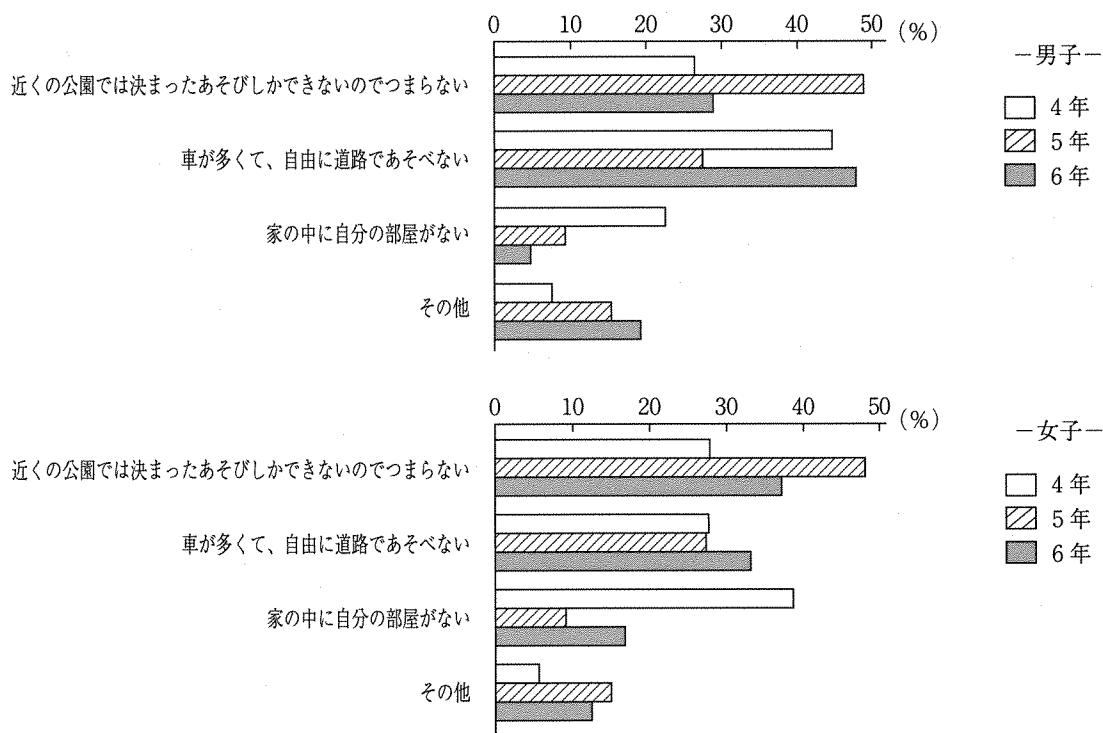


図-7 遊び場所についての不満 (重複回答)

時間の不足については、圧倒的に塾・習い事によって時間がなくなることに対する不満を持っている人が多い(図-8)。塾・習い事以外のものでは、4年男子と6年女子が「学校のクラブや少年団活動が忙しい」ことを上げている(20-25%)。4年生の男子の場合は「サッカー少年団」、6年生・女子は「スクールバンド」の活動が該当するものである。特に、スクールバンドはこの当時のA小は、全国大会に出場するほどの実力を持ったクラブであった。ここに参加している子ども

もたちは、決してクラブで活動することにネガティブな感情を持っているわけではないし、積極的に参加していることは間違いない。自分たちの自由な時間が結果的には少なくなることに對しては率直な不満を抱いているというところだろう。絶対的な時間があれば、学校のクラブ活動で放課後使われる時間はそれほど問題になるほどのものではないはずだが、塾・習い事を消化していかなければならないことが加わると、遊び時間の不足という不満が出てくるのだろう。その他、上記以外で子どもが不満を持っていることに、「学校の委員会活動で家に帰るのが遅くなる（4名）」「学校週5日制が始まってから月曜日の帰りが遅くなった（3名）」などがあった。月曜日の帰宅時間が遅くなったという意見は、それまでの月曜日の午後はクラブ活動の時間に当てられていて、クラブのない週は4時間授業となっていたのが、学校週5日制になってからは月曜日が5時間授業となってその分帰宅時間が遅くなったことを指している。あるいは。遊び場所に対する不満とも重なることだが、もっと学校に残って遊んでいたいのに下校しなければならないと、不満を示した児童もいた。

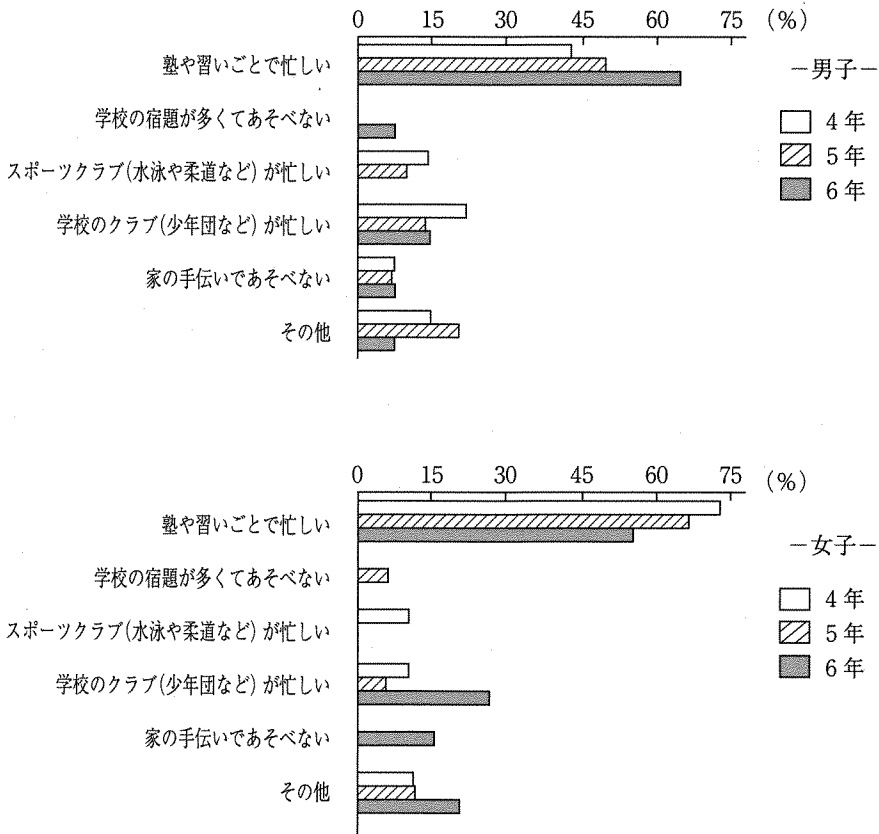


図-8 遊び時間についての不満 (重複回答)

以上の「遊びの不満の内容」を8年前の1985年のB小学校の結果と比べてみよう(図-9)。B小の調査では、遊びに不満を感じているものを5つの選択肢から選ぶ(重複回答)という形式をとっており、1992年のA小で用いられた方法とは違っている。そのため、二つの結果を直

接比べることはできないが、それでもおおよその傾向とその違いを知ることはできる。どの学年でも男女ともに共通して多い不満は、「遊ぶ時間が少ない」ことであり、男子の場合はさらに「遊ぶ友だちが少ない」ことを上げている。7年間変わらずにあるのが十分に遊ぶ時間が保証されていない子どもたちの忙しい日常生活の姿である。女子の場合には、遊ぶ仲間が少ないことへの不満が男子ほど多くなっていないが、8年後のA小の場合は逆に女子が一番遊びの中で不満を感じているのは遊び友だちのことであった結果と違っている。この相違についての理由はこれ以上はわからない。

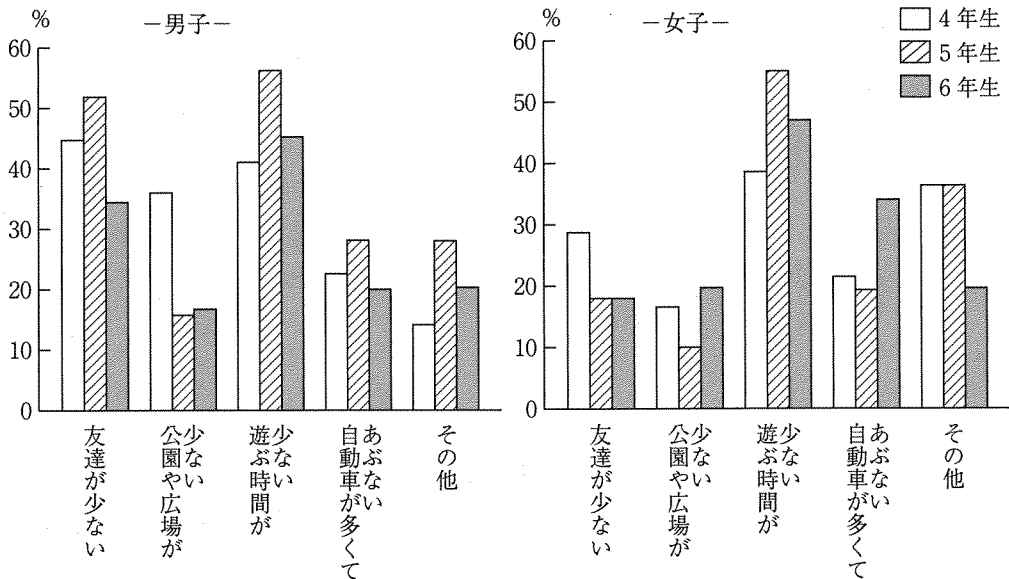


図-9 「遊びに対する不満(重複回答)」(1985年)

ここまでは、子どもたちが抱いている「遊びの不満」の分析であったが、それでは、逆に子どもたちはどんな遊びをしてみたいと思っているのだろうか。この「あなたがやってみたいと思う遊びはどんなものですか」という設問には、男子では1人平均して4個前後、女子では3個ほどの遊びをあげていた。それらの内容をまとめたのが次の図-10であるが、それぞれの項目が全体に占める割合の形で算出した。ここで、男女共に一番多かったのは、「時間を気にしないで思いきり遊びたい」という要求で、どの学年でも8割以上の子どもがあげている。先の遊び時間が足りないことが不満として相当数あったことがここでもあらわれているが、小学生の段階で、もはや自由に思う存分遊ぶことすらできなくなってしまっている彼らの日常生活とはいったい何なのだろうと思わずにはいられない。この「時間」に次いで多いのが、「たくさんの友だちと一緒に遊びたい」「自分たちで工夫して遊びたい」の二つで、これも全体の中では5割以上の数になっている。これらも、先の「遊びの不満」として上げられていた「遊び仲間」「遊び場所」の二つの裏返しの結果である。「自分たちで工夫して遊びたい」という欲求は、逆に言えば現実の主な遊び場所である公園では決まった遊びしかできないし、自然も少なくなって秩序立てられた遊び空間しかないことの反映であるといえよう。図-10の結果について、学年の違いに注目してみると、4年生の場合は「虫取りなど、自然の遊びがしたい」とか、「違う学年の友だちと遊ん

でみたい」といった反応がかなりあるが、これらが学年が進むにつれてこういう願望が少なくなってくる。こういった遊びに対する興味そのものも高学年になると失われてしまうのであろう。

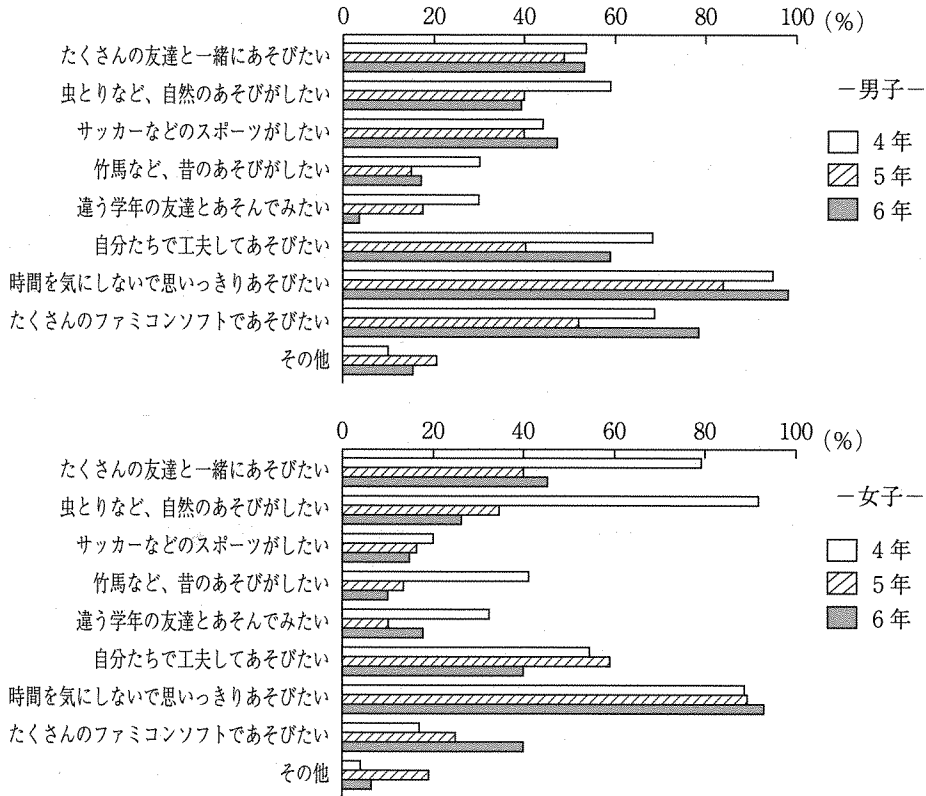


図-10 してみたいと思う遊び（重複回答）

最近の調査として、何度か取り上げているベネッセ教育研究所（1999）の子どもの遊び調査の結果について述べる。図-11は子どもがどのような遊びをしてみたいかという問いに対する回答であるが、上のA小の児童と同じように「長い時間遊びたい」「もっと広い場所で遊びたい」「もっといろいろな遊びをしたい」といった欲求が強いことがわかる。そして、学年別、男女別の結果をみてみると（表-13）、やはり5年生よりは6年生で「よくある」という反応が少なくなると、願望の強さもうすれてくる傾向がここでもあらわれている。

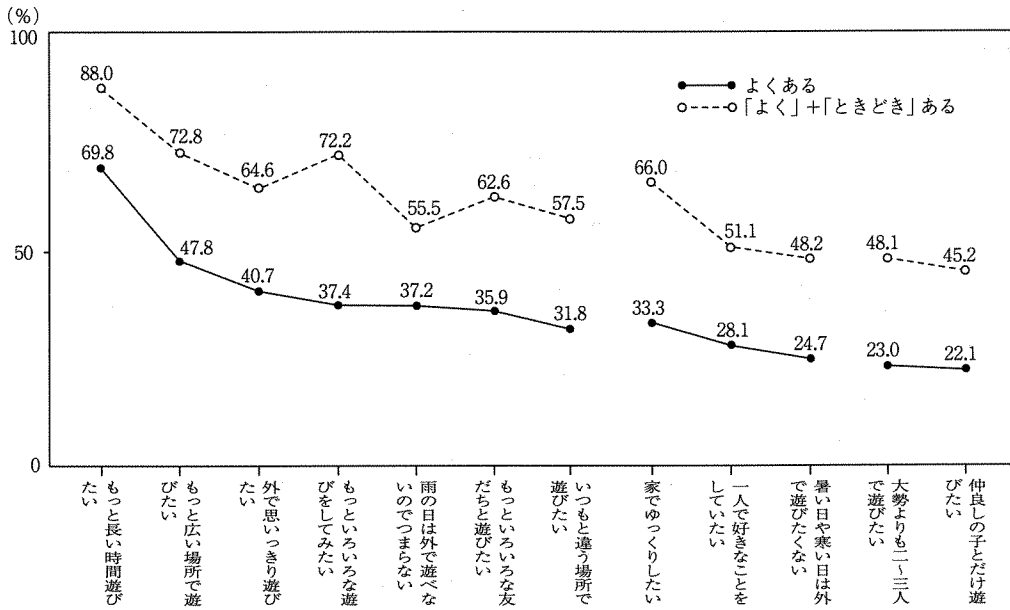


図-11 子どもの遊び意欲 (ベネッセ教育研究所, 1999より)

いずれにしても、こういうことからわかることは現実の遊びに大いなる不満を持っていること、そしてそのような願望が満たされない条件の中で子どもたちの毎日の遊びと生活が繰り返されているということである。そして、これらの結果で気になることは、高学年になると先の自然の遊びや違う年齢の子どもと遊んでみたいといった願望がうすれ、いわば「現状肯定的な反応」が多くなってきて、自分たちの遊びの現実の枠の中でしか発想できなくなっている点である。現実が持っている我々のものの考え方や発想に規制をかけてくる力の大きさは考えるまでもないことなのだが、改めて再認識させられたということである。

子どもたちが自由に遊び、創造的な遊びが展開出来るためにはまずもって豊かな環境—余裕のある気持ちと空間—が絶対条件としてあるということ。そして、子どもは遊びの天才なのだから、どこでも遊ぶことができるという言いかたがともすると、子どもたちの遊びの環境や条件をきちんと確保するという大人の責任の回避の手段として使われていなかったらどうかと指摘しているのは、ここで何度もとりあげている仙田 (1992) である。

子どもたちが現実の遊びにどれだけ熱中し、充実感を感じているかを二つの設問から探ってみる。図-12は、「遊びに夢中になって家に帰る時間を忘れてしまったことがありますか」という質問の結果である。学年、男女差がみられなかったため、これらを全て込みにした形で表している。この結果では、遊びに夢中になっている子どもたちが6割いて、子どもたちは塾や習い事などの忙しい毎日の中で、時間的に十分満たされるわけではない遊びにも熱中する姿をみることができ一方で、約1/3の子どもたちは時間を忘れて遊ぶに夢中になったことがないと答えているのも現実である。むしろ、1/3もこういう経験がない子どもがいることに子どもの遊びの問題の大きさを感じざるを得ないのである。

表-13 子どもの遊び意欲・学年、性別集計表

質問項目		全体	性別		学年別		
			男子	女子	5年	6年	
遊 ぶ と き の 気 持 ち	もっといろいろな遊びをしてみたい	1. よくある	37.4	44.6	29.2	39.0	35.9
		2. ときどきある	34.8	32.6	37.6	32.5	37.1
		3. あまりない	17.3	14.7	20.4	16.9	17.7
		4. ぜんぜんない	10.5	8.1	12.8	11.6	9.3
	もっと長い時間遊びたい	1. よくある	69.8	76.6	61.7	69.8	69.7
		2. ときどきある	18.2	15.3	21.6	17.5	18.9
		3. あまりない	6.3	5.0	7.9	6.7	5.9
		4. ぜんぜんない	5.7	3.1	8.8	6.0	5.5
	外で思いっきり遊びたい	1. よくある	40.7	45.9	34.8	44.3	37.0
		2. ときどきある	23.9	22.6	25.1	24.7	23.0
		3. あまりない	21.0	17.5	25.1	17.1	25.1
		4. ぜんぜんない	14.4	14.0	15.0	13.9	14.9
	もっといろいろな友だちと遊びたい	1. よくある	35.9	36.3	35.9	39.0	32.6
		2. ときどきある	26.7	25.5	28.3	27.1	26.3
		3. あまりない	23.2	23.9	22.1	21.5	25.0
		4. ぜんぜんない	14.2	14.3	13.7	12.4	16.1
	仲良しの子とだけ遊びたい	1. よくある	22.1	27.6	15.5	27.7	16.1
		2. ときどきある	23.1	21.4	24.8	18.1	28.4
		3. あまりない	32.7	29.2	37.1	30.5	35.2
		4. ぜんぜんない	22.1	21.8	22.6	23.7	20.3
大勢よりも、2～3人で遊びたい	1. よくある	23.0	26.1	19.4	25.5	20.4	
	2. ときどきある	25.1	20.6	30.4	25.9	24.3	
	3. あまりない	25.1	22.2	28.6	21.1	29.3	
	4. ぜんぜんない	26.8	31.1	21.6	27.5	26.0	
いつもと違う場所で遊びたい	1. よくある	31.8	33.9	29.6	34.7	28.8	
	2. ときどきある	25.7	23.6	28.3	25.1	26.3	
	3. あまりない	23.4	23.6	23.5	20.3	26.7	
	4. ぜんぜんない	19.1	18.9	18.6	19.9	18.2	
もっと広い場所で遊びたい	1. よくある	47.8	56.8	36.9	52.4	42.7	
	2. ときどきある	25.0	24.1	26.2	23.2	26.9	
	3. あまりない	13.6	7.4	20.9	12.0	15.4	
	4. ぜんぜんない	13.6	11.7	16.0	12.4	15.0	
家でゆっくりしたい	1. よくある	33.3	33.7	32.7	33.6	33.1	
	2. ときどきある	32.7	25.6	41.2	27.6	38.1	
	3. あまりない	20.2	20.9	19.5	23.6	16.5	
	4. ぜんぜんない	13.8	19.8	6.6	15.2	12.3	
1人で好きなことをしたい	1. よくある	28.1	31.4	24.2	30.9	25.2	
	2. ときどきある	23.0	18.6	28.2	24.9	20.9	
	3. あまりない	25.9	23.6	28.7	22.9	29.1	
	4. ぜんぜんない	23.0	26.4	18.9	21.3	24.8	
雨の日は外で遊べないの でつまらない	1. よくある	37.2	40.5	33.2	40.7	33.5	
	2. ときどきある	18.3	17.8	19.0	16.3	20.3	
	3. あまりない	20.5	16.6	25.2	17.9	23.3	
	4. ぜんぜんない	24.0	25.1	22.6	25.1	22.9	
暑い日や寒い日は外で遊 びたくない	1. よくある	24.7	21.5	28.6	22.2	27.4	
	2. ときどきある	23.5	20.4	27.3	17.1	30.4	
	3. あまりない	25.8	23.8	28.2	28.6	22.8	
	4. ぜんぜんない	26.0	34.3	15.9	32.1	19.4	

(ベネッセ教育研究所, 1999より)

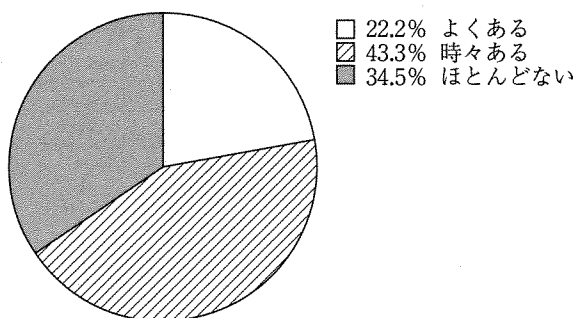


図-12 あそびに夢中になって、家に帰る時間を忘れるか (全体)

次の図-13は、「何をして遊んだらよいのか分からなくなる」ことがどの程度あるかをたずねた結果である。ここでも、「よくある」「時々ある」を一緒にすると、どの学年でも7割近くはこういった経験をしており、子どもたちの遊びがバラエティーとしても貧困化していることや、遊びが内容として充実したものには必ずしもなっていないことのあらわれともいえる。

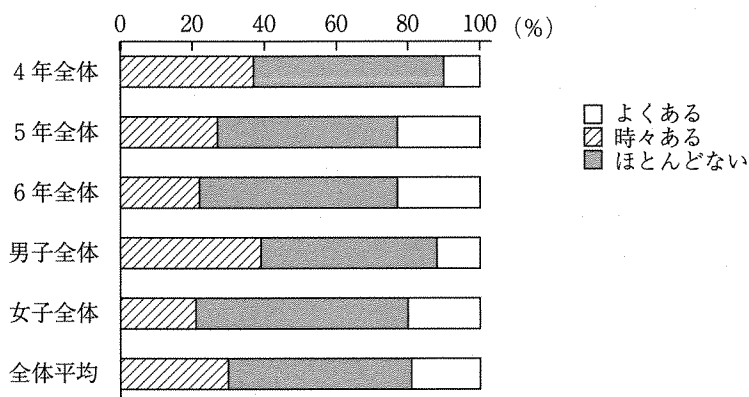


図-13 何をしてあそんだらいいかわからなくなる時があるか

最近の調査としては、先の遊び仲間のことで不満を感じているところでも上げたベネッセ教育研究所 (1999) の調査で、A小の調査と同じように子どもが遊びの中で経験したことを聞いているが、「何をして遊んだらいいかわからないこと」があると回答した児童 (5, 6年生, 492名) は、全体で、よくある: 16.8%, 時々ある: 21.9%で、合わせておよそ4割近い。この結果は、A小の場合よりは「困った」という経験は少なくなっている。

#### (5) 子どもの遊びの生態学的観察

A小学校の子どもたちの放課後の遊びの様子について、その概略をエピソード的にこの小学校の校区にあるいくつかの子どもたちの遊び場所における観察からまとめて述べていくことにする。子どもたちがしばしば遊びにくる所は「団地山公園」(図-14参照) と呼ばれている小さな公園

で、ここにはブランコ、鉄棒、砂場といった定番の公園遊具の他に、比較的大きな築山と草はらがあり、子どもたちの遊びの拠点になっている。子どもたちは、放課後この公園によく遊びに来ていたが、なかにはカバンを持ったまま学校の帰りに立ち寄って遊んでいく子どももいた。また、この公園は子どもたちの「待ち合わせの場所」としても使われていた。「待ち合わせ」には二通りあって、一つはこの公園に取りあえず集まる約束にして、この公園で遊んだり、他の場所に移って遊んだりする場合と、もう一つは特に遊ぶ約束をしたわけではないが一人でこの公園に来て、誰か友だちが来るのを待つというものである。

実際、ここで遊んでいたある子どもは「ここに来れば誰か友だちがいるから（遊び仲間をみつけるのには）困らない」と言っていた。この公園が待ち合わせ場所によく使われるのは、彼らが多く住んでいる団地のほぼ中心に位置していることと、学校からも近く、学校からの帰り道に面していることによる。



図-14 調査地域周辺の略図

この公園でよく見かける遊びは、男子ではサッカー、ドッジボール、女子は鬼ごっこや公園遊具を使った遊びである。その他、ここでは低学年の児童たちは「木登り」や「靴投げ」（ブランコに乗りながら靴を遠くまで飛ばすことを競う）などを行っていた。また、この公園内には柵で囲まれた倉庫のような小屋があって、その屋根に登って遊ぶ子どもや、公園内の築山のとっぺんから自転車で一気に下に降りるといったやや危険な遊びに興じている子もみかけた。いずれにしても「団地山公園」は子どもたちにとっては格好の遊び場になっているようだ。

他の公園についてみると、「運動公園」がある（図-14）。ここは公園というよりは、むしろ「広場」ないしは「空き地」といった感じで、やや広い土地にベンチがいくつか置かれているだけである。ここでは男子はよくサッカーや野球をしている。さらに、この校区に隣接して大きな総合公園があるが、子どもたちはこの公園にはあまり足を運んでいない。この公園は子どもたちが遊ぶ上では広すぎるのと、公園としてきれいに整備されているのが敬遠されている理由である。ここで多く見かけるのは母親と一緒に来た幼児たちの姿である。子どもたちはこの種の公園につ

いて、「同じ様な公園で面白く遊べない」「公園の管理人に注意をされて自由に遊べない」といった不満を述べていた。

公園以外の場所でよく子どもたちが遊んでいる所は学校のグラウンドで、ここではいつもたくさんのお子さんのお子さんが遊んでおり、一度家に帰ってからもう一度戻ってグラウンドに遊び来ている。男子はやはりサッカー、ドッジボールなどの球技、女子はグラウンドの隅のアスレチックや鉄棒を使って鬼ごっこをしている姿をよく目にした。また、時折男女一緒になって遊んでいる場合もあった。

その他、子どもたちがよく集まる場所として学校の飼育小屋がある。校門の横にビニールハウスがあり、その中で動物が飼われ、草花も栽培されている。飼育当番の友人が中にいるためもあるが、学校帰りのカバンを持った子どもたちが飼育小屋に立ち寄ってにぎやかに声を上げている姿を毎日のように見かけた。

また、学校のすぐ近くにあるスーパーマーケットも子どもたちの遊び場所の一つになっている。このスーパーマーケットの中には小さなゲームコーナーがあって、男子などはここで遊んでいる姿をよく見かける。また、ここは遊びに行く途中、あるいは遊んでいる最中にちょっとしたおやつを買いに来たりする店にもなっているが、子どもたちにとって一番の目的は「ガチャポン」や「ガチャガチャ」（お金を投入してハンドルを回すと、カプセルの入ったおもちゃの類が出てくる）と言ったりしているもので遊ぶことである。これは低学年や中学年の子どもに人気のものである。その他、子どもたちの間ではやっている「カードダス」（百円を入れるとテレビアニメなどで人気のキャラクターのカードが出てくるもの）もお目当てのものである。この種のカードものは2000年の今ではポケモンゲームやカードゲームとなって子どもたちの人気を集めている。

あるいは、回数は多くないが1-3人の少人数で「なわ飛び」や「ゴム飛び」「ローラースケート」「一輪車」「かくれんぼ」などを行っている。高学年の女子は、学校の帰りや一度家に帰ってから道路脇や公園などいたる所でおしゃべり、立ち話をよくしている。彼女らにとっては、これが楽しい「遊び」になっているのだろう。

全般的に、外遊びで見かけるのは男子が多く、それに比べて女子が外で遊んでいる姿は少なく、特に高学年になるとその姿は本当に少なかった。また、習い事や塾に行くためにカバンを抱えて子どもたちが遊んでいる公園の横を通り過ぎていく姿や、ずいぶんと日が暮れてから塾・習い事を終えて家に帰る子どもの姿もよく見かけた。ある男子は委員会で遅くなる日はしかたなく家の中で遊んでいる」と言っていたが、この子は放課後日が暮れるまで「運動公園」で仲間とキャッチボールをしていたが、これからは次第に日没が早くなって、外遊びの時間が短くなるのを残念がっていた。この子が言っているように、遊ぶ時間がたっぷりあればもっと外で仲間と遊ぶわけで、家の中に入って遊んでしまうのは子どもたちに与えられた自由な時間の少なさ故のことかもしれない。

子どもたちは「雑草が生い茂って、自然が残っているところ」「昆虫が取れる場所」「ガラタがあるところ」で遊んでみたいと言ったり、「山（団地山公園の築山）の上に自分たちの家を作って、その中で遊んでみたい」と言う子もいた。この種の「秘密基地」は昔の子どもにとっては現実の遊びとして体験できたものであったが、今の時代の、しかも都会に住む子どもにとっては、もはや願望の対象でしかないのだろう。

### 3. 子どもたちの1週間の生活

ここでは、子どもたちの日常生活の様子を1週間にわたって調べられた生活時間調査の結果とその分析について述べる。

#### (1) 塾・習い事について

図-15は、学年・男女別の「塾・習い事」に通っている者の割合である。これをみても、非常に多くの子どもたちが、塾や習い事に通っていることがわかる。学年別にみても、最も少ない4年生・男子でも69.7%と7割の子どもが塾ないしは習い事に通っている。また、男子よりも女子が塾・習い事に通っている率は高く、後でその内容についてみるように女子の場合はピアノなどの習い事が多くなっている。

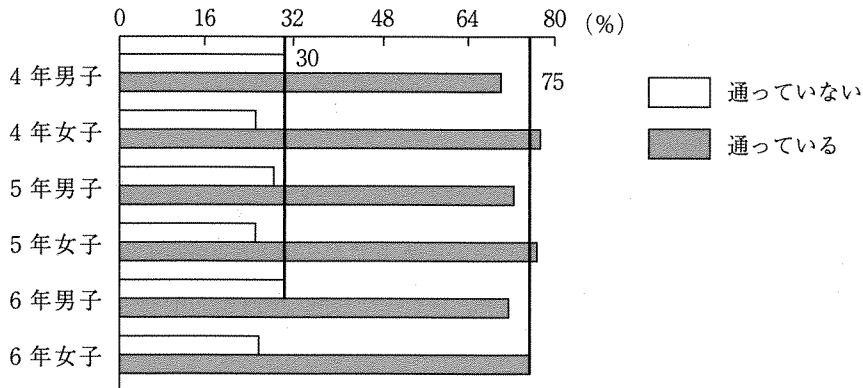


図-15 塾・習いごとに通っている者の割合

次に塾、あるいは習い事に通っている回数（表-14）をみると、週に2回以上通っている児童が半数近くいて、また2種類以上の塾ないし習い事に通っているのが男子で1/4、女子になると1/3にまでなっている。ちなみに「種類」で最も多かった児童（4年男子）は、エレクトーン、水泳、習字、英語塾に各週1回で計4回通っている。「回数」で最も多かった児童（5年男子）は、塾に週4回、ピアノ週1回、習字週1回の計週に6回である。ほぼ毎日ということである。

表-14 2種類または2回以上通っている者の割合

	男子全体	女子全体	全体平均
週2種以上	24.2%	33.0%	28.4%
週2回以上	41.4%	40.0%	40.5%

(人数は、男子99、女子91、計190である。)

先の遊びの不満として子どもたちがしばしばあげていたのは、「塾や習い事が忙しく遊び時間が少ない」こと、「遊び友だちが習い事や塾に行っているために一緒に遊べないことが多い」こ

とであった。また、逆に遊びとしてやってみたいこととして「時間を気にしないで思いっきり遊ぶ」ことをあげていたことも、子どもたちの日常生活がもはや本来の子どもの世界ではなく、大人と同じような時間の現実に支配されてしまっていることを如実に示しているのである。一部の子どもだけが塾や習い事の教育の過熱化に走らされている段階ではまだ救われていた。しかし、この調査結果のように7割以上の圧倒的に大多数の子どもたちが塾や習い事に通うようになると、遊び時間が短くなるだけでなく、遊びの成立にとってのもう一つの必須条件である遊び仲間をお互いが奪ってしまっている。子どもたちはバラバラな時間と曜日に塾や習い事に通っているのであって、共通の自由な遊び時間を探しだすことがはなはだ困難になってしまっているのである。こういう状況では、友だちと一緒に遊べる時間は週に何回か、しかも塾や習い事の合間のわずかの隙間の時間でしかなくなっている。もはやこういう状況では、1人か2人の小さな単位でしか遊ぶことができなくなっており、またズタズタに切り裂かれた時間の中で遊ぶためには大人によって仕組まれ、いまや巨大な産業ともなった遊び産業の消費文化の中に入りこんでいくしかなくなっている。ファミコンしかり、カードゲームしかりである。そしてこの種のものとうまくリンクさせながら消費意欲を無限なまでに刺激させる装置としてのテレビアニメとマスコミ情報が子どもを取り囲んでいる。

8年前の1985年B小の結果と比較してみよう(図-16)。7年の間でどの学年も塾、習い事に通っている子どもの数は漸増しているが、基本的には8年前から多くの子どもたちが塾や習い事に通うという実態は完成していたということである。ただ、1985年と1992年の7年間の間で大きく変わった点は、4年生の男子で塾・習い事に通う者が大きく増加したことで、8年前は半数に満たなかったのが、70%にまで増えている。4年生にまで塾・習い事に通う傾向が拡大してきているということである。

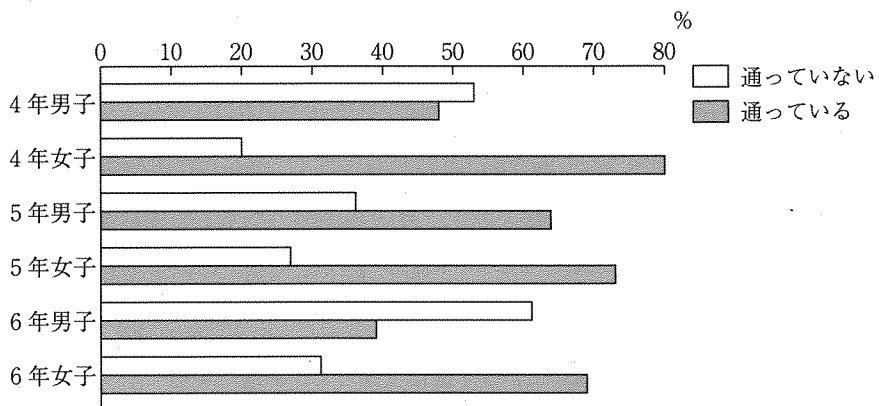


図-16 塾・習いごとに通っている者の割合(1985年)

同じく、1985年の調査で子どもたちが週に何回くらい塾や習い事に通っていたかをみたものが図-17であるが、男子の場合は週2回以上は5年生では40%以上になっているのを除くと6年生でも30%程度と、1992年と比べて回数はまだ少ない。女子の場合は、1985年と1992年とではほとんど違いはない。男子の結果について、5年生だけが何故、このように通う回数が増えているのか、その理由は不明である。

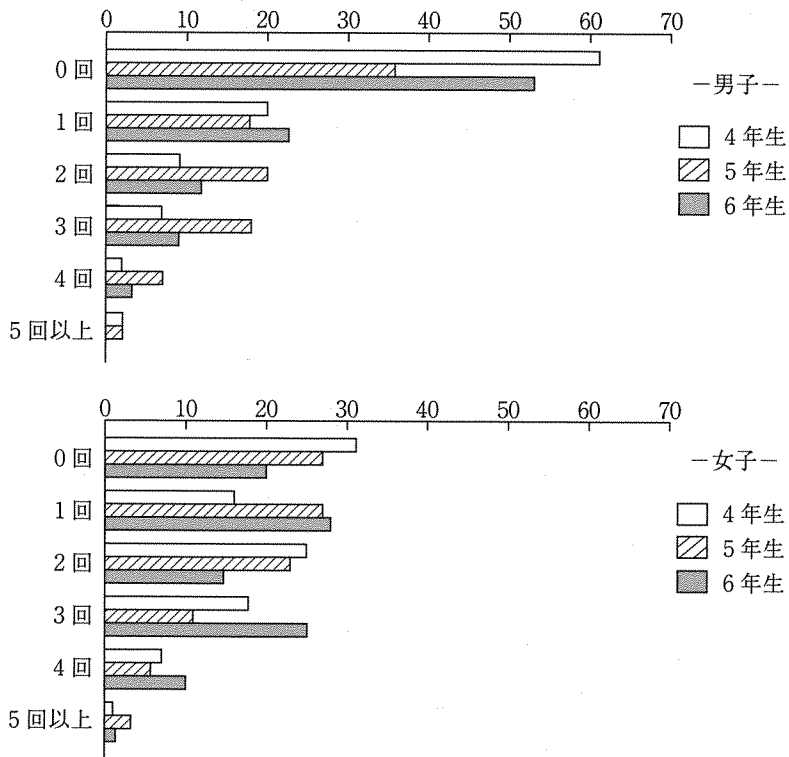


図-17 塾・習い事に行く1週間あたりの回数 (1985年)

次に、彼らが通っている習い事・塾の種類をみてみよう。表-15は、男女別のその種類であり、表中の数字はそれらに通っている者の人数を表している (重複回答)。ここでは、学年の違いよりも男女の間の違いの方が大きかったので、男女別に集計している。

子どもたちが多く通っているものとしては、習い事の代表でもあるピアノ、水泳、習字が並んでいる。ここで注目しておくべきことは、女子と比べて男子で圧倒的に多いのは学習塾であり、女子の場合はどちらかというと言い事が多くなっている点である。女子の方が塾・習い事に通っている者の数や回数は多いが、その内容をみると習い事の方が多くなっている。ちなみに男子の場合は全体の塾・習い事の中で純粋の塾である英語塾と学習塾に行っている者の割合が39.4%とほぼ4割であるのに対して、女子の場合は23%である。そろばん塾は習い事の要素が大きいのので習い事に入れて算出した。男子の場合は1992年になって4年生の男子も塾・習い事に行く者が増えているが、それは多くは塾に通うものの数の増加と共に学年が下がってきていることによる。明らかに4年生になって学習内容の増加と難しさが増してくる中で、学校における学習の補強と将来の中学校以降の学習への備えのために塾に通わせておくという親の不安の「安心装置」としての「通塾化」がどんどん広がってきているということである。もっと言えば、親が望むような「学習の場」としての学校に信頼を持ってなくなっているということであろう。もっとも、この親が期待をしていることと、学校のそれとのズレそのものが問題なのであるが、事実としてはそういうことである。

表-15 習い事、塾の内容（重複回答）

男子全体	N=99	女子全体	N=91
水泳	17	水泳	11
習字	18	習字	13
ピアノ	10	ピアノ	32
エレクトーン	1	エレクトーン	7
武道	4	その他の楽器	3
		バレエ	2
英語塾	15	英語塾	14
学習塾	24	学習塾	9
そろばん塾	4	そろばん塾	5
不明	6	不明	4

注) 「その他の楽器」は、ピアノ、エレクトーン以外の楽器の習い事で、バイオリン、クラリネット、琴（いずれも女子各1名ずつ）。「武道」は柔道、剣道、空手、居合道（いずれも男子各1名ずつ）。不明は単に「習い事」とだけ記入されていたもの。

塾、習い事の調査は、最近の通塾率の増加とそれに対する社会的関心も高くなってきて調査報告も多くなっている。それらのいくつかをみてみよう。

文部省は1994年7月に、「学習塾等に関する実態調査」（調査実施年、1993年）の結果を発表している。この調査は過去、昭和51年、60年と2回実施しており、3回の通塾率や習い事などの学校外の学習活動を行っている児童・生徒の数の推移などを知ることができる（内外調査、1994より）。表-16にみるように、学習塾に通う児童・生徒の数は1985年から1993年の間に急速に増加している。まさにこの二つの年は本論の調査が行われた年とほぼ同じである。1992年のA小の調査では塾と習い事（けいこ事）を区別しないでまとめて集計しているが、子どもたちも7割以上は塾と習い事のどちらか、あるいは両方に通っているという結果になっており、全国調査と同じ結果とみてよい。また、1985年（B小）から1992年（A小）で特に増加が顕著であった4年生の男子の塾・習い事に通う児童の増加も、それらの内容の分析から塾に通う者が増えてきたことによると推測したが、文部省のこの結果でも同じように小学4年生の通塾率は1985年から1993年の間で15.4%から23.6%に増えている。それにしても文部省の調査で示された1993年の通塾率が小学5年で31.1%、小学6年で41.7%という数字は恐るべき数字である。

表-16 通塾率 (住田正樹, 1995より) (%)

	学 習 塾			けいこごと	
	1976年度	1985年度	1993年度	1985年度	1993年度
小学校1年生	3.3	6.2	12.1	60.1	70.1
2年生	4.8	10.1	14.1	69.1	79.4
3年生	7.5	12.9	17.5	76.8	81.2
4年生	11.9	15.4	23.6	78.0	82.5
5年生	19.4	21.1	31.1	73.9	77.5
6年生	26.6	29.6	41.7	65.7	70.6
小学校全体	12.0	16.5	23.6	70.7	76.9
中学校1年生	37.9	41.8	52.5	35.7	36.7
2年生	38.7	44.5	59.1	26.4	29.3
3年生	37.4	47.3	67.1	19.6	18.8
中学校全体	38.0	44.5	59.5	27.4	28.3
小学校・中学校全体	20.2	26.3	36.4	55.5	59.6

ベネッセ教育研究所(1997)による1996年の調査でも小学校5年生2,665名の学習塾への通塾率は33%で、さらに東京都区内では47.5%という高率、地方都市(四国の県庁所在地)でも33.8%になっている。

名古屋市教育委員会青少年室(1998)による1997年の名古屋市内の小学生6,900人(有効回答数4,500人)を対象にした調査では、通塾率は4年生:28.3%,5年生:40.1%,6年生:43.5%で、週2回以上塾に通っている者が圧倒的に多く、週1回の者は10数パーセントにしか過ぎない。スポーツクラブも含めて習い事に通っている児童は、4年生:83%,5年生:77.4%,6年生:68.1%とやはり高くなっている。また、A小の結果でみられた習い事に通っている者は女子の方が多いという傾向はこの名古屋市の調査でも同様で、男子の全平均平均が74.9%であるのに対して、女子のそれは、82.8%となっている。

東京都生活文化局(1999)による調査(東京都子ども基本調査,1998年実施)は、都内の小3,小5,中2の児童生徒1,916人を対象に各種の調査を行っており、またその分析も各種の統計的手法の利用も含めて要因間の洗い出しなどきわめてレベルの高い報告内容になっている。各学年毎の調査対象者数がやや少ないという点はあるものの、この調査研究は1977年から3年毎に1998年まで8回の調査を継続して行っており、時系列的な変化を知ることが出来る。表-17は1998年の時点における塾・習い事に通っている者の割合であるが、小3から小5にかけて学習塾への通塾率の増加と、小学生の場合は女子が学習塾に加えて習い事も多いことが特徴である。これはA小の女子でみられた結果と同じである。先のベネッセの調査結果にもあるように東京・首都圏の通塾率は他の地域と比べても高くなっているが、表-18の学年別、種類別の時系列データから分かるように、調査第1回目の1977年から学習塾への通塾率36.5%、その他の習い事もかなりの高い通塾率になっており、一見すると微増のように見えるのは、既に4半世紀からほぼ天井に達しているためとってよいだろう。

表-17 学年別通塾率（性別）（東京都生活文化局，1999より）

種類(注)	性別 学年	男子				女子			
		小3	小5	中2	計	小3	小5	中2	計
音楽		15.2	13.0	7.0 **	11.6	52.6	42.0	28.9 ***	41.7
習字・珠算		20.3	19.6	5.6 ***	14.9	34.4	33.6	14.8 ***	28.0
学習		30.2	47.9	51.5 ***	43.6	30.0	37.8	45.8 ***	37.5
スポーツ		59.0	53.6	18.9 ***	43.0	34.1	20.8	5.6 ***	20.8
全体		88.3	91.9	79.7 ***	86.4	91.3	88.3	79.9 ***	86.8

注) 「ピアノ、エレクトーン、バイオリン」を「音楽」, 「英語、英会話」「算数・数学」「国語」「社会、理科」を「学習」, 「水泳」「剣道、柔道」「野球」「サッカー」を「スポーツ」とした。

\*\*\*:  $P < .001$  \*\*:  $P < .01$  \*:  $P < .05$

表-18 通塾率の時系列変化（学年別・種類別）（東京都生活文化局，1999より）（%）

項目	調査回(年)	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
		(昭和52年)	(昭和55年)	(昭和58年)	(昭和61年)	(平成元年)	(平成4年)	(平成7年)	(平成10年)
学年別	小 3	86.3	84.7	86.6	87.5	81.4	91.0	88.3	89.8
	小 5	84.3	89.8	90.0	88.6	93.2	92.6	88.6	90.1
	中 2	64.9	70.3	75.8	76.7	82.4	80.9	76.0	79.8
種類別	音楽	32.9	22.3	23.7	21.7	26.4	27.8	27.7	25.9
	習字・珠算	31.8	34.8	31.8	28.2	27.9	25.8	23.2	21.1
	学習	36.5	36.7	43.9	36.4	39.2	46.8	41.1	40.7
	スポーツ	13.2	21.8	24.3	27.3	32.8	33.0	32.6	32.4

以上の塾・習い事に加えて、男子の場合にはスポーツ少年団に入っている者が相当数いて、その活動のためにさらに放課後の時間に使われることになる。ちなみにスポーツ少年団に入っている男子の数は表-19のとおりで、半数近い子どもが参加している。

なお、女子もバレーボールチームに参加しているものが6年生で2名いたが、この表からは外して男子の結果のみを示した。スポーツ少年団の内容としては、サッカーが圧倒的に多く、野球クラブへの参加は1割である。このスポーツ少年団は競技スポーツを目指しているものではないが、サッカーブームが起きると間髪を入れずに子どもたちの中にそれが入りこんでおり、子どものスポーツ世界は見事なまでに大人のスポーツ文化やスポーツ産業に組み込まれている。このA小の校区では活発に行われていないが、後でみるように他の校区（南区）C小学校区では大人の指導者による本格的な競技化された少年野球が活発に行われており、多くの児童がそこに参加している。そこでは子どもたちのスポーツが完全に大人のスポーツ文化とスポーツ産業に組み込まれ、本来の姿と活動が変質した形で展開されている。ここに大人が子どもの遊びないしはスポーツの中に何なく介入してしまう、またそれを許さざるを得ないという現実の問題がある。

表-19 スポーツチームに入っているか（男子）

	4 年	5 年	6 年	男子平均
入っている	51.4%	43.0%	44.5%	46.3%
入っていない	48.6%	57.0%	55.5%	53.7%

(2) 遊び時間

ここでは、子どもたちが平日の下校後から就寝までの間にどのくらいの時間遊んでいるかをみていくことにする。この遊び時間の中にはテレビの視聴時間は含めていない。テレビの視聴時間については、次の4. 子どもたちの学校休日の過ごしかたのところ述べる。

図-18は、A小と1985年・B小の学年と男女別の遊び時間の平均である。8年前とは遊び時間については、大きな変動はない。2回の調査結果共に、学年が上がるにつれて遊び時間は短くなっている。また、男子よりも女子の方がどの学年でも遊び時間が短いのも二つの調査で共通している。男子の遊び時間の平均は2.0時間、女子は1.2時間と女子がかなり短い。特に6年の女子は、0.9時間（54分）と、1時間を切っている。遊び時間については子どもたちの1日のトータルな生活時間の中でみていかなければならないが、先の塾・習い事に通っている回数やその種類の分析からも明らかになっているように、これらによって子どもたちの自由な時間はかなり「浸食」されているのである。

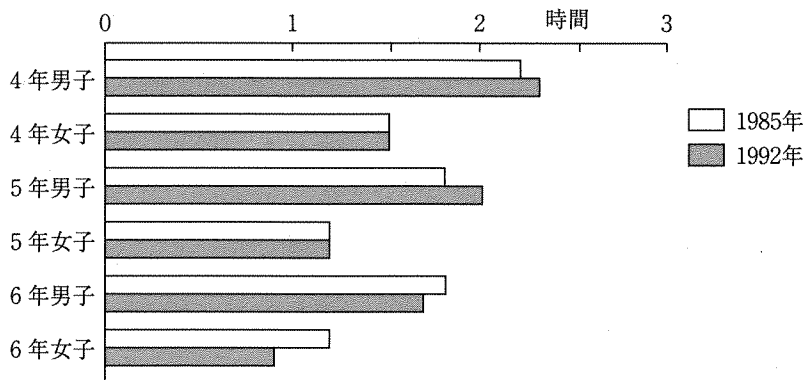


図-18 平日の平均遊び時間（8年前との比較）

遊び時間、遊び空間、遊び仲間、遊びの方法という4つの遊びの要素ないし条件は相互規定的な関係になっている。遊び時間が少ないから遊び仲間を見つけることがむずかしくなっているし、複雑な遊びもできにくくなる。また、遊び集団が小さくなったり、遊び集団そのものがなくなってしまう。短時間で簡単にできる遊びしか経験できないから遊びの方法が貧困化してくる。自分たちで作る遊びの面白さを知らないから、業界が作り上げた既成の遊びが当たり前のものだと思ってしまう。遊び集団の縮小化と同じ年齢の集団の同質化は、年上の子どもから年下の子どもへと伝えられる遊びの伝承サイクルが切れてしまって、遊びの貧困化ないしは遊び文化そのもの

が壊れてくる、といった具合である。いわば「あそび環境の悪化の循環」(仙田,1992)である。

遊び時間に関する最近の調査研究では、先の塾・習い事のところでも取り上げた東京都生活文化局(1999)による東京都子ども基本調査で、「帰宅後にしたこと」を時間を含めて聞いたものがある。表-20のように、帰宅後友だちと遊ばない者が小学5年では40%から50%,逆に2時間友だちと遊んでいる者は男子でおよそ35%,女子で約30%というところで、分極化している。自分一人で遊んでいる場合は、30分程度の時間が圧倒的に多く、この種の一人遊びは塾や習い事の前後や食事の前後といった細切れになった隙間の時間でしているものが多いと考えられる。

表-20 帰宅後にしたこと(学年別・性別) (東京都生活文化局,1999より)(%)

			しない	30分	1時間	2時間	3時間
(1) 家での勉強時間	小3	男	21.9	47.9	19.0	3.8	4.8
		女	13.6	57.3	21.1	4.0	2.8
	小5	男	28.9	37.3	17.8	6.6	8.7
		女	16.0	48.5	25.4	7.8	1.6
	中2	男	43.1	23.1	16.1	11.5	5.4
		女	43.3	18.7	15.5	17.3	5.3
(2) 塾での勉強時間	小3	男	56.2	4.1	13.7	5.7	3.2
		女	57.9	6.5	15.2	5.3	1.9
	小5	男	50.6	1.2	11.1	10.2	13.0
		女	53.7	2.6	12.1	9.8	6.2
	中2	男	63.1	0.6	4.8	22.0	4.8
		女	57.0	0.0	4.2	20.9	3.9
(3) 友達と遊んだ時間	小3	男	36.2	10.5	11.1	15.6	21.9
		女	37.5	9.6	12.7	20.1	18.3
	小5	男	40.4	8.7	13.3	18.4	18.4
		女	49.5	6.2	11.1	20.2	11.1
	中2	男	61.7	3.4	6.5	12.7	14.6
		女	72.2	3.5	6.7	7.4	9.9
(4) 一人で遊んだ時間	小3	男	37.8	27.3	12.7	8.6	10.2
		女	43.0	32.5	14.9	4.3	2.8
	小5	男	37.7	24.7	13.0	11.4	11.1
		女	43.6	25.4	12.1	7.8	8.1
	中2	男	45.1	18.0	13.8	11.8	10.1
		女	57.7	14.4	10.2	7.7	8.8
(5) テレビを見た時間	小3	男	10.2	15.2	27.3	17.8	26.7
		女	8.0	22.0	33.4	29.7	13.6
	小5	男	6.0	13.0	27.7	23.8	28.0
		女	3.3	13.4	19.5	24.8	35.2
	中2	男	3.7	11.8	27.0	32.7	23.4
		女	7.0	10.2	16.5	31.7	33.5
(6) テレビゲームをした時間	小3	男	39.0	20.0	16.8	9.8	11.1
		女	74.0	14.6	6.2	1.2	0.6
	小5	男	39.5	13.3	19.9	16.0	10.2
		女	69.1	12.1	9.4	5.5	2.6
	中2	男	43.4	15.2	18.9	13.0	8.2
		女	82.7	5.3	4.6	3.9	2.8

#### 4. 子どもたちの学校休日の過ごしかた

ここでは、学校週五日制が行われた土曜日と日曜日の遊び時間や生活時間、テレビの視聴時間、あるいは二日間の休みの日の子どもたちの過ごしかたについて述べる。

##### (1) 休日の遊び時間

平日の遊び時間については、前のところ（図-18）で8年前の1985年の結果と比較しながら述べた。平日の遊び時間とともに土曜日と日曜日の休日の遊び時間をまとめたのが図-19である。平日は月から金曜日までの平均である。

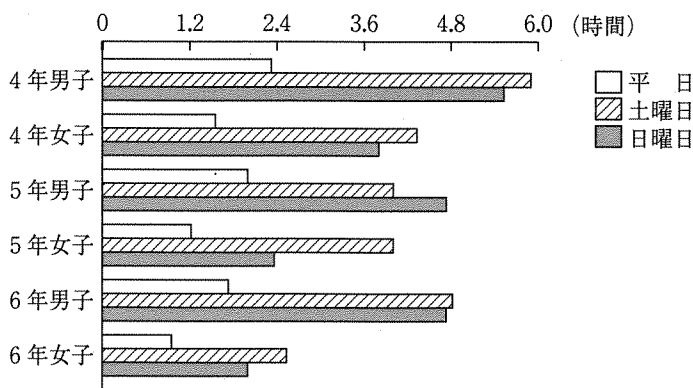


図-19 遊びの平均時間

学年が進むにつれて子どもたちの遊び時間が少なくなってくること、あるいは男子よりも女子の方が短くなっているのが平日の結果であったが、同じ傾向は土曜日、日曜日の場合にもみられる。男子では4年生に比べて5、6年生は土日ともに1時間ほど短くなっている。また男子と女子を比べると、いずれの学年でも遊び時間は短くなっていて、特に6年生の女子はその時間が極端に短くなっている。土曜日や日曜日でも2時間半から2時間という短さである。これは後の休日の子どもたちの様子を見るところで改めて取り上げるが、家族で外出したりすることで休みの日でも純粹に自分の遊び時間には使われていないことと、この後でみるテレビを見る時間が長いことがある。この遊びの時間にはテレビの視聴時間は除いてあるので、このような結果になっている。

##### (2) TVの視聴時間

図-20は、学年・男女別の平日、土曜、日曜のテレビの平均視聴時間で、先の遊び時間とは別に集計している。平日も土、日も含めて学年が上がるほどテレビの視聴時間がわずかず長くなっている。そして、5、6年生では男子よりも女子の方が視聴時間が長くなっていて、この傾向は彼女らの遊び時間が短いのとちょうど逆になっている。5、6年の女子の場合は平日、土・日の休日でも遊び時間と比べてテレビを視ている時間と同じかそれ以上の長い時間になっていて、視聴時間は3時間近くになっている。6年生の女子の場合は、休日の自分の自由な時間のおよそ5時間半の中でテレビを3時間視ているというのが平均的な過ごしかたである。

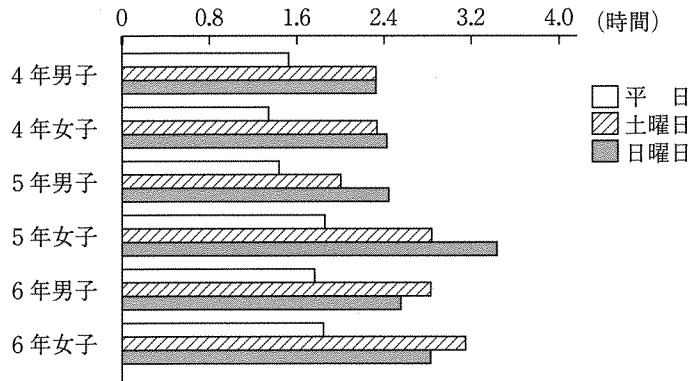


図-20 TVの平均視聴時間

平日のテレビ（ビデオも含む）の視聴時間の調査として、文部省生涯学習局青少年教育課（1999）によるものがある。調査対象は、小2、4、6、中学2年各2,500人以上の11,000人の全国調査で、実施年は1998年7月である。図-21のように、小学校6年、中学2年の高学年で視聴時間は急に長くなっている。彼らは1日に2時間以上視ている者が70%にまで達している。この調査では男女の差はほとんどなかった。

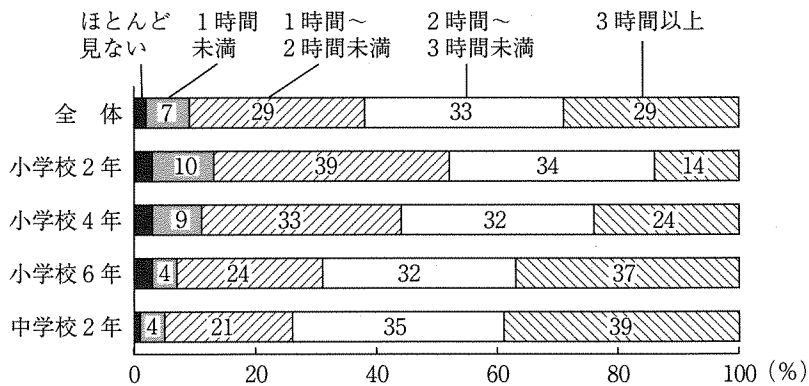


図-21 テレビ・ビデオの視聴時間（平日）

（文部省生涯学習局青少年教育課, 1999より）

休日も含めたテレビの視聴時間の調査結果は、NHK放送文化研究所（1996）による国民生活時間調査がある。調査は1995年10月に行われ、有効調査対象者は19,000人である。ここで本論と関係する10-15歳を対象にした結果をみってみる。対象数は男子が853人、女子が801人である。10-15歳の男子の平日のテレビ視聴平均時間は2時間11分、ビデオは4分、休日（日曜日）は、テレビが3時間22分、ビデオが11分である。一方、女子（10-15歳）は、平日のテレビ視聴が2時間7分、ビデオが6分、休日（日曜日）のテレビが3時間4分、ビデオが19分間となっている。A小の高学年の児童のテレビ視聴時間は平日、休日いずれも全国調査とほぼ同じ数値になっていることがわかる。

(3) 起床・就寝時間

子どもたちは、休日どのような生活のリズムのなかで過ごしているのだろうか。就寝と起床の時間をまとめたものが図-22、図-23である。平日の場合は、生活時間の調査を放課後から始めているので、起床時間の資料はない。

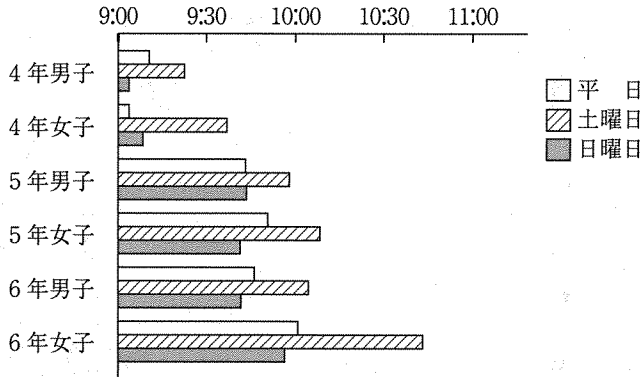


図-22 就寝時刻

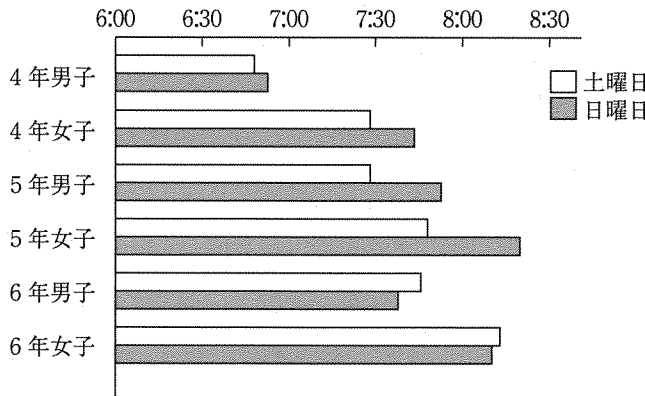


図-23 起床時刻

就寝時刻、起床時刻は当然のことながら休日の場合には遅くなっている。特に、6年生の女子の就寝時刻は平均値で10時44分になっている。次の日が日曜日で、起床の時間を気にすることもなく夜遅くまで起きていて自分の自由な時間を使っているようだ。ある意味では、高学年の女子の場合には土曜休日というのは、昼間、友だちと遊ぶ時間が増えたというよりは、夜遅くまで自分の部屋で自由な時間を過ごせる貴重な日として位置づけられているのかもしれない。

東京都生活文化局（1999）による都内の児童の生活調査では、平日の小学3年と中2の就寝時刻を昭和61年（1986年）から平成10年（1998年）まで時系列的な変化を調べている。ここでは小学3年の結果だけをのせる（図-24）が、平成4年（1992年）頃より就寝時間が10時以降にずれ込んでおり、明らかに子どもの生活が夜型化に向かっていることがこの結果でもはっきりとあらわれている。

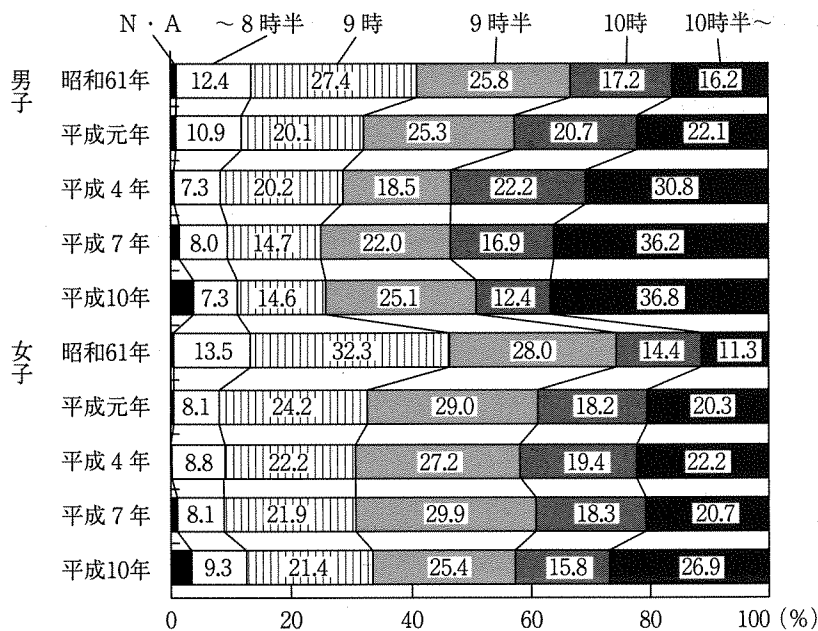


図-24 小学校3年生の就寝時刻の変化

(東京都生活文化局, 1999より)

同じく平日の就寝時刻であるが、NHK放送文化研究所(1996)の国民生活時間調査を基にして小学生から大学生までの就寝時刻を昭和40年(1965年)と平成7年(1996年)を比較したものがあ(青少年白書, 1997より)。図-25のように、30年間という大きな時間幅の中で6割の小学生の就寝時刻が午後9時半から午後10時半へとずれてきている。

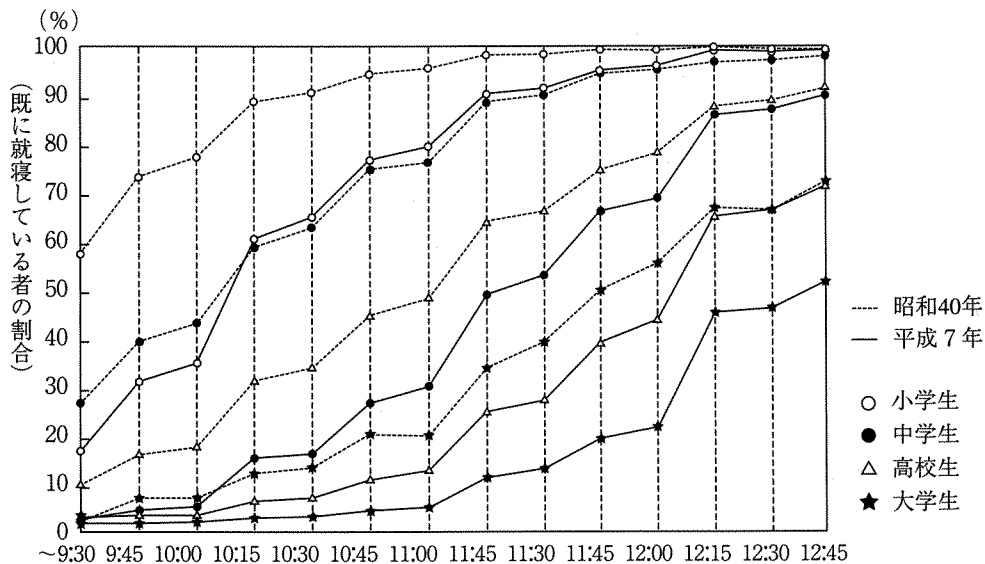


図-25 就寝時刻(平日)の変化

(NHK「国民生活時間調査」, 1995より)

休日（土曜・日曜）の起床・就寝の時間についてはこれまでの文献渉猟では他に調査報告書を見つけるができていないため、A小の結果と比較したり、最新の調査結果について述べることはできない。

#### (4) 土・日曜日の休日の過ごし方

学校週5日制で土曜、日曜日が連休になった日を子どもたちはどのように過ごしているのだろうか。生活時間調査で書かれた内容をもとにして、平日の放課後と変わらないことをしている場合と、土曜ないし日曜日の休日を利用して平日にはできない特別なことをしている場合の二つに分けてみると（図-26）、全体としては7割以上が休日ならではの過ごしかたをしている。学年毎にみていくと、高学年になるにつれて、特別なことをしたという回答は少なくなって、家族で出かけるよりは自分で自由に時間を過ごしたり、友だちと遊ぶといった過ごしかたを選んでいるという傾向もみられる。

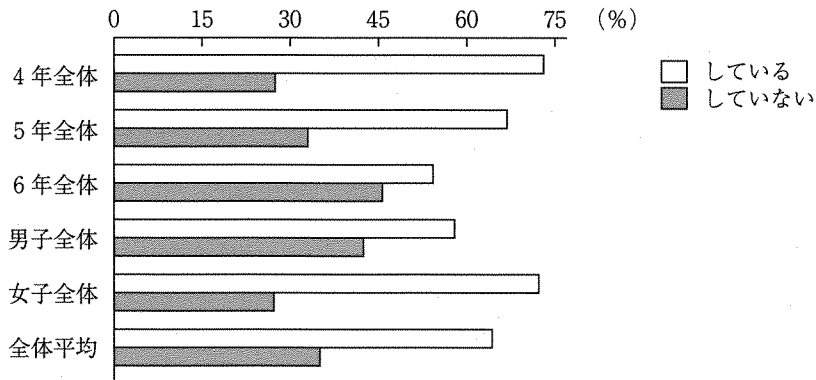


図-26 土・日に特別なことをしたか

次に、土・日曜日にどのようなことをして過ごしたかその具体的な内容をみてみよう。表-21は4-6年生全体について、友だちと一緒に遊ぶ以外のことをしたものをまとめたものである。表の数字は延べ人数であり、土曜日、日曜日、土・日の二日間にわたって行ったものの三つに分けている。

表-21 土・日に行われたこと（重複回答）（全体）

土曜日	日曜日	土・日（泊まりがけ）
・外出 29	・外出 25	・親戚の家に泊まる 9
・買い物 16	・買い物 19	・家族旅行 4
・習いごと、塾 10	・親戚の家へ行く 6	・友達の家泊まる 1
・サタデーテーリング 9	・習いごと、塾 4	
・親戚の家へ行く 2	・家の手伝い 4	
・家の手伝い 2	・ドライブ 4	
・きょうだいとあそぶ 2	・発明クラブ 3	
・日帰り旅行 1	・プールに行く 2	
・ドライブ 1	・教会へ行く 2	
・アイスホッケーの試合 1	・きょうだいとあそぶ 2	
	・部屋の掃除 1	
	・合唱団 1	
	・ピアノの発表会 1	
	・水泳の記録会 1	

表のなかの用語の説明をしておくと、「外出」は主に家族で札幌市内あるいは札幌近郊に出かけたもので、それより遠い他の市などに出かけた場合には「旅行」の類に含めている。もちろん、これはあくまでも遠くまで出かけた場合を「旅行」として便宜上「外出」と区別したものであって、「旅行」といっても日帰りのものもある。一泊旅行の場合は家族旅行として土・日（泊まりがけ）の欄に入れている。あるいは「外出」とだけ記入して行き先が不明のものがあったが、これらも「外出」としてまとめた。「買い物」は「外出」とは区別したが、ここには家族で買い物をする場合と友だち同士で買い物に出かけた場合の両方が含まれている。また、「ドライブ」は「外出」に含めるべきであったが、「ドライブ」としか記入していないために行き先が不明のものがいくつかあったために、「ドライブ」の項を作って集計した。

全体を通して多くなっているのが「外出」と「買い物」である。これらは家族と一緒に出かけるといふものが多い。「外出」では、「ボーリング場」や「バッチングセンター」「遊園地」などのスポーツ施設、「温泉」に出かけるもの、「映画」「演奏会」「開拓の村」や、「法事」「結婚式」などの冠婚葬祭に親と一緒にいくものなどがある。その他、「釣り」や「外食」、さらには「住宅展示場」に親に付き合っ出て出かけている場合もあった。「買い物」の場合は、「近所の商店街」や「アパート」「市場」「ホームショップ」など、比較的近いところへ出かけることで占められている。

この種のものに次いで多いのがやはり、「塾・習い事」である。土曜日休日でも「習い事」で出かけている者が何人かいる。「水泳の記録会」や「ピアノの発表会」「合唱団」「アイスホッケーの試合」など少数ではあったが「習い事」「スポーツクラブ」に関連した行事に参加していた。その他、「塾・習い事」として土・日曜日にあったものが、「そろばん塾」「水泳」「習字」「バレエ」「武道」などである。スポーツチームではほとんどが土・日のどちらかに朝練習を行っている。

曜日別にみていくと、日曜日に特有なものに、「発明クラブ」(3名)と「教会」(2名)である。いずれも数は少ないが、「発明クラブ」は週1回の日曜日に2, 3時間の間、工作などをして過ごしている。

また、土曜日に特有なものとして、「サタデーテーリング」があり、9名の子どもが参加している。これは1992年9月から学校週5日制の開始に合わせて札幌市交通局が企画したもので、市営の交通機関の1日乗車券を使ってオリエンテーリングの要領で札幌市内の各所に配置されたチェックポイントを回ってスタンプを集めていくというものである。集めたスタンプの数に応じてメダルなどの記念品がもらえるということで、企画が開始してから3カ月で小中学生合わせて1万人以上が参加している。特に4年生を中心に人気がある企画である。

以上の土・日曜日の過ごし方について、参考までに学年別に集計をしてみたのが表-22, 23, 24である。表を見ると分かるように、学年による顕著な違いというものはなく、ほぼ同じ様な活動をしている。

表-22 土・日に行われたこと(重複回答) (4年生)

土曜日	日曜日	土・日(泊まりがけ)
・買い物 8	・買い物 8	・親戚の家に行く 6
・外出 6	・外出 5	・家族旅行 1
・サタデーテーリング 4	・親戚の家に行く 2	
・親戚の家に行く 1	・ドライブ 2	
・家の手伝い 1	・教会へ行く 2	
・習いごと、塾 2	・習いごと、塾 1	
	・家の手伝い 1	
	・プールへ行く 1	
	・ピアノの発表会 1	
	・水泳の記録会 1	

表-23 土・日に行われたこと(重複回答) (5年生)

土曜日	日曜日	土・日(泊まり掛け)
・買い物 4	・買い物 6	・親戚の家に行く 3
・外出 14	・外出 12	・友達の家泊まる 1
・サタデーテーリング 5	・親戚の家に行く 2	
・親戚の家に行く 1	・ドライブ 1	
・家の手伝い 1	・家の手伝い 2	
・習いごと、塾 2	・プールに行く 1	
・アイスホッケーの試合 1	・発明クラブ 1	
・日帰り旅行 1		
・ドライブ 1		

表-24 土・日に行われたこと（重複回答）（6年生）

土曜日	日曜日	土・日（泊まりがけ）
・買い物 4	・買い物 5	・家族旅行 3
・外出 9	・外出 8	
・習いごと、塾 6	・親戚の家に行く 2	
・きょうだいとあそぶ 2	・部屋のそうじ 1	
	・ドライブ 1	
	・習いごと、塾 3	
	・家の手伝い 1	
	・合唱団 1	
	・発明クラブ 2	
	・きょうだいとあそぶ 2	

1992年（平成4年）9月から「学校週5日制」による月1回の土曜休日が始まり、また1995年（平成7年）4月からの月2回（第2、第4土曜）に土曜休日が拡大したこともあり、「青少年白書」でも学校週5日制についての項目が平成5年版（1994年発行）から新たに追加されている。

文部省は1993年（平成5年）の6月の土曜休業日に子どもたちがどのような休みの過ごしかたをしているかを調査している（「6月12日における幼児・児童・生徒の学校外活動実態調査」）。調査対象者数は全国6,000人で、幼児・小学生は近所での遊びや運動が多く、中学・高校生の場合はゆっくり休養とテレビ視聴が多くなっている。小学5年生だけ、少し詳しくその内容をみると、午前中は「近所での遊び、運動、散歩」は16.2%、テレビゲームが11.2%、ゆっくり休養が9.5%となっている。午後は、近所で遊ぶが19.2%、テレビゲームが9.9%、そして習い事9.5%である（午前と午後それぞれ主に何をしていたか1つを上げるという回答方式。「青少年白書」平成5年版より）。

文部省はこれと同じ調査を学校週5日制が月2回になった1995年（平成7年）の5月27日と6月10日に行っている。（「青少年白書」平成7年版、総務庁青少年対策本部 1996aより）調査規模は前回と同じで、学年も同じである。回答方法も前回と同じである。第2土曜日と第4土曜日の過ごしかたには大きな違いはなく、また前回と同じように「近所で遊ぶ」と「休養」が学年を通して共に多かった。ここでも前回と同じく、5年生の結果だけを詳しくみってみる。午前中は、「休養」が21%、次いで「近所遊び」が11.7%、テレビゲームが7.4%である。午後は、「近所遊び」が18.6%、「休養」9.4%、テレビゲームが8.9%である。この午前と午後を比べてみて、午前に「休養」が多くなっているのは、先の起床・就寝時間のところで取り上げたように、朝早く起きることを気にすることもなく遅くまで寝ているためであろう。

総務庁青少年対策本部（1996b）が1995年（平成7年）に行った調査で、「休みの日に何をしてお過ごしが多いか」を小学生4-6年、中、高、大学生を対象にたずねた結果がある（「青少年の生活と意識に関する基本調査」）。小学生の結果だけを述べるが、男子では室内ゲーム（テレビゲーム、トランプなど）60.4%、外で遊ぶ57.5%、まんがや本を読む52.6%、スポーツや運動45.4%、テレビや音楽43.3%の順である（複数回答）。女子の場合は、テレビ視聴と音楽を聴くが一位で、56.2%、以下、外で遊ぶ53.6%、まんがや本を読む51.3%、買い物をする41.1%、室

内ゲームが34.9%となっている（同じく複数回答）。この調査結果でも、小学生の休日の典型的な過ごし方があらわれている。

同じ年の1995年にくもん子ども研究所が行った調査研究によれば、「休日に友だちとよくしていること」は、小学5年生（800人）は一位は「家の近くで遊ぶ」68.9%で、ファミコンやゲーム54.8%がこれについて多く、以下、自転車を乗り回す34.5%、友だちと会っておしゃべり28.6%、買い物28.3%となっている。この調査では「友だちと一緒にすることは何か」という限定でたずねているために家の近くで遊ぶという回答が多くなっているが、ここでも自転車を乗って遊んだり、おしゃべりといった少数の子どもとこじんまりとした遊びに終始していることがわかる。

#### IV. 冬季間の子どもたちの生活と遊び

ここでは、子どもたちの生活と遊びの実態について、季節を変えて比較してみた結果について述べる。

これまでは積雪前の時期における子どもたちの遊びや日常生活の様子についてみてきたが、北海道、特に札幌市などの道央圏は冬季間は積雪によって屋外の活動が著しく制限されてくる。もちろん、冬期間の独自の遊びもおこなわれるが、いったい冬季間、子どもたちはどのような遊びと日常の活動をしているのかをこれまでと同様に「一週間の生活時間」の調査から明らかにしていくことにする。

ここで述べる調査は、学校週5日制が行われた1993年2月の第2週の期間で、この週には木曜日の2月11日が祝日に指定されている日があったために休日は土・日を含めて3日あった。この調査は秋の調査結果と比較するためにA小学校の同じ児童4年生から6年生を調査対象にしておこなわれた。

##### 1. 冬期間・平日の子どもたちの過ごし方

表-25は、平日の放課後から就寝までの間の遊んだ時間と勉強時間の1日当たりの平均である。遊びは仲間と一緒にの遊びと一人遊びに大きく分けて、さらに表のように遊びの内容によって区分した。表の数字には、3分とか4分といった現実の遊びの時間の長さとしてはおかしなものもあるが、一人あたりの1日平均という形で算出してあり、この分類項目の遊びをしなかった子どももいることもあって小さな数値になっている。この結果から概略として一人の子どもが一日のなかでどのような遊びをして過ごしているのかを知ることができる。

表-25 冬季間・平日の遊び時間（一人あたり1日に換算した平均時間）

平 日	仲間遊び		一 人 遊 び					勉 強
	外遊び	家遊び	外遊び	ファミコン	その他	読 書	テレビ	
4年男子	13分	33分	6分	34分	6分	17分	1時間19分	33分
4年女子	12分	28分	5分	19分	22分	26分	1時間25分	26分
5年男子	11分	20分	0分	24分	36分	19分	1時間32分	32分
5年女子	3分	9分	0分	4分	26分	27分	1時間46分	35分
6年男子	11分	39分	3分	29分	24分	16分	1時間55分	44分
6年女子	3分	21分	0分	5分	1時間23分	21分	1時間35分	51分

全学年を通してみると、勉強が30-40分、ファミコン、まんがを中心とした読書がそれぞれ20分、テレビを1時間半程視るとというのが平均的な過ごし方かたのようだ。当然のことながら仲間との遊びもほとんどが家の中の遊びになっている。4年生ではまだ、外遊びが少ないながらもあるが、高学年の特に女子では家の中の遊びに終始している。ちなみに、仲間と一緒に遊んだ時と一人で外遊びをした時とを合わせた外遊びの時間と、それが遊び全体の時間に占める割合を求めた結果が表-26である。遊びの全体の時間は勉強を除くファミコン、まんが、テレビ視聴を含めた遊びの総時間である。この結果でも、外遊びの時間は一番長い4年生でも全体の2割以下であり、休日の場合はさらに短くなっている。また、5, 6年の女子は極端に外遊びの時間が短くなっているのがこの結果からもわかる。

表-26 冬季間の外遊びの時間と遊び時間全体に占める割合

	平 日		休 日	
	時間	割合	時間	割合
4年・男子	19分	17.0%	53分	12.3%
4年・女子	16分	16.1%	18分	4.4%
5年・男子	11分	9.6%	21分	4.7%
5年・女子	4分	5.3%	6分	1.7%
6年・男子	14分	11.3%	26分	6.0%
6年・女子	3分	2.4%	5分	1.3%

遊び時間を秋と冬とで比較したのが、図-27であるが、当然のことながら外で活動することが多い4年や5年の男子では冬期間は行動が大きく制約されてしまうために遊び時間が秋に比べて短くなっている。ところが、6年生、特に女子の場合は冬期間の方が遊び時間が長くなっている。女子の場合は高学年になると室内遊びへの指向を強くしているが、6年生の女子は表-25のその他に含まれている音楽を聴く、編み物をするといった室内で一人で過ごす時間が圧倒的に多くなっている。

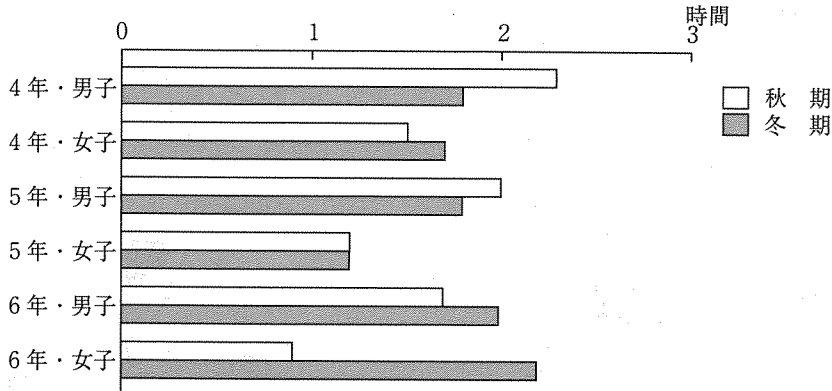


図-27 平日の遊び時間の秋と冬の比較

表-25の遊び時間の集計結果をもとにして、それぞれの遊びに使った時間を相対的な比率の形で表現したのが図-28である。男子の場合には、3つの学年を通して、テレビ視聴が40数パーセント、室内で仲間と遊び、一人でファミコンがそれぞれ15パーセント前後という割合になっている。女子の場合は、学年による違いがあって共通のパターンはない。4年生の女子は、4年の男子と似たような遊び時間の過ごし方をしており、室内で友だちと遊ぶことが多いが、男子のファミコンに代わって刺繍や絵を描くといった「その他」の室内での一人遊びが多くなっているのが特徴である。5年の女子は、テレビ視聴が最も多く、逆に仲間と遊ぶことが最も少なくなっている。6年の女子の場合は、テレビ視聴が少なくて、代わりに先にみたように「その他」の遊びが非常に多くなっている。テレビやファミコンをする代わりに、自分の部屋で好きな音楽やラジオを聞くことや、手芸などをして時間を過ごすのが彼女らの冬の生活ということである。

図-28では、どの学年もテレビ視聴が冬の遊び時間全体の中でかなりの割合を占めているが、実際には秋と比べてみると特別に冬だけが長くなっているわけではなく、秋と冬の間で大きな差はない(図-29)。季節に関係なく、子どもたちはテレビの前で多くの時間を過ごしているというわけで、平日は1時間半、休日は約3時間をテレビの前にいるというのが彼らの1日の過ごし方の典型的な姿である。それは秋でも冬でも季節を問わず共通である。

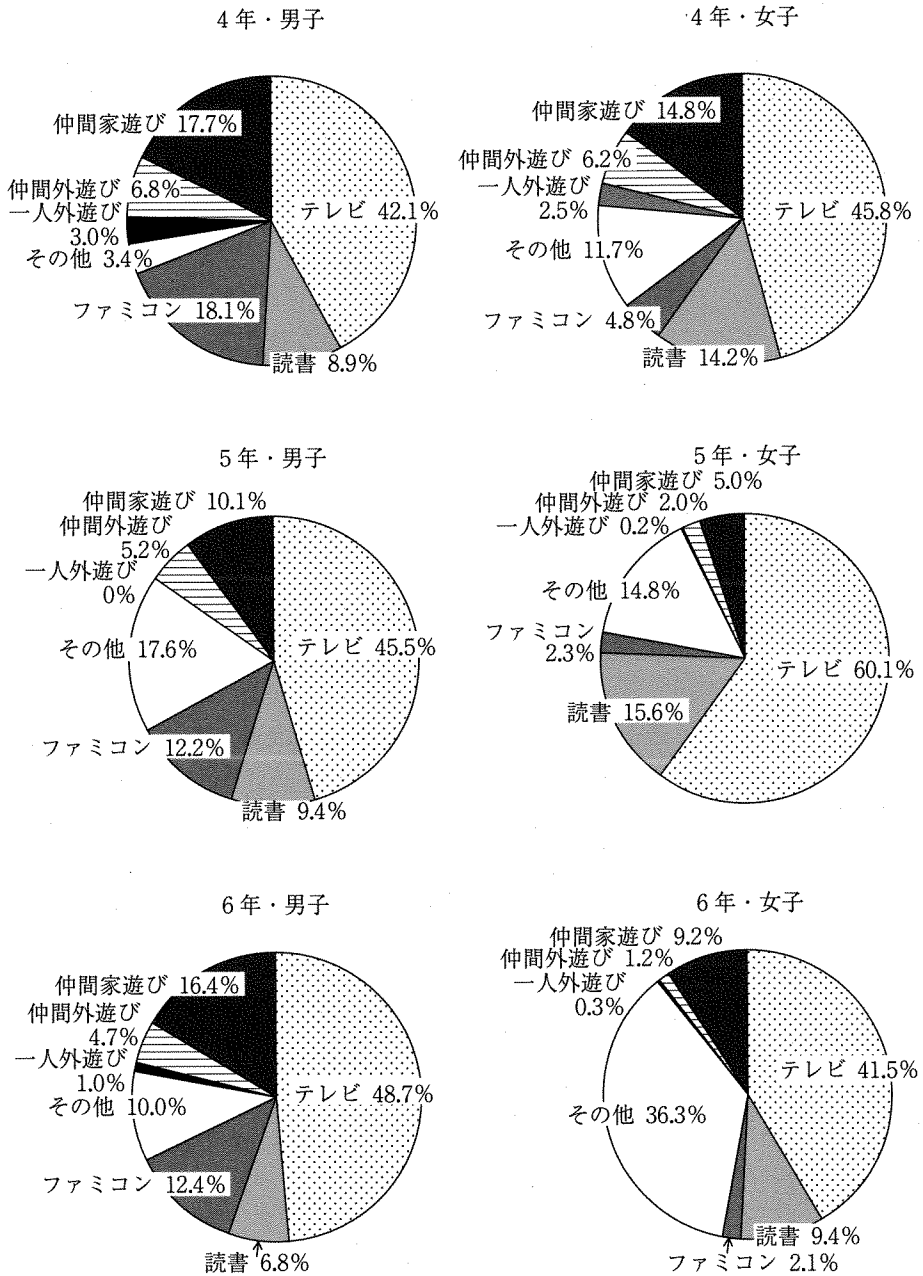


図-28 冬季間・平日における各種の遊びの時間的な割合

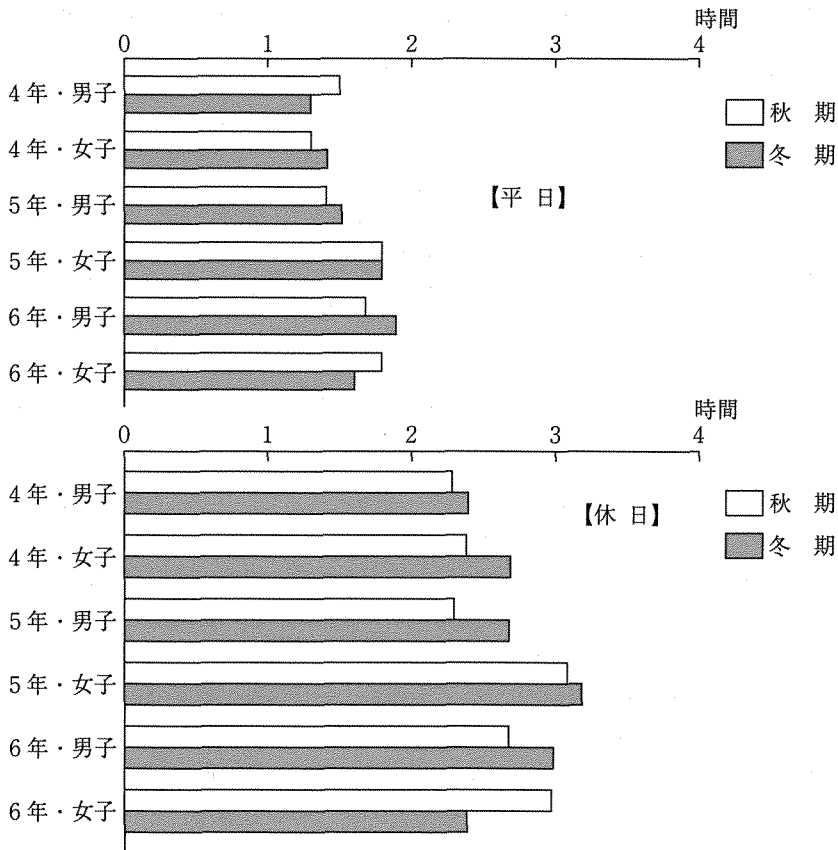


図-29 冬季間・平日、休日のテレビの視聴時間の秋冬比較

## 2. 冬期間・休日の子どもの過ごしかた

先の平日の子どもの遊び時間の結果(表-25)と同じように、休日の子どもの遊び時間について集計した結果が表-27である。

この休日の時の遊び時間は、平日の場合と同じように、遊び時間の長さを一人の一日平均の時間として算出してある。先の平日の結果(表-25)と比べると、それぞれの遊び時間が長くなっていることは当然のこととして、遊び時間が長くなったわりには仲間遊びや外遊びの時間は依然として短いことと、遊び時間が長くなったことに比例する形で室内の一人遊びの時間が増加していることがわかる(表-27)。4年男子で平日よりも休日で外遊びの時間が長くなっているだけで、他の学年と男女は、外遊びの時間は平日とほとんど同じである。

表-27 冬季間・休日の遊び時間（一人あたり1日に換算した平均時間）

休日	仲間遊び		一人遊び					勉強
	外遊び	家遊び	外遊び	ファミコン	その他	読書	テレビ	
4年男子	25分	59分	28分	1時間26分	40分	50分	2時間22分	43分
4年女子	5分	1時間10分	13分	36分	1時間14分	35分	2時間44分	36分
5年男子	1分	33分	20分	57分	1時間28分	35分	2時間40分	50分
5年女子	0分	25分	7分	23分	1時間45分	43分	3時間11分	34分
6年男子	15分	1時間02分	10分	45分	1時間28分	29分	3時間01分	56分
6年女子	6分	42分	5分	15分	2時間09分	45分	2時間21分	50分

この表-27の休日の遊び時間の結果をもとにして、それぞれの遊び時間を全体の遊び時間に占める比率の形であらわしたものが図-30で、先の平日の結果（図-28）と比べてみることで冬期間の休日の遊びの特徴がわかる。テレビの視聴時間についてみると、時間の長さそのものは表-27にみるように、平日の2倍ほどになっているものの、一日の遊び時間全体の中の割合として算出してみると、テレビ視聴時間は相対的には短くなっている。その代わりに「その他の遊び」が多くなっていることがわかる。もちろん、依然としてテレビ視聴時間が一日の遊び時間の4割近くにまでなっている学年もあって、やはり子どもたちの「テレビ漬け」という状態になっていることに変わりはない。

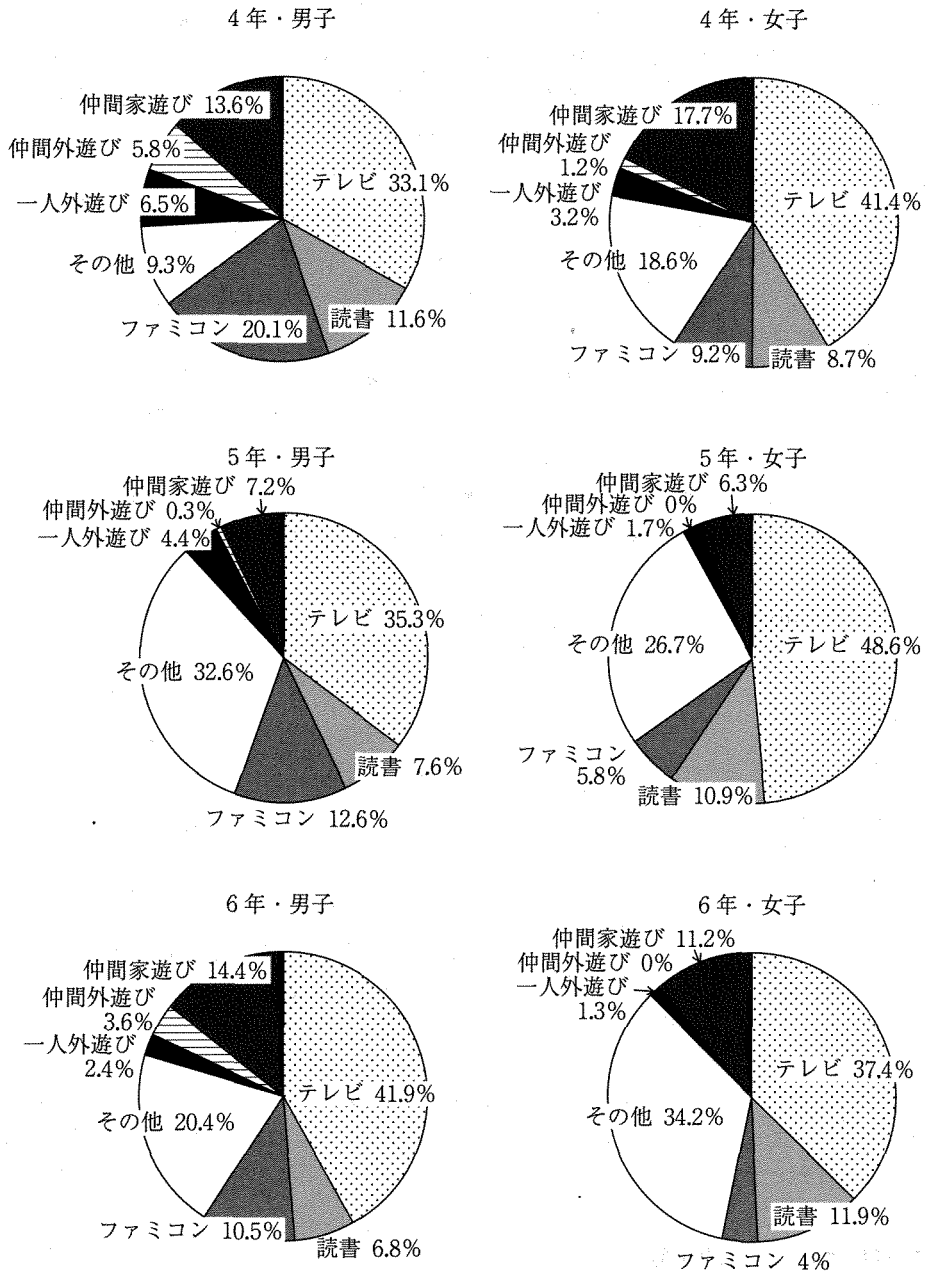


図-30 冬季間・休日における各種の遊びの時間的な割合

平日と休日の遊びの違いとして注目しておかなければならないのは、「その他の遊び」が休日に多くなっていることである。6年の女子以外はいずれも2倍近くになっている。平日では、テレビやファミコン、まんがといった比較的短い時間で楽しめる遊びが主流であったが、休日になると平日の時間が「切り売り」されてしまっている状態のために出来なかった遊びをしている様子がうかがえる。表-27の「その他の遊び」時間は1時間半ほどになっている。この「その他の

遊び」には多様な遊びが含まれているが、プラモデル作りや音楽鑑賞、エレクトーンを弾いて楽しむことから、ラジオを聴きながら自分の部屋でのんびりと過ごすといったものまでである。特に、高学年の女子の場合には、CDやラジオを聴くといったことが多い。あるいはのんびりと時間を過ごすといった過ごし方も多くなっている。こういった過ごし方は子どもたちの言葉では「自由」といった表現で記入されているものだが、これも一つの休日の過ごし方であろうし、今の子どもたちの平日の忙しさを考えるとまさに「休息」の時間として休日が位置づけられているのかもしれない。もっともそういう平日の忙しさそのものが問題だし、仲間と一緒に遊ぶ時間は決定的に少なく、子どもたちは家の中、自分の子ども部屋の中にこもってしまっているという事実はそれとして見据えていかなければならない。

冬期間の仲間遊びの時間を平日と休日のそれに分けて算出し、それらが全体の遊び時間に占める割合としてあらわしたのが表-28である。この結果でも仲間と一緒に遊ぶ時間そのものはたしかに休日の方が長くなってはいるが、一日の遊び時間全体の中では相対的に少なくなっている。4年生の場合は、休日でも仲間と一緒に遊ぼうという指向がまだあるが、高学年になると一人で自由に自分の部屋で過ごすのが休日の基本的な過ごし方になっている。

表-28 冬季間の仲間遊びの時間と遊び時間全体に占める割合

	平 日		休 日	
	時間	割合	時間	割合
4年・男子	46分	24.5%	1時間23分	19.4%
4年・女子	39分	21.0%	1時間15分	18.9%
5年・男子	31分	15.3%	34分	7.5%
5年・女子	12分	7.0%	25分	6.3%
6年・男子	50分	21.1%	1時間18分	18.0%
6年・女子	24分	10.4%	42分	11.2%

このように、子どもたちの冬期間の遊びの実態も、単に厳冬期で雪に囲まれているという環境の問題だけからきていることではなく、今の子どもたちの一人遊びや室内遊びの指向に大きく帰因していると言わなければならない。

### 3. 冬期間・休日の特別な活動

3回の休日の中で特別な休みの過ごし方をしたものを曜日別にまとめた(表-29)。買い物や数時間の外出が秋の調査結果(表-21)と同じように主流になっているが、冬期間に特有なものとしては、土日以外の休日に出かけた雪祭り見物がある。ちょうどこの休日(2月11日)と雪祭りの開催期間とが重なっていたために13名の児童が出かけている。また、この休日と土曜日にスキーに出かけた者がかなりいたことも冬の間ならではの休日の過ごし方である。その他、家の手伝いとして雪かきの手伝いや雪中運動会に参加するというのも北の地方ならではのものがある。家族と一泊のスキー旅行も2名ほどいた。2月という北海道では厳冬期にはどこかにレジャーで出かけることや休日として特別なことをする機会も減っているのではないかと予想して

いたが、むしろ冬期間のほうが休日として特別なことをして過ごすことが多いくらいである。冬期間室内に閉じこもりがちで活動が制限されてしまうからこそ休日にはそれだけ余計にどこかに出かけようという気持ちが親には働いているのかもしれない。

表一29 冬の休日に行われたこと（重複回答）

休 日	土 曜・休 日	日 曜
・買い物 34	・買い物 33	・買い物 30
・外 出 17	・家の手伝い 17	・家の手伝い 20
・スキー 13	(内、雪かきの手伝い 7)	(内、雪かきの手伝い 8)
・雪祭り見物 13	・外 出 16	・外 出 16
・家の手伝い 7	・スキー 14	・部屋の掃除 7
(内、雪かきの手伝い 1)	・親戚の家へ行く 13	・スキー 6
・親戚の家へ行く 6	・部屋の掃除 7	・親戚の家へ行く 4
・部屋の掃除 6	・スケート 3	・雪中運動会参加 4
・プールへ行く 2	・映 画 2	・スポーツ試合の見物 4
・父の友人の引っ越し に同伴 1	・スポーツ試合の見物 2	・動物の世話 2
・毛利衛さんのサイン会 1	・友人・いとこの誕生会 1	・教 会 2
・病院お見舞い 1	・エレクトーン発表会 1	・展覧会 2
・学校の鶏小屋の世話 1	・ピアノコンクール 1	・スケート 2
・花火見物 1	・ボーリング 1	・卓 球 2
・バレーボール試合の 手伝い 1	・葬式出席 1	・友人・いとこの誕生会 1
・葬式出席 1	・お墓まいり 1	・カラオケ 1
		・プール 1
		・葬式出席 1
	土・日 (泊まりがけ)	
	スキー	2
	旅 行	1

## V. 地域による子どもたちの学校休日の過ごしかたの違い

ここでは、A小学校の児童を対象に行った1週間の生活時間調査をまったく同じ週（11月第2週）に別の地区の小学校の児童に行った結果について述べる。調査対象校は、南区、北区、厚別区の3つの小学校である。このうち、南区のC小学校については4年生から6年生までの各2クラス全児童について調査が可能であったが、北区のD小については5年生のみ3クラスの児童、厚別区のE小については6年生の1クラスのみが調査が可能であった。

3つの校区の地域的特徴を簡単に述べると、南区のC小学校は地下鉄・真駒内駅の周囲に広がる住宅地と市街地が混在している地域のなかにある。C小の校区を含めてこの地域は30年ほど

前に新しい住宅地として開発され、計画的な都市計画の下に住宅地と団地が造成されてきた。またC小の校区付近は南区の交通の中心であることもあり、商店街や区役所、区民センターなどの文化施設がある。北区のD小は、郊外に広がる住宅地の中にあり、住宅地としての歴史は古く2世代、3世代が住んでいる。一戸建ての住宅が大半である。従ってC小の学校としての歴史も古い。厚別区E小はここ10年間で急速に開発が進んでいる住宅地で、人口の増加も急な地域の中にある学校である。いわばこのニュータウンの開発にあわせて作られた学校で、歴史も短い。住宅の大半は一戸建てで、核家族が中心である。

これらの3地域の小学校の児童に対してA小学校と全く同じ1週間の生活時間調査を行ったが、ここでは学校週5日制の土曜と日曜日の二日間の休日の過ごしかたとその地域毎の特徴について取り上げる。なお、平日を含めて1週間の生活時間調査を各学校毎に概観してみると基本的な違いはみられなかったために、ここではA小以外の他の学校の子どもたちの平日の生活や遊びについてはとりあげていないが、別の機会にこれらの対象校の児童についての結果は扱うことにしたい。

表-30は、C小学校の4-6年生の土曜日と日曜日の2日間で通常の遊びとは違う活動について生活時間調査に書かれたものから取り出してまとめたものである。この表のなかには、家の手伝い、塾・習い事、兄弟と友人の仲間遊びといった平日の遊びは除いてある。内容が学年によっていくぶん異なっているので、学年別に分けて集計している。なお、土曜日と日曜日はまとめている。人数はのべ人数である。C小に特有な休日の過ごしかたとしてまず指摘できるのは、5、6年生のスポーツクラブの参加が多い点である。このなかでも男子が日曜日の野球の試合と、そのための事前の土曜日の練習と、2日間が終日このスポーツクラブの活動に費やされていることである。表のスポーツクラブの内訳は、5年生の3名がサッカー、1名がバスケのクラブに所属している以外は男子はこの野球クラブの所属でしめられている。6年生の場合も同じで、女子のバレーボールの2名、男子の剣道1名、ウェイト・リフティングの1名を除いて23名は野球クラブである。この地区では少年野球が盛んで、5・6年生の男子の多くがこのスポーツクラブに所属している。少年野球の行事が土曜・日曜2日間にわたって行われると、当然家族との行動は少なくなるし、子どもたちの休日の過ごしかたも他の地域の学校の子どもたちのそれとはずいぶんと違ってきている。家族との関係でいえば、現実にはこの種の少年スポーツは母親のサポートや参加によってはじめて可能になっている部分があり、家族を巻き込んだ形で運営されているともいえる。多くは競技を主体にしたもので、遊び的な要素を残した子どもたちのインフォーマルなスポーツ組織とは性格を異にしている。こういったものは子どもの立場からのスポーツというよりは指導者や親・大人のためのスポーツになりがちで、究極としては少年野球や少年サッカーの大会において上位の成績を上げていくことを目指すことで大人のスポーツ文化やさらにはスポーツ産業の中に組み入れられざるを得なくなっている。少年スポーツクラブにはこのような性格が伴いがちなのだが、地域の中で一定の活動が定着して、子どもたちの参加も多くなってくると、この種のクラブに参加していない子どもは土日曜日は遊び仲間を見つけることができなくなり、結果的にはこういったスポーツクラブに加入していく子どもが多くなってくる。このようにして子どもたちの遊びが大人が組織したスポーツクラブの中に組み入れていくことになる。地域によってはそれが野球クラブであったり、サッカークラブであったりする。

表-30 南区C小学校児童の休日に行われたこと（重複回答）

4 年 生 (n=41)	5 年 生 (n=58)	6 年 生 (n=57)
・買い物 12	・買い物 20	・買い物 14
・外出 11	・外出 7	・外出 8
・スポーツクラブの練習・試合 3	・スポーツクラブの練習・試合 30	・スポーツクラブの練習・試合 26
・家族と一泊(二泊)旅行 6	・家族と一泊(二泊)旅行 3	・家族と一泊(二泊)旅行 1
・日帰り旅行 5	・日帰り旅行 7	・日帰り旅行 11
・親戚の家へ行く 3	・親戚の家へ行く 7	・親戚の家へ行く 2
・サタデーテーリング 3	・サタデーテーリング 4	・サタデーテーリング 2
・父親と釣り 3	・弟(妹)の運動会参加 2	・弟(妹)の運動会参加 1
・野球見物 2	・お祭り見物 1	・お祭り見物 1
・家族と登山 1		・オーケストラ演奏会出演 1
・理科クラブ 1		
・円山動物園 1		
・弟(妹)の運動会参加 1		
・展覧会 1		

冒頭でとりあげた、藤本浩之輔を中心とする関西子どもの学校外教育研究会の研究報告(1978)のなかでも、既に上杉が、学校外教育のプログラムの多くが、野外活動やスポーツに傾斜し、非日常的体験に重点が置かれてしまっていること、従ってそこでは地域の日常活動を重視するような内容にはなっていないことを指摘している。

表のなかにあるサタデーテーリングにはA小学校の子どもたちも参加していたが、ここでも全体で9名ほどが参加している。

表-31は、北区のD小と厚別区のE小の5年生と6年生の土・日曜日の活動をまとめたものである。二つの学校とも、南区C小ほど活発ではないが、スポーツクラブに参加している子どもたちがいる。北区のD小の場合はソフトボールが中心で、5年生の3クラスの児童のうちで17人が参加している。厚別区のE小では、サッカーが中心になっている。いずれも土曜日と日曜日の二日間にわたって試合前の練習と試合が行われている。

この3つの校区のような野球やソフトボール、サッカーといったスポーツ少年団が比較的盛んなところでは高学年の子どもたちは男子を中心にして、相当数の者が参加しており、土・日曜日の休日はこの活動に参加するだけで終わっている。子どもたちの土曜そして日曜日の休日の過ごしかたはその地域に規模の大きさや活動の程度も含めてどのようなスポーツクラブが存在しているかによって影響を受けており、その様相はかなり違ったものになってきている。北区のD小の5年生の土・日の過ごしかたとして特徴的なものに、一泊旅行に参加している者が23名いるが、これはJR北海道が企画したミステリートレインで、道東方面への一泊の列車の旅である。この種のものへの参加は友だちどうしが誘い合って参加することが多いために、突発的にある時期だけ多く参加する人数が多くなっていくことがある。また、このD小ではサタデーテーリ

ングに参加した子どもが11名ほどいた。

表-4

北区D小・5年生 (n=107)		厚別区E小・6年生 (n=34)	
・買い物	24	・買い物	8
・外出	15	・外出	5
・スポーツクラブの 練習・試合	17	・スポーツクラブの 練習・試合	9
・一泊(二泊)旅行	23	・家族と一泊(二泊)旅行	2
・日帰り旅行	9	・日帰り旅行	3
・親戚の家へ行く	14	・親戚の家へ行く	6
・サタデーテーリング	11	・家族で魚釣り	1
・町内会の行事参加	6	・美術館	1
・弟(妹)の運動会参加	3	・家族登山	1
・バレエ鑑賞	2		
・映画鑑賞	2		
・青少年科学館を見学	2		
・病院見舞い	2		
・家族で魚釣り	1		
・父親の野球試合見物	1		
・美術館	1		
・家族と炊事遠足	1		
・お祭り見物	1		

子どもたちの休日の過ごしかたとして、大人の介入や親の参加によってあらゆることが運営され、子どもたちのスポーツ活動とはとてもいえないようなスポーツ少年団活動があるかと思えば、これまた大人や企業が商業ベースで企画した旅行やサタデーテーリングといったものに参加して休日を過ごすといったことが少なからず行われている。一方で子どもたちは、二日間の休日を家の中でのんびりと何をするでもなくまさに「休息」を取るといった、ほとんど大人と同じような過ごしかたをしている。いったん学校から離れて地域に戻った時にそこに用意されているものは実に貧弱な遊び環境でしかないということである。1年後に控えた完全学校週五日制の実施を前に地域の教育力の回復などどうして出来るだろうか。ほとんど絶望的な状況の中で子どもたちは毎週、二日間の連休を過ごしていくことになってしまう。

## VI. まとめと今後の課題

この小論は、遊びについて理論的な展開を試みたというよりは、調査結果をまとめた資料的な意味付けの方が大きい。従って、それぞれの調査結果についても十分な考察を加えたものという域からはほど遠い。これらについては、残された課題としたい。この種の調査資料で示されている数量データも「読み取り」方によってはずいぶん豊富な情報を得ていくことができるのだろうが、今回はまさに「通り一遍」の解釈と考察の域を出ていない。この種の調査資料の分析に熟

知していないという筆者の力量不足故のことだが、数年後の継続調査とその取りまとめが可能になった時にはそれらの問題をいささかでも解決していきたいものである。

今回報告した子どもの遊びと日常生活についての調査研究は1985年より地域を限定したいわば「定点観測」の形をとって行われてきたが、当初は2002年の完全学校週5日制の下での子どもたちの生活の様子を調査した後に、この調査結果を含めてまとめて報告する予定であった。しかし、3回分の調査資料を扱うということになると、分量も多くなることもあって一度これまでの資料だけでも整理しておく方がよいと考え、今回このような形でまとめることにした。

今回この論文でまとめたものは、資料の収集も1993年2月には終わり、基本的な資料の整理は1994年の春には一応終わっていた。上でも述べたように、当初の予定を変えたために調査を終えてからいささか時間が経ってしまったという感が否めず、発表のタイミングとしてはあまり良くない。だが、1992年、93年当時は、この種の子どもたちの生活と遊びに関する調査報告は必ずしも多くはなかったのが、この数年の間にずいぶん多くの調査が各種の研究機関で行われるようになり、調査結果を相互に比較することも可能になってきている。そのような意味では、調査を終えてから時間が経ってはいるものの、最近の調査研究の成果を使いながら一つの調査では不十分なところを他の研究で補うことができたというプラスの面もある。従って、今日までに出されている調査研究やその結果について整理をしておくことも本論では必要な作業として位置づけることにした。これらの調査結果については本文のなかで可能な限りとりあげている。

今回、予定を変更して最終的な目標である2002年以降に行う予定の調査を待たずに一時的なまとめを行った別の理由としては、以下のようなこともある。

1992、93年に遊び調査を終えてから6、7年が経っているが、この間、子どもたちの遊びの世界は一層貧困さを増しているように思えてならない。家の中に閉じこもって自分一人のゲームの世界や2、3人だけのカードゲームに興じるのが子どもの遊びの主流になっている。これがさらに下の学年にまで降りてきているのが実感である。本論でもとりあげたベネッセ教育研究所による最近の調査(「子どもたちの遊び」、1998年調査実施)では、放課後、空き缶や石で遊ぶ子どもは時々も含めて16%、なわとび・ゴムとびも同じく12%といったように、少し昔であれば子どもの外遊びとしてお馴染みの光景が消えてしまっている。あるいは、木に登ったことが一度もない子どもが1/3、カブトムシやカエルをつかまえたことや、どろんこ遊び、たき火をした経験となると、半数以上の子どもはしたことがないという結果になっている。この調査は東京、神奈川の首都圏、富山県、高知県の小学生を対象におこなったもので、日頃、自然と接することができない環境の中で生活している者もいることは考慮すべきではあるが、子どもの生活世界とそこで経験することがずいぶんと貧弱になってしまっている。そして子どもどうしの関わりやその経験も同じように実に貧しいものになっている。

学校外の子どもの活動を支えているものもまた、不安定なものである。筆者が住んでいる地域の町内会では数年前までは子ども会活動が活発に行われ、休日や夏休み、冬休みといった機会を利用して子どもたちが交流する機会が多く作られていた。ところが、熱心な指導者が自分の子どもが大きくなったということで身を引く段になって、代わりの中心になるような指導者もあられず、あえなく子ども会は解散ということになってしまった。夏休みの早朝のラジオ体操会だけは老人会が引き受けているが、子どもたちは学校のクラスや同学年の仲間以外と遊んだり、声を掛け合うこともなくなっている。町内の子ども会がこのような形で消滅している所は他にもたくさんある。一方で、子どもたちが休日を過ごすところとしてスポーツ少年団がある。これも

実際には親の熱心な参加と援助によって運営が可能になっており、この親の継続的な参加が断たれると活動は停止してしまうのが実情である。そのために、この種のスポーツ少年団は親の参加への動機を高め、維持するために競技的な性格を強くしていくことになる。それが、子どもたちを休日、「スポーツ漬け」にするということになる。子どもの休日の生活を考えた時に、このスポーツ少年団とそこにおける活動を無視して考えることができない存在になっている。そうすると、子どもの日常生活を研究するということが多岐にわたったものにならざるを得ず、もはや一人の研究者でできることには限界がある。

一人の小学校教師、金森俊郎は学校という場の中で子どもたちを遊びの達人に仕上げようとした。彼の著書「太陽の学校」(1988)はその実践の書である。学校で子どもの遊びまで面倒をみなければならなくなっていること事態が大変な状況なのであるが、理解のある大人の善意で頼るしかない不安定きわまりない「地域」にあっては、学校は依然として期待される場所である。そして小学校区の中で「児童館」を始めとする公共的機関がしかるべき役割を果たしていかない限り、都合のよい大人の善意とボランティア頼みでは地域の教育力などつきようがない。母親の育児支援事業にしても同じである。母親の主體的な参加や運営という言葉で、安上りの行政の下で本来やるべきことを親に肩代わりさせているという現実はいろいろなところで見事なまでに一貫して貫かれている。

最近では小学校区で父親主催による行事が学校を舞台にして行うのがブームになっている。こういった活動に水を差す気持ちはないが、多くの活動は1年に一回程のイベントで、後は父親の親睦で盛り上がり終わりというパターンのようなのだ。

筆者は1999年の5月から10か月間、アメリカ合州国と北欧のフィンランドで文部省の在外研究として滞在する機会があった。米国では、小学校や大学、その他の地域のグラウンドを使って毎週土曜日に父親たちが地域の少年サッカーや少年野球を指導している姿をあちこちでみた。土曜日は休日であることが徹底しているのと、ボランティア活動が当たり前の風潮のなかで、決して競技ばかりに目を奪われないで、子どもの活動を地域で支えていくことが親によって行われていた。他方、北欧のフィンランドでは、充実した保育制度のなかで、学童保育についても地域の中でしっかりとしたものを作られていた。学童のための中心になっているものが、学童保育施設の「プレイグラウンド」である。これは単なる遊具があるだけの遊園地ではなく、専任のスタッフが常駐し、放課後のさまざまな活動ができるような施設で、多彩な活動プログラムが用意されている。また、子どものおやつや軽食を提供するための簡単な調理設備も持っている。地方の「プレイグラウンド」などでは広大な敷地の中でポニーを飼っているところもある。この施設は単に学童のためのものではなく、午前中は地域の子育て支援の機能を果たしており、多目的に使われている。そのために専任スタッフが常駐しているのである。筆者が滞在した首都ヘルシンキは、人口50万人規模の街だが、「プレイグラウンド」が60ほどある。ヘルシンキ市の中心部は人口密度が高い地域だが、公園の一角を利用して多くの「プレイグラウンド」が小学校の近くに建てられていて、小学校3年までは専任のスタッフが学校まで迎えに行き引率してくる。親が仕事が終わるまで、おやつを食べながら、遊んだり、小さなグループに分かれて工作や演劇、時には学習の要素をとり入れた活動をしている。ここには登録していない子どももしばしばやってきて友人と一緒に遊ぶ光景を見かけた。

このような二つの国の子どもに対する関わり方はいずれも日本では決定的に不足しているものである。合州国でもフィンランドでも、日本のことはまずニュースに登場してくることはないが、

「ポケモン」だけは別で、テレビアニメもポケモンカードも子どもには大人気の日本からの輸出品である。合州国では英語版のポケモンカードはおもちゃ屋の店頭に並ぶと直ぐに売り切れになるし、ヘルシンキの保育園ではポケモンのキャラクターが付いたTシャツを着てフィンランド語のポケモンカードで遊んでいる姿を目にした。こういうものしか影響を与えることができない国とはいったい何なのであろうかと思ひ悩まずにはいられない。中沢新一(1997)が「ポケットの中の野生」でどんなに「ポケモン」の世界の面白さと、そこで展開されている収集と交換の原理がレヴィ=ストロースの野生の思考との類縁性をもつことや、アニメ作者の思想性の高さをほめちぎったとしても所詮は、ブラウン管とポケモンカードという薄っぺらな世界の話しではない。

残念ながら、これらの国から私たちはまだ学なければならないし、まずは私たちのまわりにいる子どもたちの生活と遊びの現実きちんと押させていくことから始めたい。

なお、この研究を進めるにあたって、それぞれの調査対象校の池田幸一、中村渡、中村順、川島正夫の各氏から多大な協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。この種の研究は現場教師の協力と援助なしには不可能である。

## 文 献

- ベネッセ教育研究所 1996 ジェンダーバイアス：モノグラフ小学生ナウ16巻1号 ベネッセコーポレーション
- ベネッセ教育研究所 1997 第2回学習基本調査報告書・小学生版(研究所報 Vol.10) ベネッセコーポレーション
- ベネッセ教育研究所 1999 子どもたちの遊び：モノグラフ小学生ナウ19巻1号 ベネッセコーポレーション
- カイヨワ, R. 1967/1990 遊びと人間 多田道太郎・塚崎幹夫訳 講談社 講談社学術文庫
- 藤本浩之輔 1966 ニュータウンにおける子どもの生活と文化(1) 大阪市立大学・人文研究 17(6), 25-51.
- 藤本浩之輔 1967 ニュータウンにおける子どもの生活と文化(2) 大阪市立大学・人文研究 19(4), 42-64.
- 藤本浩之輔 1969 子ども文化の伝播と変容(1) -天下町人考- 大阪市立大学・人文研究 21(1), 64-89.
- 藤本浩之輔 1974a 子ども生活における地域社会 教育社会学研究第29集-特集:地域社会と子ども- 日本教育社会学会 4-17
- 藤本浩之輔 1974b 子ども遊び空間 NHK出版
- 藤本浩之輔・上杉孝實・江阪正巳・柳父立一 1978 地域における子どもの生活と学校外教育の課題-大阪府N小学校区の実態調査にもとづいて- 日本の社会教育(日本社会教育学会)第22巻, 84-106.
- 藤本浩之輔 1985 子ども文化論序説-遊びの文化論的研究- 京都大学教育学部紀要 32, 1-36.
- 深谷和子 1970 子ども遊びと仲間 佐藤忠男・山村賢明 編著 現代社会と子ども 東洋館出版社
- 博報堂生活総合研究所 1997 調査年報1997・子供の生活
- アンリオ, J. 1973/2000 遊び-遊ぶ主体の現象学へ 佐藤信夫訳 白水社
- 池田秀男・山橋澄子 1971 子ども生活と遊びに関する調査研究 徳島大学学芸紀要(教育科学)20巻, 7-38.

- 梶島邦江 1991 子どもたちの生活時間 小川信子編著 子どもと住まい—生活文化としての都市環境—  
勁草書房
- 金森俊郎 1988 太陽の学校 教育史料出版会
- 木全力夫 1986 子どもの組織—その歴史の変容— 教育と医学 34巻7号, 37-44.
- 木下勇 2000 都市における子どもの遊び—遊びから学ぶ 松澤員子編著 子どもの成長と環境 (講座・人間と環境第7巻) 昭和堂
- 子ども調査研究所編 1967 現代子ども白書 三一書房
- 子どもの遊びと街研究会 1999 三世代遊び場図鑑—街が僕らの遊び場だ!— 風土社
- くもん子ども研究所 1995 からざREPORT 第4回くもん子ども調査基本報告書 国立オリンピック記念青少年総合センター編 1997 青少年教育データブック 所収
- 南 博文・吉田直樹 1991 教育空間に関する社会生態学からのアプローチ 広島大学教育学部紀要 第1部第39号, 203-212.
- 文部省 1994 平成5年度「学習塾等に関する実態調査」速報 内外教育・1994年8月2日 所収 時事通信社
- 文部省生涯学習局青少年教育課 1999 子どもの体験学習等に関するアンケート調査報告 教育アンケート調査年鑑1999年上 所収 創育社
- 名古屋市教育委員会青少年室 1998 放課後の生活実態調査 教育アンケート調査年鑑1998年下 所収 創育社
- 内藤裕子 1992 遊び空間復権の試み 山本清洋編著 大都市と子どもたち—遊び空間の現状と課題 日本評論社
- 内藤裕子 2000 都市の遊び場と遊び—ドイツ・アメリカとの比較 松澤員子編著 子どもの成長と環境 (講座・人間と環境第7巻) 昭和堂
- 中西新太郎編 1997 子どもたちのサブカルチャー大研究 労働旬報社
- 中沢新一 1997 ポケットの中の野生 岩波書店
- NHK 1994 小学生の生活と文化調査 総務庁青少年対策本部編 青少年白書平成8年版 所収
- NHK放送文化研究所 1996 データブック・国民生活時間調査1995 日本放送出版協会
- 野上暁 1998 “子ども”というリアル—現代社会のメディアと“もの”がたり— パロル舎
- 小川博久他 1982 子どもの遊びと環境との関係について 家庭教育研究所紀要 (財団法人小平記念会・家庭教育研究所) 3, 1-33.
- 小川博久他 1983 子どもの「遊び」と環境との関係について再論—実地踏査・アンケート調査の比較を通して— 家庭教育研究所紀要 (財団法人小平記念会・家庭教育研究所) 4, 26-66.
- 小川博久 1991 遊びの伝承と実態 無藤隆編著 子どもの遊びと生活 (新・児童心理学講座第11巻) 金子書房
- 岡田英紀・仙田 満 1991 都市化によるこどものあそび環境の変化に関する研究—横浜市における経年比較調査— 1991年度第26回日本都市計画学会学術研究論文集, 61-66.
- 仙田 満 1984a 都市化によるあそび空間の変化の研究 都市計画 126, 87-92.
- 仙田 満 1984b こどものあそび環境—その構造と計画の研究— 筑摩書房
- 仙田 満 1992 子どもとあそび—環境建築家の眼— 岩波書店 岩波新書
- 総務庁青少年対策本部編 1993 情報社会と青少年: 第2回情報社会と青少年に関する調査・報告書 大蔵省印刷局

- 総務庁青少年対策本部 1994 青少年白書・平成5年度版 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部 1996a 青少年白書・平成7年度版 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部 1996b 日本の青少年の生活と意識—青少年の生活と意識に関する基本調査報告書  
— 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部編 1996c 情報社会と青少年：第3回情報社会と青少年に関する調査・報告書 大蔵省印刷局
- 総務庁青少年対策本部 1997 青少年白書・平成8年度版 大蔵省印刷局
- 住田正樹 1990 子どもの遊び文化の変容に関する一考察 九州大学教育学部紀要（教育学部門） 第36集, 31-62.
- 住田正樹 1995 現代社会の変容と子どもの仲間関係 内田伸子・南博文編著 子ども時代を生きる—幼児から児童へ（講座・生涯発達心理学第3巻） 金子書房
- 高橋勇悦 1992 子どもの遊びと地域社会 山本清洋編著 大都市と子どもたち—遊び空間の現状と課題 日本評論社
- 田中治彦・筒井愛知 1997 住民参加による子どもの遊び環境調査—岡山市3学区における実践より— 子ども社会研究 3号, 71-83.
- 東京都 1977 東京都社会福祉基礎調査 総務庁青少年対策本部編 青少年白書平成10年版 所収
- 東京都生活文化局 1999 大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査<東京都子ども基本調査報告書> 教育アンケート調査年鑑2000年上 所収 創育社
- 山本清洋 1992 子どもの生活行動と遊び 山本清洋編著 大都市と子どもたち—遊び空間の現状と課題 日本評論社
- 山本清洋 1996 スポーツと遊び 高橋たまき他編著 遊びの発達学—基礎編— 倍風館
- 山本清洋・福満博隆 1999 現代の子どもの時間に関する意識 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第9巻, 147-154.
- 山本清洋 2000 子どもの時間と遊び 松澤貝子編著 子どもの成長と環境（講座・人間と環境第7巻） 昭和堂
- 山本清洋・福満博隆 2000 子供の遊び空間の分析—時空間とエコロジー— 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 第51巻, 285-295
- 全国保育団体連絡会・保育研究所編 1991 保育白書1991 草土文化
- 全国保育団体連絡会・保育研究所編 1993 保育白書1993 草土文化
- 全国保育団体連絡会・保育研究所編 2000 保育白書2000 草土文化